高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第３集

大宮・宮崎遺跡Ⅰ

1999.3

高知県幡多郡西土佐村教育委員会

巻頭図版

線刻礫（縄文時代後期のヴィーナス像）
Ａ－３グリッド内出土

序

西土佐村は、日本最後の清流四万十川が中央部を流れ、水と緑にかこまれた自然豊かな山村です。面積248㎢、人口約4,000人で、31の集落が点在しています。本流及び支流沿いに発達した耕地は、基盤整備が遅れており、整備が進められています。

平成元年度から県営事業を導入し、整備を進めてまいりましたが、平成８年３月下旬、工事により大量の縄文土器片が露出し、遺跡が確認されました。ただちに村単独事業による第１次緊急発掘調査を実施したところです。

調査に際しましては、春から夏にかけての長期にわたり、始終学究的情熱を傾けていただき、全面的にご指導ご協力をいただきました日本考古学協会会員木村剛朗先生には衷心より感謝申し上げます。また、江坂輝彌先生をはじめとして、ご指導ご助言をいただきました諸先生方には、深く感謝申し上げます。

この報告書につきましては、今後の縄文時代研究のうえでも、大変貴重なものになることと確信しております。この報告書が、埋蔵文化財への村民の方々の一層のご理解と文化財に親しむきっかけとなればと願い、今後における教育・研究の一助となることを期待するものです。

最後になりましたが、今回の調査について、高知県農林水産部耕地課、中村耕地事務所、高知県教育委員会文化財保護室、(財)高知県埋蔵文化財センター、地権者、作業員の皆様方にはご配慮やご協力を、報告書作成につきましては、関係各位に多大なご指導とご教示をいただきました。ここに記して、心から感謝とお礼を申し上げ、ご挨拶といたします。

平成11年３月

西土佐村教育委員会

教育長　横　山　茂　男

例　　言

1．本書は高知県幡多郡西土佐村西土佐地区で平成８年度に行ったほ場整備事業に伴う緊急発掘調査の記録である。
2．本書の執筆は第１章～第６章まで木村剛朗が担当した。
3．本書を作成するに当たり、編集は西土佐村教育委員会社会教育係長芝正司、木村剛朗が行った。
4．発掘調査に際して、測量を西土佐村建設課並びに大宮建設田辺正博が、遺物の記録と遺構の測図を木村剛朗、今城宗久が行った。
5．現場写真は田中繁雄が担当し、遺物の写真を木村剛朗が行った。
6．遺物の整理とその実測図（土器・石器）作成については木村剛朗が行った。ただし石器については多田仁（愛媛県埋蔵文化財調査センター）氏の協力を得た。
7．当遺跡出土遺物並びに記録資料は、西土佐村教育委員会で厳重に管理、保管されている。
8．本調査に当たっては江坂輝彌（慶応義塾大学名誉教授）、岡本健児（高知県文化財保護審議会会長）、小林達雄（国学院大学教授）、岡村道雄（文化庁主任調査官）、下條信行（愛媛大学教授）、森光晴（愛媛県考古学協会会長）諸先生より有益なるご指導、助言をいただき、特に線刻礫については江坂輝彌先生に、第６章の縄文祭祀については岡本健児先生より全面的にご教示いただいた。また、中・近世遺物については高知県文化財団埋蔵文化財センター松田直則氏に鑑定いただき、犬飼徹夫（愛媛県考古学協会副会長）、今田秀樹（大分県天瀬町教育委員会）、岡本桂典（高知県立歴史民俗資料館学芸員）諸氏には文献資料についてご協力を得た。ここに銘記し感謝の意を表する次第である。

目　　次

巻頭図版
序　　文
例　　言
第1章　序　　説 …… 1
（Ⅰ）遺跡発見の動機と調査に至る経緯 …… 1
（Ⅱ）調査の組織 …… 1
第2章　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第3章　遺跡及び調査の経過 …… 10
第4章　層　　序 …… 26
第5章　遺構と遺物 …… 29
A．中世・近世の遺構と遺物 …… 29
（Ⅰ）遺　　構 …… 29
（a）柱穴群 …… 29
（b）集石遺構 …… 29
（c）溝状遺構 …… 29
（Ⅱ）遺　　物 …… 35
（a）青　　磁 …… 35
（b）白　　磁 …… 35
（c）染　　付 …… 35
（d）備前焼 …… 38
（e）伊万里系・肥前系・瀬戸系・唐津系 …… 41
（f）鉛　　玉 …… 41
（g）銭　　貨 …… 41

B．縄文時代の遺構と遺物 …… 42
（1）A－0区の出土遺物 …… 42
（2）A－1区の出土遺物 …… 50
（3）A－2区の遺構と出土遺物 …… 61
（4）A－3区の遺構と出土遺物 …… 75
（5）A－2区・A－3区表採遺物 …… 97
（6）A－4区の遺構と出土遺物 …… 119
（7）A－5区の出土遺物 …… 135
（8）B－0区の出土遺物 …… 143
（9）B－1区の出土遺物 …… 147
（10）B－2区の遺構と出土遺物 …… 153

(11) B－3区の遺構と出土遺物…… 167
(12) B－4区の出土遺物…… 199
(13) B－5区の遺構と出土遺物…… 211
(14) C－0区の出土遺物…… 227
(15) C－1区の出土遺物…… 227
(16) C－2区の遺構と出土遺物…… 227
(17) C－3区の遺構と出土遺物…… 233
(18) C－4区の遺構と出土遺物…… 239
(19) C－5区の出土遺物…… 247

第6章　考　　察 …… 255
中世・近世 …… 255
縄文時代・土器 …… 255
縄文時代・石器 …… 264
縄文時代・配石遺構 …… 269

挿　図　目　次

第１図　大宮・宮崎遺跡の位置と西土佐村の縄文遺跡分布図 …… 3
第２図　西土佐村周辺の主要縄文遺跡分布図 …… 7
第３図　発見当時の大宮・宮崎遺跡（配石の一部が露出し見られる）…… 10
第４図　大宮・宮崎遺跡地形図と発掘調査区…… 11
第５図　調査区グリッド配置平面図…… 12
第６図　Ａ－１区に出土の伊吹町式深鉢胴部片…… 12
第７図　Ａ－２区に検出の配石遺構…… 13
第８図　Ａ－３区に検出された配石面に出土の片粕式土器深鉢口縁部片…… 13
第９図　Ｂ－２区に検出された柱穴跡…… 14
第10図　線刻礫発見時の状況と関係メンバー…… 14
第11図　Ｂ－２区に検出の柱穴群…… 15
第12図　Ｂ－１区に検出の小礫群…… 15
第13図　Ａ－３区に出土の片粕式深鉢口縁部片…… 16
第14図　Ｂ－４区に出土の水晶出土状況…… 16
第15図　Ｂ－３区の遺物出土状況…… 17
第16図　Ｃ－４区に出土の擂鉢片出土状況…… 17
第17図　Ｃ－４区に出土のサヌカイト製石鏃出土状況…… 18
第18図　Ｂ－０区に出土の羽島下層式土器片出土状況…… 18
第19図　Ｂ－５区に検出の柱穴跡と染付碗底部片出土状況…… 18
第20図　Ｂ－５区に出土の姫島産黒曜石製石鏃出土状況…… 19
第21図　Ｃ－５区に検出の溝状遺構…… 20
第22図　Ｃ－２区に出土の鉛玉出土状況…… 20
第23図　Ａ－４区に検出の配石遺構と遺物出土状況…… 21
第24図　Ａ－４区配石遺構内に出土の伊吹町式深鉢胴部片とサヌカイト製石鏃出土状況…… 21
第25図　Ａ－４区配石遺構内に出土の平城Ⅰ式深鉢胴部片出土状況…… 22
第26図　Ａ－４区配石遺構内に出土の中村Ⅱ式深鉢口縁部片出土状況…… 22
第27図　Ａ－５区の石皿、磨石出土状況…… 22
第28図　Ｂ－３区の伊吹町式深鉢口縁部片出土状況…… 23
第29図　Ｂ－５区に検出の配石遺構…… 24
第30図　Ｂ－３区に検出の配石遺構…… 24
第31図　Ａ－３区ベルト西壁面に出土の伊吹町式深鉢胴部片…… 25
第32図　遺跡前面段差確認のトレンチ状況…… 25
第33図　調査区地層断面実測図…… 27～28
第34図　中・近世の各遺構検出配置実測図…… 31

第35図　Ｃ－１区～Ｃ－２区検出の集石遺構実測図…… 32
第36図　Ｂ－１区検出の集石遺構実測図…… 33
第37図　Ｃ－５区に検出の溝状遺構実測図…… 34
第38図　中世の遺物実測図…… 36
第39図　中世・近世の遺物実測図…… 37
第40図　Ｃ－３区・Ｃ－４区備前焼擂鉢片出土分布図…… 38
第41図　大宮・宮崎遺跡出土備前焼擂鉢…… 39
第42図　大宮・宮崎遺跡出土備前焼擂鉢・甕・壺…… 40
第43図　配石遺構検出全体配置実測図…… 43
第44図　出土遺物平面全体分布実測図…… 44
第45図　Ａ－０区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 45
第46図　大宮・宮崎遺跡Ａ－０区出土土器…… 46
第47図　大宮・宮崎遺跡Ａ－０区出土土器…… 47
第48図　大宮・宮崎遺跡Ａ－０区出土石器…… 48
第49図　Ａ－１区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 51
第50図　大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土土器…… 52
第51図　大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土土器…… 53
第52図　大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土土器…… 54
第53図　大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土土器…… 55
第54図　大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土石器…… 56
第55図　大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土石器…… 57
第56図　Ａ－２区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 62
第57図　第１号、第２号配石遺構実測図…… 63
第58図　第３号、第４号配石遺構実測図…… 64
第59図　大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土土器…… 66
第60図　大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土土器…… 67
第61図　大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土土器…… 68
第62図　大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土土器…… 69
第63図　大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土石器…… 70
第64図　大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土石器…… 71
第65図　Ａ－３区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 75
第66図　第５号、第６号、第７号配石遺構実測図…… 76
第67図　第８号配石遺構実測図…… 77
第68図　第９号配石遺構実測図…… 78
第69図　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土土器…… 81
第70図　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土土器…… 82

第71図　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土土器…… 83
第72図　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土土器…… 84
第73図　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土土器…… 85
第74図　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土石器…… 87
第75図　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土石器…… 88
第76図　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土石器…… 89
第77図　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土石器…… 90
第78図　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土石器…… 91
第79図　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区表採の線刻礫…… 97
第80図　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２・Ａ－３区）表採土器 …… 101
第81図　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２・Ａ－３区）表採土器 …… 102
第82図　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２・Ａ－３区）表採土器 …… 103
第83図　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２・Ａ－３区）表採土器 …… 104
第84図　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２・Ａ－３区）表採土器 …… 105
第85図　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２・Ａ－３区）表採土器 …… 106
第86図　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２・Ａ－３区）表採土器 …… 107
第87図　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２・Ａ－３区）表採土器 …… 108
第88図　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２・Ａ－３区）表採石器 …… 110
第89図　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２・Ａ－３区）表採石器 …… 111
第90図　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２・Ａ－３区）表採石器 …… 112
第91図　Ａ－４区出土遺物平面、垂直分布実測図 …… 120
第92図　第10号配石遺構実測図 …… 121
第93図　大宮・宮崎遺跡Ａ－４区出土土器 …… 123
第94図　大宮・宮崎遺跡Ａ－４区出土土器 …… 124
第95図　大宮・宮崎遺跡Ａ－４区出土土器 …… 125
第96図　大宮・宮崎遺跡Ａ－４区出土土器 …… 126
第97図　大宮・宮崎遺跡Ａ－４区出土土器 …… 127
第98図　大宮・宮崎遺跡Ａ－４区出土石器 …… 129
第99図　大宮・宮崎遺跡Ａ－４区出土石器 …… 130
第100図　大宮・宮崎遺跡Ａ－４区出土石器…… 135
第101図　Ａ－５区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 136
第102図　大宮・宮崎遺跡Ａ－５区出土土器…… 137
第103図　大宮・宮崎遺跡Ａ－５区出土土器…… 138
第104図　大宮・宮崎遺跡Ａ－５区出土石器…… 140
第105図　大宮・宮崎遺跡Ａ－５区出土石器…… 141
第106図　Ｂ－０区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 144

第107図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－０区出土土器・石器…… 145
第108図　Ｂ－１区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 148
第109図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－１区出土土器…… 149
第110図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－１区出土土器・石器…… 150
第111図　Ｂ－２区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 154
第112図　第11号配石遺構実測図…… 155
第113図　第12号配石遺構実測図…… 156
第114図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－２区出土土器…… 158
第115図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－２区出土土器…… 159
第116図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－２区出土土器…… 160
第117図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－２区出土石器…… 162
第118図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－２区出土石器…… 163
第119図　Ｂ－３区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 167
第120図　第13号配石遺構実測図…… 168
第121図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器…… 171
第122図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器…… 172
第123図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器…… 173
第124図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器…… 176
第125図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器…… 177
第126図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器…… 178
第127図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器…… 179
第128図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器…… 180
第129図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器…… 181
第130図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器…… 182
第131図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器…… 183
第132図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土石器…… 185
第133図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土石器…… 186
第134図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土石器…… 187
第135図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土石器…… 188
第136図　Ｂ－４区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 200
第137図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－４区出土土器…… 202
第138図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－４区出土土器…… 203
第139図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－４区出土土器…… 204
第140図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－４区出土石器…… 205
第141図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－４区出土石器…… 206
第142図　Ｂ－５区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 211

第143図　第14号配石遺構実測図…… 212
第144図　第15号配石遺構実測図…… 213
第145図　第16号配石遺構実測図…… 214
第146図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－５区出土土器…… 216
第147図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－５区出土土器…… 217
第148図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－５区出土土器…… 218
第149図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－５区出土石器…… 220
第150図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－５区出土石器…… 221
第151図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－５区出土石器…… 222
第152図　大宮・宮崎遺跡Ｂ－５区出土石器…… 223
第153図　Ｃ－０区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 228
第154図　Ｃ－２区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 229
第155図　第17号配石遺構実測図…… 230
第156図　大宮・宮崎遺跡Ｃ－０区・Ｃ－２区出土土器、石器…… 231
第157図　Ｃ－３区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 234
第158図　第18号配石遺構実測図…… 235
第159図　大宮・宮崎遺跡Ｃ－３区出土土器…… 236
第160図　大宮・宮崎遺跡Ｃ－３区出土石器…… 237
第161図　Ｃ－４区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 240
第162図　第19号配石遺構実測図…… 242
第163図　大宮・宮崎遺跡Ｃ－４区出土土器・石器…… 243
第164図　大宮・宮崎遺跡Ｃ－４区出土石器…… 244
第165図　Ｃ－５区出土遺物平面、垂直分布実測図…… 247
第166図　大宮・宮崎遺跡Ｃ－５区出土土器…… 249
第167図　大宮・宮崎遺跡Ｃ－５区出土石器…… 250
第168図　大宮・宮崎遺跡Ｃ－５区出土石器…… 251
第169図　丸石と文様石…… 252
第170図　大宮・宮崎遺跡出土縄文土器（第１類～第６類）比率図…… 256
第171図　四国西南部の平城Ｉ式土器出土遺跡分布図…… 257
第172図　四国西南部を中心とした片粕式土器出土遺跡分布図…… 258
第173図　四国西南部の広瀬上層式土器出土遺跡分布図…… 259
第174図　四国西南部の伊吹町式土器出土遺跡分布図…… 260
第175図　四国西南部の大宮・宮崎Ｋ式土器出土遺跡分布図…… 262
第176図　四国西南部の中村Ｉ・Ⅱ式土器出土遺跡分布図…… 263
第177図　大宮・宮崎遺跡出土石器比率図…… 266
第178図　他県にみる類似配石遺構と線刻礫…… 268

付　表　目　次

第１表　西土佐村の縄文遺跡と出土遺物一覧表 …… 4
第２表　大宮・宮崎遺跡Ａ－０区出土土器観察表…… 49
第３表　大宮・宮崎遺跡Ａ－０区出土石器観察表…… 49
第４表　大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土土器観察表…… 58
第５表　大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土土器観察表…… 59
第６表　大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土石器観察表…… 60
第７表　大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土土器観察表…… 72
第８表　大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土土器観察表…… 73
第９表　大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土石器観察表…… 74
第10表　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土土器観察表…… 92
第11表　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土土器観察表…… 93
第12表　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土土器観察表…… 94
第13表　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土土器観察表…… 95
第14表　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土石器観察表…… 95
第15表　大宮・宮崎遺跡Ａ－３区出土石器観察表…… 96
第16表　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２区・Ａ－３区）表採土器観察表 …… 113
第17表　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２区・Ａ－３区）表採土器観察表 …… 114
第18表　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２区・Ａ－３区）表採土器観察表 …… 115
第19表　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２区・Ａ－３区）表採土器観察表 …… 116
第20表　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２区・Ａ－３区）表採土器観察表 …… 117
第21表　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２区・Ａ－３区）表採土器観察表 …… 118
第22表　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２区・Ａ－３区）表採石器観察表 …… 118
第23表　大宮・宮崎遺跡発見時（Ａ－２区・Ａ－３区）表採石器観察表 …… 119
第24表　大宮・宮崎遺跡Ａ－４区出土土器観察表 …… 131
第25表　大宮・宮崎遺跡Ａ－４区出土土器観察表 …… 132
第26表　大宮・宮崎遺跡Ａ－４区出土土器観察表 …… 133
第27表　大宮・宮崎遺跡Ａ－４区出土石器観察表 …… 134
第28表　大宮・宮崎遺跡Ａ－５区出土土器観察表 …… 142
第29表　大宮・宮崎遺跡Ａ－５区出土石器観察表 …… 143
第30表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－０区出土土器観察表 …… 146
第31表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－０区出土石器観察表 …… 146
第32表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－１区出土土器観察表 …… 152
第33表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－１区出土土器観察表 …… 153
第34表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－１区出土石器観察表 …… 153

第35表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－２区出土土器観察表 …… 164
第36表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－２区出土土器観察表 …… 165
第37表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－２区出土土器観察表 …… 166
第38表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－２区出土石器観察表 …… 166
第39表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器観察表 …… 189
第40表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器観察表 …… 190
第41表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器観察表 …… 191
第42表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器観察表 …… 192
第43表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器観察表 …… 193
第44表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器観察表 …… 194
第45表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器観察表 …… 195
第46表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器観察表 …… 196
第47表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土土器観察表 …… 197
第48表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土石器観察表 …… 197
第49表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土石器観察表 …… 198
第50表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－３区出土石器観察表 …… 199
第51表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－４区出土土器観察表 …… 207
第52表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－４区出土土器観察表 …… 208
第53表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－４区出土土器観察表 …… 209
第54表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－４区出土石器観察表 …… 209
第55表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－４区出土石器観察表 …… 210
第56表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－５区出土土器観察表 …… 224
第57表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－５区出土土器観察表 …… 225
第58表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－５区出土石器観察表 …… 226
第59表　大宮・宮崎遺跡Ｂ－５区出土石器観察表 …… 227
第60表　大宮・宮崎遺跡Ｃ－０区出土土器観察表 …… 232
第61表　大宮・宮崎遺跡Ｃ－２区出土土器観察表 …… 232
第62表　大宮・宮崎遺跡Ｃ－２区出土石器観察表 …… 232
第63表　大宮・宮崎遺跡Ｃ－３区出土土器観察表 …… 238
第64表　大宮・宮崎遺跡Ｃ－３区出土石器観察表 …… 238
第65表　大宮・宮崎遺跡Ｃ－４区出土土器観察表 …… 245
第66表　大宮・宮崎遺跡Ｃ－４区出土石器観察表 …… 246
第67表　大宮・宮崎遺跡Ｃ－５区出土土器観察表 …… 253
第68表　大宮・宮崎遺跡Ｃ－５区出土石器観察表 …… 254
第69表　石質別にみた大宮・宮崎遺跡出土石器一覧表 …… 265
第70表　大宮・宮崎遺跡配石遺構内出土土器一覧表 …… 271

写真図版目次

ＰＬ．１　(1) 大宮・宮崎遺跡全景 …… 1
(2) 発掘調査風景
ＰＬ．２　(1) 基準的層序（Ｂ－４区南壁） …… 2
(2) 基準的層序（Ａ－１区南壁）
(3) Ａ－３区東側地点掘り下げ最深部礫層確認状況
ＰＬ．３　(1) Ｃ－４区の備前焼擂鉢片出土状況 …… 4
(2) Ｃ－４区の備前焼擂鉢片出土状況
(3) Ａ－３区の第５Ｂ類浅鉢口縁部片出土状況
(4) Ａ－１区の第４Ｄ類深鉢口縁部片出土状況
ＰＬ．４　(1) Ｂ－３区の第４Ｄ類深鉢口縁部片出土状況 …… 4
(2) Ｂ－３区の第４Ｄ類深鉢口縁部片出土状況
ＰＬ．５　(1) Ａ－３区の第４Ｄ類深鉢胴部片出土状況 …… 5
(2) Ａ－３区の第４Ｂ類浅鉢口縁部片出土状況
(3) Ａ－３区の第４Ｅ類深鉢口縁部片出土状況
(4) Ａ－３区の第４Ｂ類深鉢口縁部片出土状況
ＰＬ．６　(1) Ａ－３区の第４Ｂ類浅鉢口縁部片出土状況 …… 6
(2) Ｂ－３区の第４Ａ類深鉢胴部片（右下）・第４Ｃ類深鉢胴部片（左上）出土状況
(3) Ｃ－５区の石材核出土状況
(4) Ａ－０区の磨石・叩石出土状況
ＰＬ．７　(1) Ａ－２区検出の第１号配石遺構（東方から） …… 7
(2) Ａ－２区検出の第２号配石遺構（東方から）
ＰＬ．８　(1) Ａ－２区検出の第３号配石遺構（東方から） …… 8
(2) Ａ－２区検出の第４号配石遺構（西方から）
ＰＬ．９　(1) Ａ－３区検出の第５号配石遺構（東方から） …… 9
(2) Ａ－３区検出の第６号配石遺構（北方から）
ＰＬ．10　(1) Ａ－３区検出の第７号配石遺構（東方から） …… 10
(2) Ａ－３区検出の第８号配石遺構（東方から）
ＰＬ．11　(1) Ａ－４区検出の第９号配石遺構（東方から） …… 11
(2) Ｂ－２区検出の第12号配石遺構（南方から）
ＰＬ．12　(1) Ａ－４区検出の第10号配石遺構（東方から） …… 12
(2) 第10号配石遺構内に出土の焼け石（中央扁平礫）
ＰＬ．13　(1) Ｂ－３区検出の第13号配石遺構（北方から） …… 13
(2) 第13号配石遺構周辺の礫石出土状況（北方から）

ＰＬ.14　(1) Ｂ－５区検出の第14号配石遺構（南方から）…… 14
(2) Ｂ－５区検出の第16号配石遺構（東方から）
ＰＬ.15　(1) Ｃ－２区検出の第17号配石遺構（南方から）…… 15
(2) Ｃ－３・４区検出の第18号（左上）、第19号（左下）配石遺構（北東から）
ＰＬ.16　配石遺構全景（西方から）…… 16
ＰＬ.17　配石遺構全景（南方から）、配石遺構中心部近景（南方から）…… 17
ＰＬ.18　中世の遺物…… 18
ＰＬ.19　中世の遺物…… 19
ＰＬ.20　中世・近世の遺物…… 20
ＰＬ.21　擂鉢（備前焼）…… 21
ＰＬ.22　擂鉢・甕・壺（備前焼）…… 22
ＰＬ.23　上段：鉛玉　　下段：銭貨…… 23
ＰＬ.24　第１類城ノ台式土器（上段左側）、第２Ａ類羽島下層式土器（上段中央・右側）…… 24
第２Ｂ類轟Ｂ式土器（下段左側）、第３類船元式土器（下段右側）
ＰＬ.25　上段：第４Ａ類平城Ⅰ式土器深鉢口縁・胴部片…… 25
下段：第４Ｂ類片粕式土器深鉢口縁部片
ＰＬ.26　第４Ｂ類片粕式土器深鉢口縁部片…… 26
ＰＬ.27　第４Ｂ類片粕式土器深鉢口縁部片…… 27
ＰＬ.28　第４Ｂ類片粕式土器深鉢胴部片…… 28
ＰＬ.29　第４Ｂ類片粕式土器深鉢・浅鉢口縁部片…… 29
ＰＬ.30　第４Ｃ類広瀬上層式土器深鉢口縁・胴部片…… 30
ＰＬ.31　第４Ｃ類広瀬上層式土器深鉢口縁部片…… 31
ＰＬ.32　第４Ｄ類伊吹町式土器深鉢波状口縁・平口縁部片…… 32
ＰＬ.33　第４Ｄ類伊吹町式土器深鉢平口縁部片…… 33
ＰＬ.34　第４Ｄ類伊吹町式土器深鉢胴部片…… 34
ＰＬ.35　第４Ｄ類伊吹町式土器深鉢胴部片…… 35
ＰＬ.36　上段：第４Ｄ類伊吹町式土器浅鉢口縁部片　　下段：第４Ｅ類深鉢口縁・胴部片…… 36
ＰＬ.37　上段：第４Ｅ類深鉢胴部片　　下段：第５Ａ類大宮・宮崎Ｋ式土器深鉢口縁部片…… 37
ＰＬ.38　第５Ａ類大宮・宮崎Ｋ式土器深鉢平口縁・波状口縁・胴部片…… 38
ＰＬ.39　第５Ａ類大宮・宮崎Ｋ式土器深鉢平口縁部片…… 39
ＰＬ.40　上段：第５Ｂ類大宮・宮崎Ｋ式土器浅鉢口縁・胴部片…… 40
下段：第５Ｃ類無文土器深鉢波状・平口縁部片
ＰＬ.41　上段：第５Ｃ類無文土器深鉢平口縁部片…… 41
下段：注口土器口縁部・胴部・注口部片
ＰＬ.42　第６Ａ類中村Ⅰ式土器（上段左側と中央）深鉢口縁部片…… 42
第６Ｂ類中村Ⅱ式土器（上段右側と下段）深鉢口縁部片

ＰＬ.43　底部片 …… 43
ＰＬ.44　石材核（左側、サヌカイト製） …… 44
ＰＬ.45　石材核 …… 45
ＰＬ.46　石材核 …… 46
ＰＬ.47　石材核 …… 47
ＰＬ.48　石材核 …… 48
ＰＬ.49　石材核 …… 49
ＰＬ.50　石材核 …… 50
ＰＬ.51　石材核 …… 51
ＰＬ.52　石棒 …… 52
ＰＬ.53　磨石 …… 53
ＰＬ.54　叩石・磨石 …… 54
ＰＬ.55　上段：叩石・磨石　　下段：左側は磨石、右側は石皿 …… 55
ＰＬ.56　叩石 …… 56
ＰＬ.57　上・中段：石鏃　　下段：右側は尖頭状石器、右から２列目は石錐、他は石鏃 …… 57
ＰＬ.58　石錘 …… 58
ＰＬ.59　上段：打製石斧　　下段：磨製石斧 …… 59
ＰＬ.60　スクレイパー …… 60
ＰＬ.61　スクレイパー、石錐、楔形石器 …… 61
ＰＬ.62　上段：サヌカイト剥片　　下段：姫島産黒曜石剥片 …… 62
ＰＬ.63　江坂輝彌先生（前列左から４人目）を囲む調査関係者と、高知県教育委員会
文化財保護室・埋蔵文化財センターの皆さん …… 63

第1章　序　　説

（Ⅰ）　遺跡発見の動機と調査に至る経緯

平成7年に着手された西土佐地区ほ場整備宮崎工区工事によって水田面が広範囲に削除され、その表面に大量の縄文土器片が露出しているのを偶然、地元文化財保護審議会委員今城宗久、大宮建設田辺正博両氏が平成8年3月下旬に見つけ遺跡発見に至ったものである。

発見当初の遺物について、今城氏は一早く西土佐村教育委員会に通報し、村教育委員会も現場を視察され、その確認を行っている。重要性を認めた村教育委員会は正確な出土遺物の鑑定と遺跡の価値判断について日本考古学協会会員木村剛朗に依頼した。木村は、その要請を受け、早速現場へと駆け着け状況把握に努めた。発見現場とされる個所には、縄文期の文化層が広範に露出してみられ、そこには大量の土器破片が散在し、しかも人頭大の河原石を人工的に敷き並べられた跡も確認され、この地が配石遺構を伴う極めて稀な重要遺跡であることが判明した。また工事は再度この個所に及ぶことが明らかとなり、遺跡、遺構の破壊はまぬがれぬため緊急発掘調査を即刻実施することに踏み切ったのである。

（Ⅱ）　調査の組織

調査主体	西土佐村教育委員会	教育長	横山　茂男
		教育次長	榊木　久夫
		社会教育係長	田中　繁雄
		社会教育主査	五味八千代
		学校教育係長	岡村　好文
調査担当者	日本考古学協会会員		木村　剛朗
調査補助員	西土佐村文化財保護審議会委員		今城　宗久
作業員	岡村　洋子、岡村すみ子、久保田幸代、石本美代子、岡村恵美子 竹葉久仁恵、岡村　正己、岡村　浩明、佐田喜代子、岡村　正光 岡村　恵子、岡山　敬子、濱田　　薫、宮本　幸枝、井上　　治		

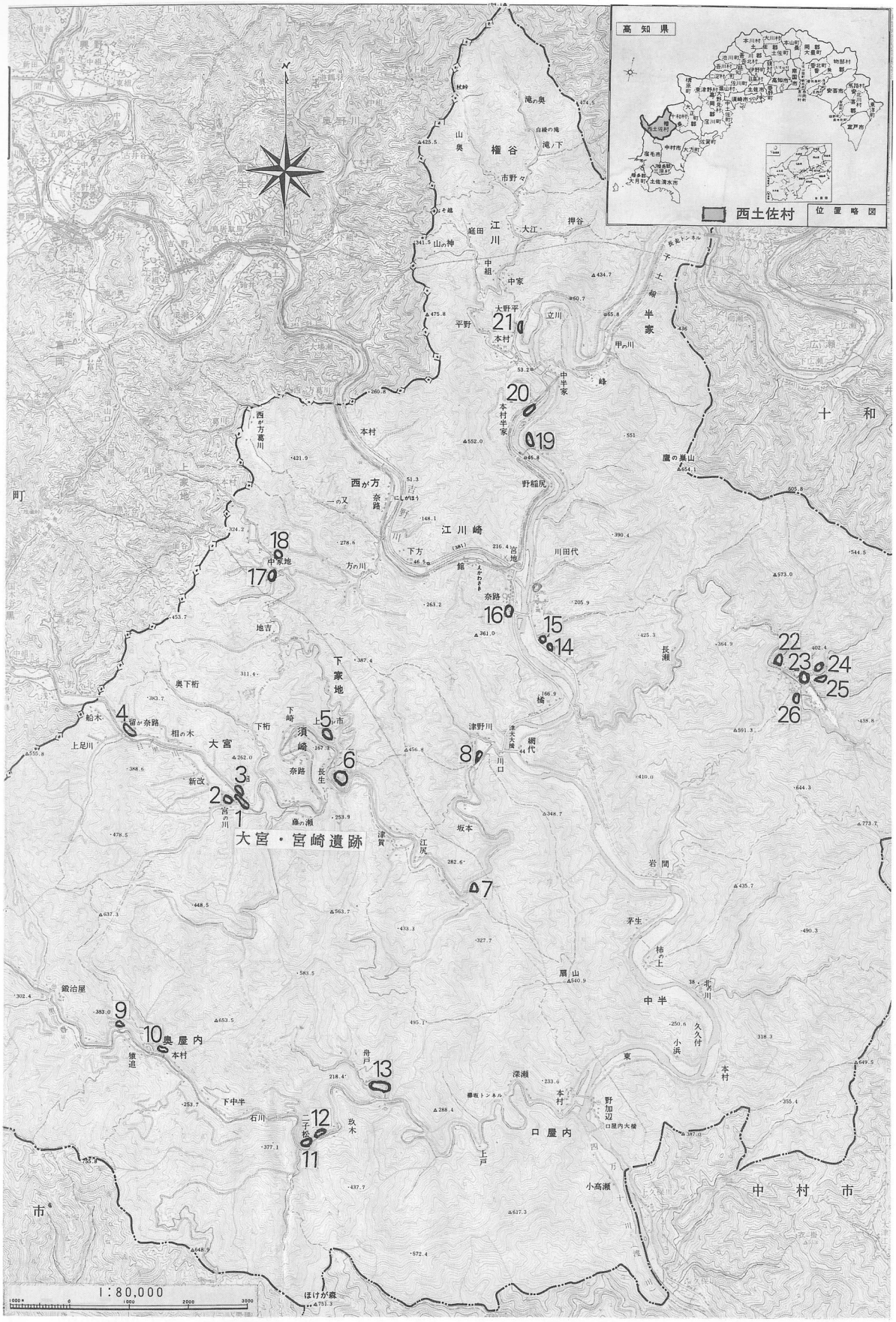
以上であるが、犬飼徹夫（愛媛県考古学協会副会長）氏には調査期間の上半期を現場に従事していただき、調査指揮、遺物整理など、重要任務をこなしていただいた。

第２章　遺跡の位置と周辺の遺跡

大宮・宮崎遺跡は高知県西南部の内陸山地に位置し、高知県幡多郡西土佐村大宮・宮崎に所在する（第１図)。村内のほぼ中央部を県下最大の河川、四万十川が北から南方へと貫流し、さらに本河川は蛇行を繰り返しながら約25㎞の距離を南流し太平洋へと清流を注いでいる。遺跡は、ちょうど四万十川の中下流地帯に合流する本河川の支流、目黒川右岸に形成する河岸段丘上麓野に発達する平地、標高122.50ｍ前後に立地し、目黒川との比高差約６ｍ前後を測る。遺跡の南側背後には標高400ｍ級の山列が続き、その北斜面より流れる谷川２筋が本遺跡のすぐ下流で目黒川へと注いでいる。谷川が合流するこのあたりは、緩やかに傾斜する平坦面が広がり、しかも日当たりは良く生活するには最良の環境を有する。現在、この平坦面は水田として活用されているが、目黒川流域には約130ヘクタールの水田がみられ、中でも大宮地区には良田が広がり西土佐村第一の穀倉地帯となっている。

遺跡前面を流れる目黒川は、愛媛県側にそびえる高月山（標高1229）から郭公山（標高1010）の南斜面に源を発し、東流しながら徐々に方向を南へと移し、愛媛県北宇和郡松野町あたりからさらに東南方向へと変え、西土佐村須崎地区で極たんに蛇行を強めて繰り返し津野川で本流の四万十川へと清流を注ぎ合流する。本河川の上流から中流域の河床は、滑らかに摩滅した岩盤を露出するが、中流域から下流域にかけては所々に河原の形成が見られる。それらの河原に見られる礫石は拳大から人頭大を有し、表面はよく水磨され滑らかとなっている。石質は頁岩や砂岩、花崗岩、粘板岩などであるが、特に花崗岩と頁岩が多数見られ大きな特徴となっている。この花崗岩は、目黒川上流域の高月山、鬼ヶ城山（標高1151）に良好な岩脈を有することから、その地域から崩落、流出したものとみられている。なお、目黒川の最上流には風光明媚な景勝地として知られる滑床渓谷が所在する。ここの岩質も大部分が花崗岩と頁岩で占められ、豊かな岩脈の形成を見ることができるのである。

以上、本遺跡は前述もしたとおり西南四国の内陸山地に所在するのであるが、西土佐村を含む高知県西南部は、県下において縄文遺跡の最も多い地域として知られている所である。その分布は、四万十川流域と海岸部の二つの地域に大別される。西土佐村は記述のとおり四万十川の中下流地帯に位置し、西南地域における市町村別にみた遺跡分布密度において決して引けをとるものでなく、上流側に隣接する十和村に並び中位にランクされる。ただ、遺憾なことに発掘調査された縄文遺跡は過去に一例もなく、その全容が解明された遺跡はない。現在、村内で明らかな縄文遺跡と出土遺物を記したのが第１表で、第１図はその分布図である。これによると遺跡は四万十川本流に比べ、黒尊川や目黒川の支流に多くが並列し存在する。また、遺跡のほとんどが河岸段丘上に立地し、それらは狩猟時のキャンプサイトとして機能した小規模遺跡で占められている。遺物も総てが表面採集によるものであり、各遺跡に見る遺物も少ない。とはいうものの、これらの中には注目すべきものも少なからず含まれている。その一つは堂ヶ市遺跡[1]の局部磨製石斧と広井駄場遺跡[2]の大型木葉形尖頭器、長崎遺跡[3]の細石鏃などが挙げられる。これらは形態、作りの特徴から縄文草創期～



第１図　大宮・宮崎遺跡の位置と西土佐村の縄文遺跡分布図

西土佐村の縄文遺跡と出土遺物一覧（第１表）

遺跡No.	遺跡名	出土遺物	参考文献・備考
1	大宮・宮崎	（早・前・中・後・晩期）縄文土器片・石棒・線刻礫・石斧・石鏃・スクレイパー・石錘・叩石・磨石・石皿等	配石遺構を伴う祭祀遺跡
2	大宮	（前期）石鏃・叩石・姫島産黒曜石剥片・石材核・環状石斧	木村剛朗「大宮遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年
3	深田	（後期）石材核・石器剥片	高知県教育委員会『高知県遺跡地図・幡多ブロック』昭和63年
4	留ケ奈路	（後期）石材核・石器剥片	今城宗久氏の表採資料による
5	上藪ヶ市	（後期）石材核・石器剥片・石匙・縄文土器片	木村剛朗「上藪ヶ市遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年、今城宗久氏表採資料による
6	長崎	（早期）石鏃・石材核・石器剥片	今城宗久氏発見、表採資料による
7	下津賀	（前期）スクレイパー・握斧状石器・石材核・叩石・石器剥片	木村剛朗「下津賀遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年
8	沖	（早期・前期）握斧状石器・石錐・石材核・石器剥片	木村剛朗「沖遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年
9	城ノ下	（後期）石鏃・石器剥片	高知県教育委員会『高知県遺跡地図、幡多ブロック』昭和63年
10	奥屋内本村	（後期）石器剥片	今城宗久氏発見、資料による
11	曽我の西	（後期）宿毛式・平城式土器片、石鏃・石錘・打製石斧・磨製石斧・叩石・スクレイパー・石材核・石器剥片	木村剛朗「曽我の西遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年
12	下久保	（後期）石器剥片	高知県教育委員会『高知県遺跡地図、幡多ブロック』昭和63年
13	広井駄場	（旧石器後期・縄文草創期・早・前・中・後期）大型木葉形尖頭器・尖頭状石器・石鏃・スクレイパー・石錘・石材核・姫島産黒曜石剥片・石器剥片・細石核	木村剛朗「広井駄場遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年 山口将仁「高知県における後期旧石器時代の様相」『旧石器考古学』41、旧石器文化談話会、平成２年
14	平口	（後期）石器剥片・叩石	高知県教育委員会『高知県遺跡地図、幡多ブロック』昭和63年

遺跡No.	遺跡名	出土遺物	参考文献・備考
15	奈路	（後期）石器剥片	高知県教育委員会『高知県遺跡地図、幡多ブロック』昭和63年
16	車木	（後期）スクレイパー、石器剥片	今城宗久氏発見資料による
17	西クイ原	（後期）石鏃・スクレイパー・石器剥片、中津式土器片	高知県教育委員会『高知県遺跡地図、幡多ブロック』昭和63年 今城、木村表採資料による
18	長生	（後期）石器剥片	高知県教育委員会『高知県遺跡地図、幡多ブロック』昭和63年
20	本村半家	（後期）縄文土器片、石鏃・叩石・石錘・磨石・石材核・姫島産黒曜石剥片	高知県教育委員会『高知県遺跡地図、幡多ブロック』昭和63年 今城宗久氏表採資料
21	本村	（後期）石器剥片	今城宗久氏発見表採資料による
22	堂ヶ市	（草創期・早・中期）局部磨製石斧・両頭石斧・石鏃・叩石・石器剥片・繊維混入土器片	木村剛朗「堂ヶ市遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年 岡本健児『高知県史考古編』高知県、昭和43年
23	尾崎	（後期）石器剥片	今城宗久氏発見、表採資料による
24	棟屋敷	（早・前期）スクレイパー・石器剥片	木村剛朗「棟屋敷遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年
25	白髪山	（後期）スクレイパー・石器剥片	今城宗久氏発見、表採資料による
26	胡麻谷	（後期）スクレイパー・姫島産黒曜石剥片	今城宗久氏発見、表採資料による

早期のものと編年位置付けされるもので、しかも、その資料は完形品であるところにも価値がある。なお、広井駄場遺跡からは先の尖頭器の他、縄文早期に属する小型の尖頭状石器５点の出土と細石核１点[4]がある。この細石核は縄文期以前の旧石器時代後期末のものであり、本資料が現時点では村内最古の遺物とされるものである。前者の堂ヶ市遺跡出土と推定されているもので、現在、河内神社の御神宝となっている大型両頭石斧１点があるが、これは縄文中期に編年され、県下で２例目となる貴重品である。他に九州地方との交易を証する大分県国東半島東部の沖合に浮かぶ姫島産出の黒曜石（灰色または乳白色）で出来た石鏃、剥片と、瀬戸内地方との交易を示す香川県坂出市金山産とみられるサヌカイト製石鏃、剥片が広井駄場、曽我の西[5]、大宮[6]、本村半家[7]、棟屋敷[8]、堂ヶ市、長生[9]などの各遺跡で見つかっている。中でも大宮遺跡は、大宮・宮崎遺跡に近接し所在する遺跡である。この大宮遺跡の発見は早く、昭和48年になされており、環状石斧の完形品や精巧

に出来た石鏃多数の出土が知られ、石鏃の中には姫島産黒曜石製やサヌカイト製のものが含まれている。ただ、この遺跡は他の遺跡が河岸段丘上に立地しているのに対し、舌状に延びた丘陵先端部の高位段丘上に立地するという特徴をもつ。

西土佐村を中心に周辺へと目を転ずれば、まず東方に十和村広瀬遺跡[10]が所在する。この遺跡には縄文前期に属する瀬戸内系の羽島下層式土器と共に玦状耳飾の出土が知られ、また、後期後葉の広瀬上層式土器を多出し、本式土器の標式遺跡となっている。他に同村には縄文草創期の豆粒文土器と槍先形尖頭器の出土で知られる十川駄場崎遺跡[11]がみられ、近接し川口ホリキ遺跡[12]が所在している。川口ホリキ遺跡には中津式土器に多数の石錘が伴出し、後期初頭に網漁撈の開始のあったことが明らかとなっている。

西北には、四国初とされる環状に巡らした配石遺構を伴う岩谷祭祀遺跡[13]（愛媛県北宇和郡広見町岩谷）がみられる。岩谷からは後期初頭の中津式土器を多数出土し、後述する後期前葉の福田KⅡ式・宿毛式や、中葉の彦崎KI式・平城式などがみられ、中でも後葉の伊吹町式土器は良好な資料を多数出土している。石器の出土も多く、磨石や石皿の他、打製石斧、石鏃を多く出土し、石鏃にはサヌカイト製のものが多く含まれ強い特徴となっている。

西方には、後期後葉の伊吹町式土器標式遺跡として著名な伊吹町遺跡[14]（愛媛県宇和島市伊吹町）がみられ、この遺跡からは姫島産黒曜石製の大型石匙の出土がある。伊吹町、岩谷遺跡は、大宮・宮崎遺跡と直線距離で約18kmである。

西南方向には四国最大規模を誇り、全国的に知られている平城貝塚[15]（愛媛県南宇和郡御荘町平城）が所在する。本貝塚出土遺物は膨大な量にのぼり後期中葉前半の平城Ⅱ式、同中葉の平城Ⅰ式土器を中心とし、後期後葉の片粕式、広瀬上層式土器共に多量に出土し、貝製品の腕輪や骨角器のヤス、打製・磨製石斧などと完全人骨の出土も知られている。

南方には国史跡指定の宿毛貝塚を初め、尻貝遺跡、片粕遺跡、下益野遺跡、唐人駄場遺跡など高知県下で代表する遺跡が並列しみられる。宿毛貝塚[16]は縄文後期前葉の宿毛式土器を主体に、中期初頭の船元式土器や後期後葉の伊吹町式土器などと、人骨も出土している。尻貝遺跡[17]は後期中葉の平城Ⅰ式（鐘崎式タイプ）を主体的に出土し、片粕遺跡[18]は後期後葉の片粕式土器の標式遺跡として名高い。下益野遺跡[19]は、後期初頭の片口土器の完形品を出土し、下益野式として南四国の標式遺跡となっており、唐人駄場遺跡[20]は、西四国で最大量の姫島産黒曜石製石鏃を出土する遺跡として著名な遺跡である。

東南方向の中村市にも遺跡は多く、三里や中村貝塚、双海中駄場、入田、船戸諸遺跡がみられ、中でも中村貝塚は代表的遺跡である。三里遺跡[21]は四万十川本流の自然堤防上に立地し、後期前葉後半の三里式を主体とし、石錘の出土量は県下最大を誇る。晩期中葉～後葉の中村貝塚[22]は黒色研磨された精製土器と粗製の無刻目突帯文土器や刻目突帯文土器を出土し、中村Ⅰ式、中村Ⅱ式土器の標式遺跡である。双海中駄場遺跡[23]は先述した唐人駄場遺跡同様、姫島産黒曜石製石鏃を多出する大規模遺跡で、旧石器時代後期のナイフ形石器なども見つかっている。四万十川下流右岸にみられる入田遺跡[24]は、縄文晩期終末の稲作農耕集落遺跡で、大量の打製石斧や石包丁などを出土し、さらに弥生前期初頭の土器をも出土し、その遺物の内容から全国的に知られている。船戸遺跡[25]も

（遺跡No.）

1．広瀬	2．川口ホリキ	3．駄場崎	4．三里	5．入田	6．中村貝塚	7．船戸	8．双海中駄場
9．唐人駄場	10．下益野	11．片粕	12．尻貝	13．宿毛貝塚	14．平城貝塚	15．伊吹町	16．岩谷

第２図　西土佐村周辺の主要縄文遺跡分布図

四万十川下流地帯に所在するが、本遺跡は支流の中筋川下流域右岸に形成する河岸段丘上に立地し、縄文後期後葉の片粕式や伊吹町式土器を出土している。特に伊吹町式には良好な資料が多く、大宮・宮崎遺跡出土の土器内容と共通し注目される。

以上のように大宮・宮崎遺跡を中心として、その周辺には内容豊かな多数の縄文遺跡が取り巻き分布しているのである（第2図)。縄文遺跡の他、西土佐村においては弥生、古墳、古代遺跡の存在はほとんど知られてなくその実態は不明である。中世における本地方は下山郷と呼称され、幡多の一部を構成しており、その発展ぶりが察知されるのである。当地には、高手之城、大宮陣跡、津島陣跡、一覚陣跡、小串城跡、関善城跡、北ノ川城跡、辰巳城跡、用井城跡、勝城跡など多くの城跡が存在する。近世における下山郷は下山上分、下山下分に分けられ、下山上分の大庄屋は下山村(川崎村)、下山下分の大庄屋は津野川に居住し、彼らの支配下にあったといわれている[26]。下山郷下分の一村にある大宮村は、伊予境に位置することから境目番所がおかれ、大宮口番所ともよばれ、鉄砲、弓などが備えられていたらしい。伊予へ通ずる道の境目を境谷といわれていた。「大宮」の地名は、天正17年（1589年）の下山郷地検帳の中にみられ（極楽寺谷村・宮ノ川村・二ノ又・ヲリツキ村・宮崎村・葛原村・舟木村・ホウノキウ・行事田村・中ノ川村・中畦村・西村・曽我村・藤ノ瀬西路・藤ノ瀬村・藤ノ瀬）諸地区で構成[27]され、各村落が集合し今日にみる大宮の集落形成へと発展をみたのである。なお、西土佐村における中・近世の考古学的調査は、幸い過去に1例みられ『本村半家遺跡発掘調査報告書』[28]としてその成果が述べられ、中・近世における山村集落社会の実態も徐々にではあるが解明に向かいつつある。

註

（1） 木村剛朗「堂ヶ市遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年

（2） 木村剛朗「広井駄場遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年

（3） 西土佐村文化財保護審議会委員今城宗久氏によって発見され、資料実見

（4） 山口将仁「高知県における後期旧石器時代の様相」『旧石器考古学』41、旧石器文化談話会、平成2年

（5） 木村剛朗「曽我の西遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年

（6） 木村剛朗「大宮遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年

（7） 高知県教育委員会『高知県遺跡地図－幡多ブロック－』昭和63年

（8） 木村剛朗「棟屋敷遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年

（9） 註（6）に同じ。

(10) 岡本健児・広田典夫『高知県広瀬遺跡発掘調査報告書』十和村教育委員会、昭和48年。木村剛朗「広瀬遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年

(11) 山本哲也・岡本桂典『十川駄場崎遺跡発掘調査報告書』十和村教育委員会、平成元年

(12) 山本哲也『十川駄場崎遺跡発掘調査報告書』十和村埋蔵文化財調査報告書第2集、十和村教育委員会、昭和63年

(13) 西田栄・犬飼徹夫・十亀幸雄『岩谷遺跡』広見町教育委員会、昭和54年

(14)　犬飼徹夫『愛媛県史・原始・古代』愛媛県、昭和57年。木村剛朗「伊吹町遺跡」『四国西南沿海部の先史文化・旧石器・縄文時代』幡多埋文研、平成７年
(15)　木村剛朗他『平城貝塚』第Ⅳ次発掘調査報告書、御荘町教育委員会、昭和57年。木村剛朗「平城貝塚」『四国西南沿海部の先史文化・旧石器・縄文時代』幡多埋文研、平成７年
(16)　岡本健児『高知県史考古編』高知県、昭和43年。山本哲也・廣田佳久・下村公彦『高知県宿毛貝塚発掘調査報告書』高知県教育委員会、昭和61年。木村剛朗「宿毛貝塚」『四国西南沿海部の先史文化・旧石器・縄文時代』幡多埋文研、平成７年
(17)　前田光男『尻貝遺跡』大月町教育委員会、平成３年。木村剛朗「尻貝遺跡」『四国西南沿海部の先史文化・旧石器・縄文時代』幡多埋文研、平成７年
(18)　岡本健児・広田典夫・木村剛朗『高知県片粕遺跡』高知県教育委員会、昭和54年。木村剛朗「片粕遺跡」『四国西南沿海部の先史文化・旧石器・縄文時代』幡多埋文研、平成７年
(19)　岡本健児『高知県史考古編』高知県、昭和43年。木村剛朗「下益野Ａ地区遺跡」『四国西南沿海部の先史文化・旧石器・縄文時代』幡多埋文研、平成７年
(20)　木村剛朗「九州姫島産黒曜石製石鏃を多量出土する高知県松尾遺跡」『月刊考古学ジャーナル』38、ニューサイエンス社、昭和44年
(21)　岡本健児・広田典夫・木村剛朗『高知県三里遺跡』中村市教育委員会、昭和53年、木村剛朗「三里遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年
(22)　岡本健児『高知県史考古編』高知県、昭和43年。木村剛朗「中村貝塚」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年
(23)　木村剛朗「双海中駄場遺跡」『四国西南沿海部の先史文化・旧石器・縄文時代』幡多埋文研、平成７年
(24)　岡本健児「高知県入田遺跡」『日本農耕文化の生成』本文編、昭和36年。木村剛朗「入田遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年
(25)　出原恵三・松田直則『船戸遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第27集、高知県教育委員会、平成８年
(26)　西土佐村史編纂委員会『西土佐村史』昭和45年
(27)　下中邦彦『高知県の地名』日本歴史地名大系第40巻、昭和58年
(28)　岡本桂典『本村半家遺跡発掘調査報告書』西土佐村埋蔵文化財調査報告書第１集、西土佐村教育委員会、平成元年

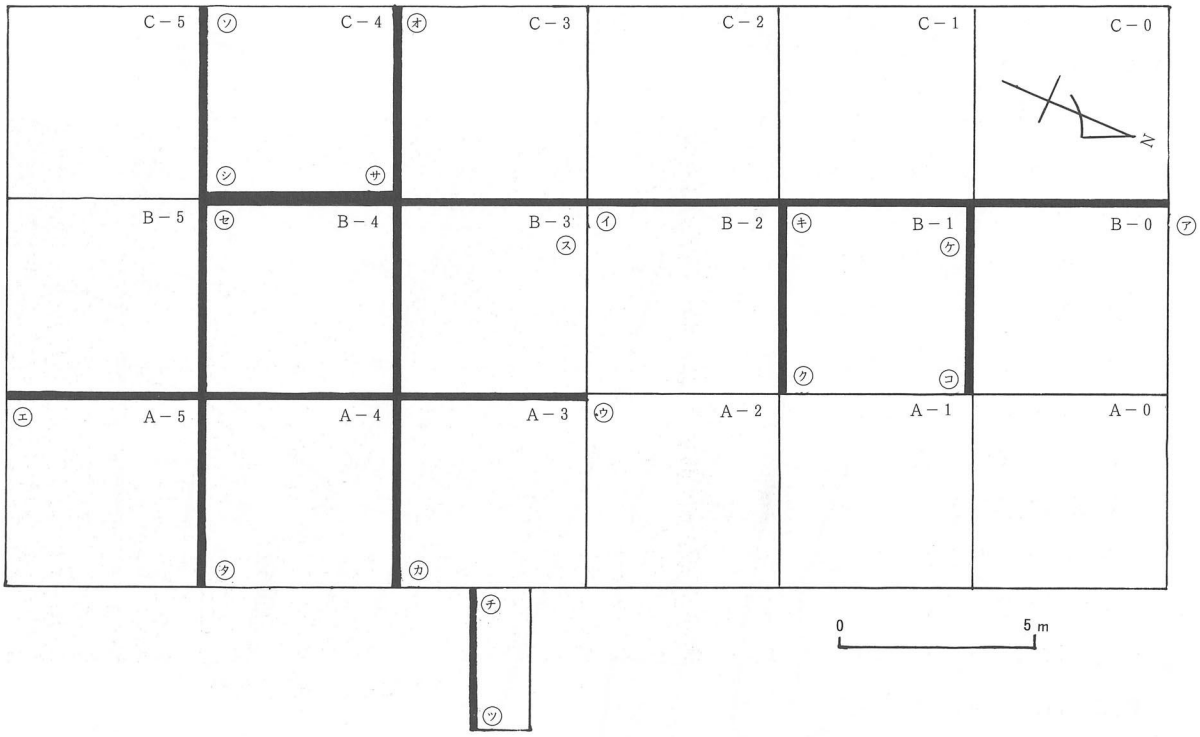
第３章　遺跡および調査の経過

大宮・宮崎遺跡発掘調査地点については、前述したとおり、目黒川右岸に緩傾斜し形成する河岸段丘麓部の平地に立地し、厳密には目黒川との直線距離約40ｍの位置に存在し、調査前まで水田となっていた所である。水田は目黒川に並行し開けているが、それも目黒川に架かる宮崎橋へと通ずる道路によって遮断され、さらに水田は、この道路を越えて下流へと延び広がっている。調査地点の水田面はちょうど中央部で高さ１ｍ前後の段をもって一段下り、その先端は目黒川近くまで延びていたらしい。それも今回のほ場整備工事によって、下っていた部分は上の段と同レベルにまで埋め立てられ水平に整備されていて、調査時には、その段は完全に姿を消していたのである。

本遺跡発見と発掘調査の発端となった遺物、配石遺構露出個所は、この段差をもつ上段中央に位置する。当初、遺物と配石遺構の露出は目黒川に並行し長さ約10ｍ、幅約５ｍの範囲にわたってみられた（第３図）。発掘調査は、まずこの部分を中心として南北30ｍ、東西15ｍの450㎡を設定した（第４図）。遺物が露出攪乱を受けていた個所の地層断面の観察から、表土（耕作土）はほ場整備で既に削除されていて、遺物包含層はわずか地表面下約20㎝～30㎝にあることが判明し、堆積土が極めて薄いことが確かめられた。そのことから設定した450㎡全面を発掘調査することとした。

第３図　発見当時の大宮・宮崎遺跡（配石の一部が露出し見られる）

第４図　大宮・宮崎遺跡地形図と発掘調査区（中央斜線部分が発掘区）



第５図　調査区グリッド配置平面図（㋐～㋚地層断面記録位置を示す）

調査にのぞみ、調査区を５ｍ×５ｍのグリッド18個を設定し、配石遺構、遺物の露出している中央部から着手した。調査は総て手作業で行い、重機の使用は最終段階で、一段下がっていたとされる境目と最深部の地層を確認する際のみにとどめた。グリッドは目黒川上流側北端より東西方向にＡ・Ｂ・Ｃとし、下流方向へと向いＡ－１区～Ａ－５区、Ｂ－１区～Ｂ－５区、Ｃ－１区～Ｃ－５区とし、さらに配石遺構の上流側への広がりとその端部を確認すべきＡ－１区、Ｂ－１区、Ｃ－１区の上手にＡ－０区、Ｂ－０区、Ｃ－０区と拡張グリッドを設けた（第５図）。調査期間は平成８年４月８日から同年８月１日までをあて実施した。以下、調査経過を発掘日誌より要約し記す。

第６図　Ａ－１区に出土の伊吹町式深鉢胴部片

４月８日（晴）

Ａ－３区にむき出しとなっていた配石遺構周辺の攪乱土を再調査す。伊吹町式土器を主に若干の片粕式土器

片出土。他に石材核、剥片、叩石などと石鏃２点出土。

４月９日（晴後雲）

Ａ－１区・Ａ－２区掘り下げ開始。Ａ－１区で伊吹町式土器片約20点出土し、中に良好な深鉢胴部片含む（第６図）。さらにＡ－２区でも伊吹町式土器片多数出土し、環状に配置された配石遺構１基検出す（第７図）。

第７図　Ａ－２区に検出の配石遺構

４月10日（晴後雲）

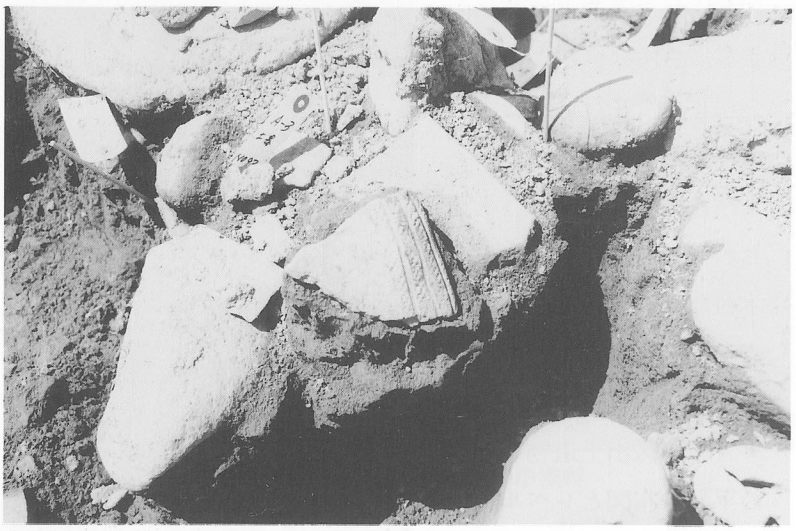
Ａ－２区の掘り下げ続行。伊吹町式土器片多数出土。西土佐村井上一村長、横山茂男教育長、清水忠孝総務課長諸氏の来観あり。

４月11日（晴後雲）

Ａ－２区の掘り下げ午後完了。土器片、昨日に続き多数出土。中に結晶片岩製石棒片１点出土し注目された。Ａ－３区の掘り下げ開始す。午後、愛媛県考古学協会副会長犬飼徹夫氏調査に参加す。

４月12日（晴）

Ａ－３区の作業続行。人頭大の河原石多数出土。中に石組状遺構検出し、石組に張り付いた状態で片粕式深鉢口縁部片出土（第８図）。他に伊吹町式、広瀬上層式口縁、胴部片多数出土し、石器剥片、石鏃の出土もあった。Ａ－１区出土の遺物平面分布図、レベル記録完了す。



第８図　Ａ－３区に検出された配石面に出土の片粕式土器深鉢口縁部片

４月16日（小雨後雲）

午前中Ａ－１区出土の遺物洗浄し、平城Ⅰ式深鉢口縁部片やスクレイパーの出土が再確認され、中に県下最大のサヌカイト製石材核が含まれている

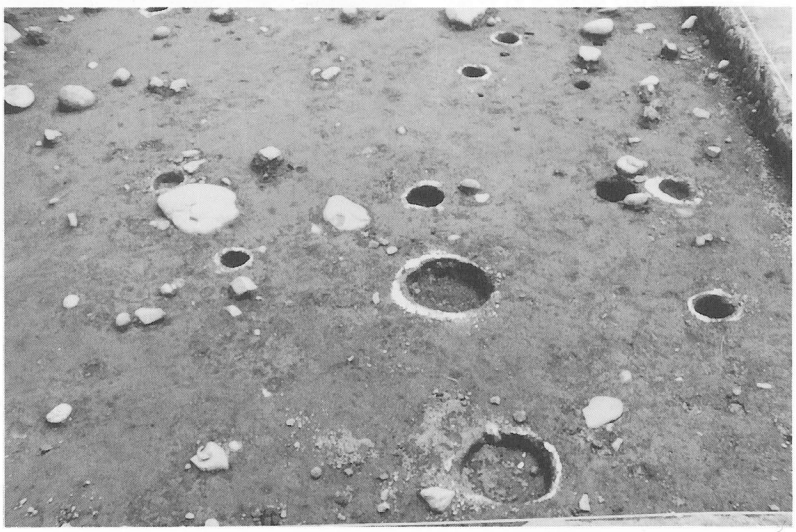
ことなど成果が確認された。午後、Ｂ－３区掘り下げ開始。水田耕作土に近世陶磁器片多数出土。直下に縄文土器片の出土が認められ、さらに人頭大の河原石露出し始め、石錘の出土あり。西土佐村議会議長大田直美氏の発掘調査状況の視察あり。

４月17日（雲時々晴）

Ａ－２区、Ａ－３区出土遺物平面分布図、レベル記録完了。Ｂ－３区掘り下げ続行し、この区で配石遺構１基検出し、近くに伊吹町式口縁、胴部片続出し、片粕式土器片も少し混じる。姫島産黒曜石・サヌカイト製石鏃、石材核なども出土。

４月18日（雲後晴）

Ｂ－３区に良好な伊吹町式、片粕式土器、打製石斧出土し、石器剥片も多数出土。Ｂ－２区の掘り下げ開始。水田耕作土を除去した床土上面で柱穴跡検出（第９図）。中世の青磁、染付片少量出土。大宮中学校教員、生徒見学あり現地説明を行う。



第９図　Ｂ－２区に検出された柱穴跡

４月19日（雲後雨）

Ｂ－２区の掘り下げに着手するが、途中、雨となり作業中止し遺物の洗浄にかかる。Ｂ－３区出土の石器を主に水洗を行い、鑑定、選別を木村、犬飼が当たる。石錘探しを目的とし、水洗された扁平小型礫を観察中、木村が線刻礫１点を見つける（第10図）。

第10図　線刻礫発見時の状況と関係メンバー

４月22日（快晴）

Ａ－４区出土遺物の一部の平面分布図とレベル記録完了。Ｂ－２区の掘り下げ進める。Ｂ－２区で柱穴跡検出（第11図）。近くに出土の配石遺構の石面を水洗する。線刻礫の発見に努めるが見つからず。

4月23日（晴）

岡本健児高知県文化財保護審議会会長来観。配石遺構と遺物全般についての鑑定と今後の調査方法についてのアドバイス受ける。特に線刻礫について注目され、女人像を線描されているとの解答いただく。

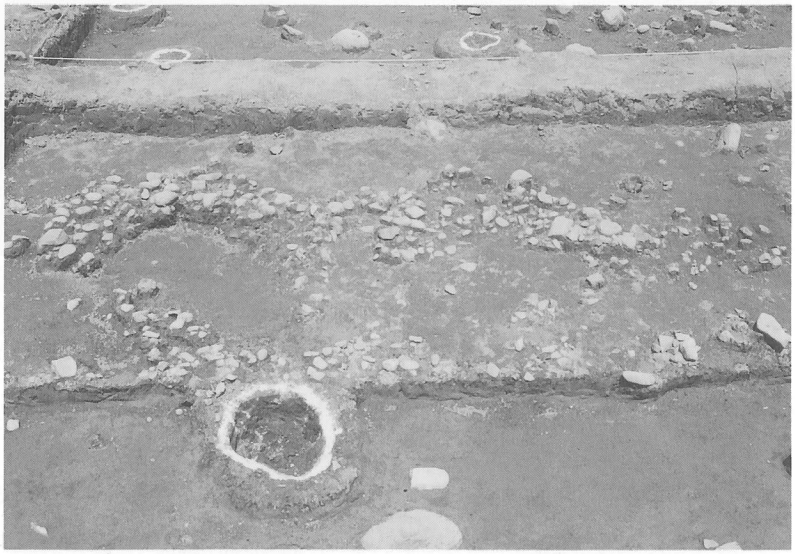
第11図　B－2区に検出の柱穴群

4月24日（晴）

午前中、A－2区の配石の一部測図し、B－1区の調査へと移る。B－1区は遺物少なく配石遺構の検出なし。ただ田床面に柱穴跡出土。当日、高知県文化財団埋蔵文化財センター班長川添健市、同調査員前田光男、松田直則、松田知彦、山崎正明諸氏と、高知県立歴史民俗資料館学芸員岡本桂典氏、愛媛県北宇和郡松野町教育委員会文化財係7名の来観あり。B－3区の遺物平面分布図、レベル記録完了。B－1区、B－2区に出土の柱穴は中・近世のものと松田直則氏よりアドバイス受ける。

4月25日（晴後雲）

B－1区最終的掘り下げ、一部上層に小礫群検出し、中・近世陶磁器片出土（第12図）。B－2区出土遺物平面分布図、レベル記録終了。B－1区の掘り下げ進め伊吹町式土器片若干出土。愛媛県考古学協会会長森光晴、土佐史談会会員前田和男両氏来観。西土佐村下家地小学校教員一同見学に訪れ、現地説明を行う。



第12図　B－1区に検出の小礫群

4月26日（晴後雲）

A－1区出土遺物平面分布図、レベル記録終了。B－3区の掘り下げ続行し、A－3区に接する個所にて拳大から人頭大の河原石多数出土し始める。近くで「S」字状貼付文を有する片粕式口縁部片出土（第13図）。B－4区も並行し掘り下げ開始。床土直下に縄文土器、石器出土し始め、平城Ⅰ式、片粕式、広

瀬上層式土器片、石鏃などと水晶２点の出土を見た（第14図）。

５月７日（雨）

悪天候のため終日遺物の洗浄にかかる。石材核、石器剥片に良好なもの多数含まれていることを確認。中期の船元式土器片の出土が明かとなる。高知県文化財保護室松田友彦氏の現地視察あり、足摺縄文巨石文化研究会副会長宮崎茂・同会員谷孝二郎両氏の来観あり。

第13図　Ａ－３区に出土の片粕式深鉢口縁部片

５月８日（雨）

昨日に続き出土遺物の洗浄行う。土器片に朱色の残るもの、サヌカイト細片多数存在することを確認。また伊吹町式土器片に良好な資料多く見かける。

第14図　Ｂ－４区に出土の水晶出土状況

５月９日（晴）

Ｂ－４区の掘り下げ進める。石鏃の出土と少量の伊吹町式土器片の出土あり。Ｂ－１区の出土遺物平面分布図、小礫群の平面、断面図、レベル記録終える。西土佐村西ヶ方小学校教員、生徒と社会科学研究部会一行の見学あり、現地説明行う。

５月10日（晴後雲）

Ｂ－５区の掘り下げ開始。水田耕作土直下に配石遺構の一部出現す。Ｂ－１区～Ｂ－２区の柱穴跡平面、断面図、レベル完了。Ｂ－３区出土遺物平面分布図、レベル記録完了。

５月14日（晴後雲）

Ｂ－５区掘り下げ続行。配石遺構の検出をみたが小規模で粗雑。近辺に伊吹町式土器片、石器剥片少量出土。Ａ－２区の配石遺構測図終え、Ａ－３区の配石遺構の測図に着手。当日、土佐史談会員岡村憲治氏、西土佐村江川小学校教員・生徒見学に訪れ現地説明行う。

5月15日（晴）

Ｂ－５区完掘。Ｃ－４区掘り下げ開始。水田耕作土中より少数の青磁片出土。床土直下に良好な磨製石斧出土。Ｂ－３区には良好な伊吹町式土器片多数出土（第15図）。本区に検出の配石遺構の測図続行。当日、愛媛大学下條信行教授の来観あり。

第15図　Ｂ－３区の遺物出土状況

5月17日（晴後雲）

Ｃ－４区の最終掘り下げ進める。床土面に中世の擂鉢片出土（第16図）。周辺に柱穴跡検出。片粕式、伊吹町式土器片の出土も少量みられた。Ｂ－４区に出土の遺物平面分布図、レベル記録完了。

第16図　Ｃ－４区に出土の擂鉢片出土状況

5月18日（晴）

Ｃ－３区、Ｃ－４区出土遺物の平面分布図、レベル記録完了。Ｃ－１区、Ｃ－２区の掘り下げ開始。

5月20日（雲後雨）

Ｃ－１区、Ｃ－３区の掘り下げ続行し、Ｃ－４区の掘り下げも進める。Ｃ－４区にサヌカイト製石鏃出土（第17図）。午後雨となり作業中止し、遺物の洗浄行う。

5月21日（雨時々晴）

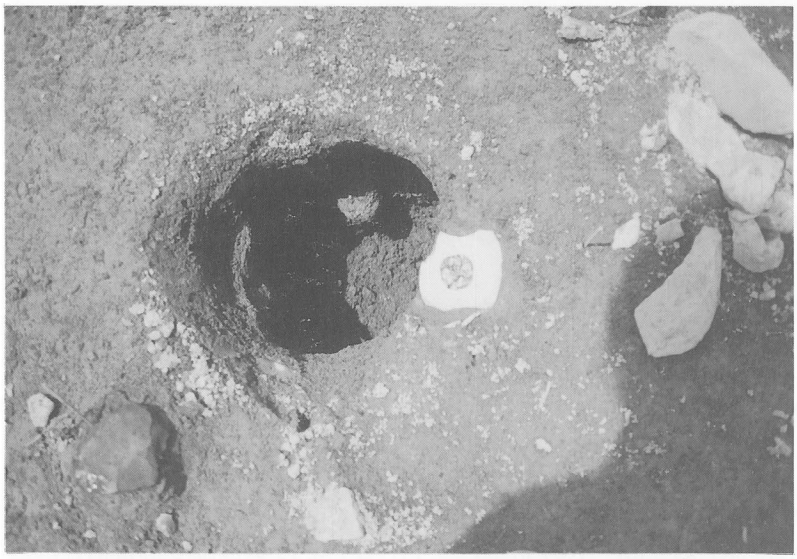
Ｂ－５区出土遺物分布図、レベル記録完了。Ｂ－０区の掘り下げ着手。すぐにアカホヤ（音地層）となる。上層で伊吹町式土器片少量出土し、やや掘り下げた層中にて羽島下層式土器片１点出土（第18図）。当日、幡多教育事務所宮崎満所長他３名来観あり。

5月22日（晴）

Ｂ－０区掘り下げ完了。Ａ－０区では良好な深鉢の波状口縁部片、胴部片、サヌカイト製石鏃などの出土をみる。それらの遺物平面分布図、レベル記録完了。Ｂ－５区では中・近世の柱穴跡と、陶磁器片の出土をみる。（第19図）。

第17図　Ｃ－４区に出土のサヌカイト製石鏃出土状況

第18図　Ｂ－０区に出土の羽島下層式土器片出土状況



第19図　Ｂ－５区に検出の柱穴跡と染付碗底部片出土状況

5月27日（晴）

Ｂ－０区出土遺物平面分布図、レベル記録完了。Ａ－３区の配石遺構測図続行。Ｂ－５区で配石遺構検出。周辺に伊吹町式土器片、片粕式土器片、石器剥片、石鏃など多数出土。当日、西土佐村須崎小学校教員、生徒の見学があり現地説明行う。横山茂男西土佐村教育長他５名の来観あり。

5月28日（雲時々雨）

Ｂ－５区出土遺物平面分布図、レベル記録完了。Ｃ－４区の掘り下げ進め中世の擂鉢片の他伊吹町式土器片、石器剥片など出土を見る。

5月29日（雲）

Ｂ－５区の掘り下げ完了。伊吹町式土器片、姫島産黒曜石製石鏃（第20図）、石錘出土。Ｂ－３区、Ｂ－４区出土遺物平面分布図、レベル記録完了。当日、西土佐村津野川小学校教員、生徒の見学あり現地説明行う。

第20図　Ｂ－５区に出土の姫島産黒曜石製石鏃出土状況

5月30日（雨後雲）

午前中遺物の洗浄行う。石器剥片、石材核、片粕式、広瀬上層式、伊吹町式土器片多数見られ、特にＣ－３区、Ｃ－４区出土遺物に中・近世の良好な陶磁器片資料がみられ注目された。

5月31日（雲後晴）

Ｂ－５区出土遺物平面分布図、レベル記録完了。Ｃ－４区掘り下げ続行。擂鉢片や伊吹町式土器片、石器剥片出土し、姫島産黒曜石製石鏃１点出土。当日、大分県天瀬町教育委員会今田秀樹、別府大学学生林潤也両氏の来観あり。

6月３日（雲後晴）

Ｃ－５区掘り下げ開始。水田耕作土直下の床土面にて溝状遺構、柱穴跡検出。周辺に伊吹町式土器片少量出土。Ｃ－３区、Ｃ－４区出土遺物平面分布図、レベル記録完了。高知県立中村高等学校西土佐分校教員、生徒約40名の見学があり、現地説明を行う。

6月５日（雲後晴）

Ａ－３区配石遺構測図続行。Ｃ－５区で検出の溝状遺構内埋土の掘り下げ進め、床面より染付皿片、青磁碗口縁部片出土（第21図）。周辺より片粕式、伊吹町式土器片少量出土。Ｃ－２区の掘り下げ進め、水田耕作土中より近世陶磁器片少量出土。

6月6日（晴）

Ａ－３区、Ａ－４区配石遺構測図続行。Ｃ－５区溝状遺構埋土掘り下げ完了。Ｃ－２区の掘り下げ続行。水田耕作土直下の床土上面に小礫（河原石）の集石跡検出。小礫に混在し近世陶磁器片少量出土。

6月7日（雲後雨）

Ａ－３区、Ａ－４区配石遺構測図完了。Ｃ－５区の溝状遺構平面、断面測図終える。Ｃ－２区の調査続行し、鉛玉３個の出土を見る（第22図）。午後、雨となり終日遺物の洗浄行う。

6月10日（雨時々雲）

Ｃ－２区、Ｃ－５区出土遺物平面分布図、柱穴平面、断面、レベル記録完了。Ｃ－０区掘り下げ開始。水田耕作土直下はアカホヤとなり、その層中より伊吹町式土器片、中・近世陶磁器片少量出土し、柱穴跡も検出。

第21図　Ｃ－５区に検出の溝状遺構

第22図　Ｃ－２区に出土の鉛玉出土状況

6月11日（雨）

終日、出土遺物の洗浄にかかる。当日、高知県文化財団埋蔵文化財センター班長川添健市、同センター門脇隆両氏の視察あり。

6月13日（雲後晴）

Ｃ－５区掘り下げ続行。良好な伊吹町式口縁部片、胴部片、石鏃など出土。配石遺構内に組み込まれた石材核の出土あり。当日、高知県埋蔵文化財センター出原恵三氏来観。

6月14日（雲後雨）

Ｃ－５区の掘り下げ続行し、古銭１点出土。Ｃ－４区に検出の配石遺構測図にかかる。午後、雨となり遺物の洗浄にかかる。

6月18日（雨後雲）

Ｃ－３区、Ｃ－４区にまたがる配石遺構の測図進める。

6月19日（晴時々雲）

Ｃ－５区より若干の伊吹町式土器片、スクレイパー新たに出土。Ａ－４区の掘り下げ開始。水田耕作土中より古銭（寛永通宝）２点出土。床土直下より伊吹町式土器片、晩期の突帯文土器片少数出土。Ｂ－５区の配石遺構平面、断面測図完了。

6月21日（雨時々雲）

Ａ－４区の掘り下げ進め新たに配石遺構１基検出。配石内と周辺より伊吹町式（第24図）、平城Ｉ式（第25図）、晩期突帯文土器片（第26図）、石鏃など良好な資料の出土に恵まれた（第23図）。Ｃ－５区出土遺物平面分布図、レベル記録完了。当日、愛媛県埋蔵文化財調査センター多田仁氏来観。

第23図　Ａ－４区に検出の配石遺構と遺物出土状況

6月２日（雲後晴）

Ｃ－３区、Ｃ－４区の配石遺構測図作成。Ａ－５区掘り下げ開始。水田耕作土中に中・近世陶磁器片出土。床土中に人頭大の河原石露出し始め、同レベル面に伊吹町式土器片多出す。

6月24日（雨後雲）

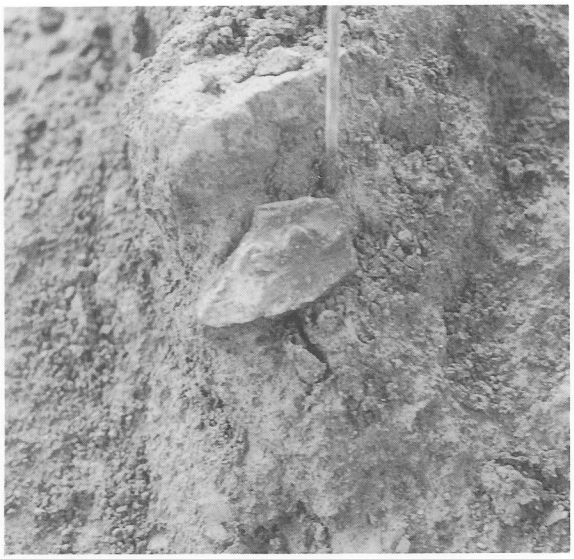
午前中、遺物の洗浄行う。午後、慶応義塾大学名誉教授江坂輝彌、東京大学総合研究博物館人類先史部門客員松谷暁子両先生来観。

第24図　Ａ－４区配石遺構内に出土の伊吹町式深鉢胴部片とサヌカイト製石鏃出土状況

6月25日（雲後晴）

Ａ－５区の掘り下げ続行。Ａ－１区、Ｂ－１区南壁地層断面図作成。愛媛県北宇和郡津島町文化財保護審議会委員梶原和秋氏来観。

第25図　Ａ－４区配石遺構内に出土の平城Ⅰ式深鉢胴部片出土状況



第26図　Ａ－４区配石遺構内に出土の中村Ⅱ式深鉢口縁部片出土状況

６月26日（雨時々雲）

Ｃ－１区の掘り下げに着手したが雨が強くなり途中作業中止。Ａ－４区出土遺物平面分布図、レベル記録着手。当日、十和村教育委員会、文化財保護審議会委員一行12名の見学があり、現地説明行う。

６月27日（雨後雲）

午前中遺物の洗浄行う。午後Ａ－４区最終的掘り下げ進め、伊吹町式土器片の出土と配石遺構中央部の石面が火に焼け赤変しているのを確認す。出土遺物平面分布図、レベル記録完了。Ｃ－５区の掘り下げ進める。

６月28日（雨後晴）

Ｃ－５区完掘。Ｂ－３区を新たに下部へと掘り下げ進める。伊吹町式土器片多出し、Ａ－３区より続く配石出現。Ｂ－２、Ｂ－３区西壁地層断面図作成。Ａ－５区より良好な石皿、磨石出土（第27図）。本グリッド内出土遺物平面分布図、レベル記録完了。愛媛県南宇和郡御荘町文化財保護審議会委員藤田儲三氏来観。

第27図　Ａ－５区の石皿、磨石出土状況

6月29日（雨後雲）

Ｂ－３区より良好な伊吹町式土器片出土（第28図）。午後、報道記者会見に備え、遺跡全体の清掃と配石遺構の石面洗い行う。

7月１日（雨後雲）

発掘調査現場にて井上一村長、横山茂男教育長列席のもと記者会見実施。

7月２日（雨後晴）

午前中、遺物の洗浄行う。午後Ａ－３区の掘り下げ続行し、広瀬上層式、伊吹町式土器片出土。愛媛県北宇和郡広見町教育委員会・文化財保護審議会委員12名来観。

第28図　Ｂ－３区の伊吹町式深鉢口縁部片出土状況

7月３日（雨後晴）

午前中、遺物の洗浄行う。午後、Ａ－４区配石遺構平面、断面図作成完了。Ｂ－３区～Ｂ－４区にまたがる配石遺構の測図に着手。Ｂ－４区を新たに掘り下げ行う。

7月４日（雨時々晴）

午前中遺物の洗浄。午後Ｂ－４区掘り下げ進め伊吹町式、片粕式土器片多出し、石鏃も出土。Ｂ－３区出土遺物平面分布図、レベル記録完了。

7月５日（雨後晴）

午前中、遺物の洗浄行う。午後、Ｂ－３区、Ｂ－４区に検出の配石遺構測図行う。

7月６日（雨後晴）

横山茂男教育長・田中繁雄西土佐村教育委員会社会教育係長・同教委学校教育係長岡村好文同席のもと一般対象の現地説明会実施。高知、愛媛両県からの参加者約500名を数え終日にぎわった。

7月８日（雨後晴）

午前中、遺物の洗浄行う。午後、Ｂ－４区掘り下げ終了させ、出土遺物の平面分布図、レベル記録完了。Ｂ－３区の精査続行。

7月９日（雨後雲）

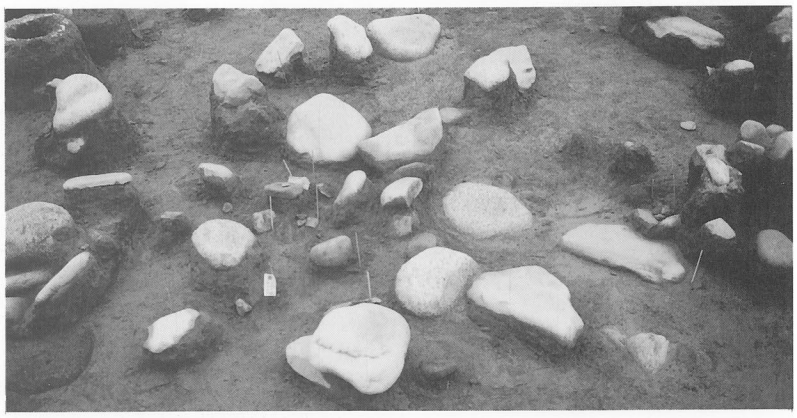
午前中、遺物の洗浄。午後、Ｂ－３区の精査で伊吹町式土器片、石鏃出土。

7月10日（雨後晴）

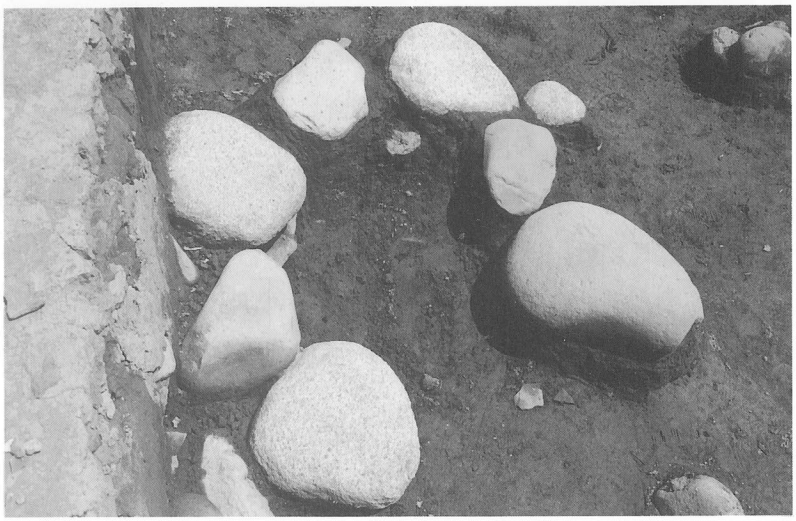
Ｂ－５区で新たに配石遺構１基検出（第29図）。近くで石錘の出土をみる。Ｃ－０区、Ｃ－１区出土遺物平面分布図、レベル記録完了。同グリッド地層断面図作成。当日、西土佐村消防団井上満団長他40名余りの見学があり、現地説明行う。

7月11日（晴時々雲）

Ｃ－２区に検出の小礫群直下の掘り下げ進める。散在する人頭大の河原石の出土や、近くに石錘、水晶、注口土器の注口部の出土を見る。Ａ－３区、Ｂ－３区、Ｃ－３区南壁地層断面図作成。当日、高知歴史民俗資料館下村公彦学芸課長、同学芸員岡本桂典両氏、大正町文化財保護審議会西村丈二・森敏雄・田辺猛諸氏の来観あり現地説明を行う。



第29図　Ｂ－５区に検出の配石遺構



第30図　Ｂ－３区に検出の配石遺構

7月12日（晴）

Ｃ－２区に検出された配石遺構完掘し、近くに注口土器の注口部片の出土をみる。Ｂ－３区の精査でＵ字状に配置された配石遺構１基検出（第30図）。Ｂ－０区～Ｂ－４区までの西壁地層断面図作成。当日、土佐くろしお鉄道株式会社社長上岡英朗氏、高岡教育事務所より教員10名の来観あり現地説明行う。

7月13日（晴）

Ｂ－５区西壁地層断面図作成。Ｂ－３区、Ｂ－４区、Ｃ－２区遺物平面分布図、レベル記録完了。Ｂ－２区の最終的精査行う。

7月15日（晴）

Ｂ－２区精査完了。柱穴跡や配石遺構１基検出。配石周辺にて伊吹町式土器片、姫島産黒曜石製石鏃出土。Ｂ－０区、Ｂ－１区西壁地層断面図、Ｂ－０区南壁、Ｂ－３区東壁地層断面図作成。西土佐村商工会婦人会約30名の見学あり現地説明を行う。

7月16日（雨後雲）

午前中、遺物の洗浄行う。午後、Ｂ－１区の掘り下げ開始。Ａ－２区西壁地層断面図作成。Ｂ－２区より広瀬上層式、伊吹町式土器片多出す。これらの遺物平面分布図、レベル記録完了。

7月17日（雲時々雨）

Ｂ－２区に検出のＵ字状配石遺構と円環状配石遺構の測図完了。Ａ－３区西壁地層断面壁に良

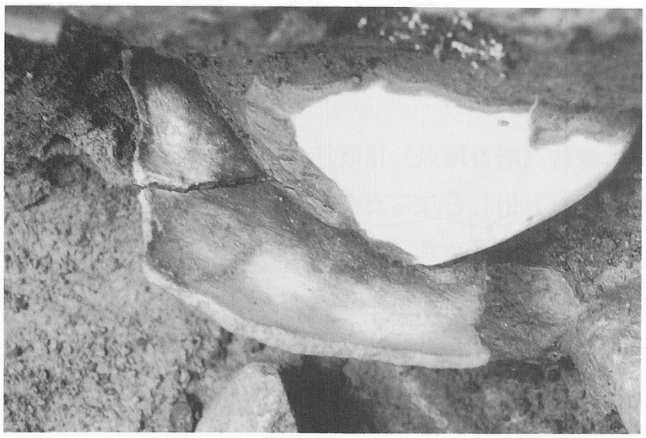
好な伊吹町式深鉢胴部片出土（第31図）。

7月18日（雲後雨）

Ａ－３、Ａ－４区西壁地層断面図作成。午後、遺物の洗浄行う。

7月22日（晴後雲）

Ａ－５区最終的精査し、石材核、片粕式、伊吹町式土器片出土。これらに共伴し側面に刻目状叩痕を有する楕円形礫１点の出土をみる。Ｂ－１区出土遺物平面分布図、レベル記録完了。Ａ－３区、Ａ－４区西壁、Ｂ－１区北壁地層断面図作成。



第31図　Ａ－３区ベルト西壁面に出土の伊吹町式深鉢胴部片

7月23日（晴）

Ｂ－１区、Ｂ－２区北壁、Ｃ－１区、Ｃ－２区北壁、南壁、Ｃ－１区西壁、Ａ－３区南壁地層断面図作成。Ｃ－１区配石遺構測図完了。Ｃ－１区より打製石斧の出土あり。

7月24日（晴）

Ａ－４区北・南壁、Ｂ－４区、Ｃ－４区南壁、Ｂ－４区東壁、Ａ－５区西・南壁、Ｂ－５区南壁地層断面図作成。当日、高知県立中村高等学校西土佐分校教員10名の見学あり現地説明行う。

7月25日（晴）

Ａ－４区南壁、西壁、Ｂ－４区東壁、北壁地層断面図作成。Ｃ－２区配石遺構測図着手。当日、西土佐村教員組合10名の見学があり、現地説明行う。

7月26日（晴）

Ａ－１区、Ａ－２区、Ｃ－２区に検出の配石遺構測図完了。

7月29日（晴）

Ｂ－４区からＢ－５区にまたがる個所の最終的精査で配石遺構１基検出。Ａ－３区の配石遺構測図完了。当日、国学院大学教授小林達雄先生、高知県埋蔵文化財センター前田光雄氏来観。

7月30日（晴）

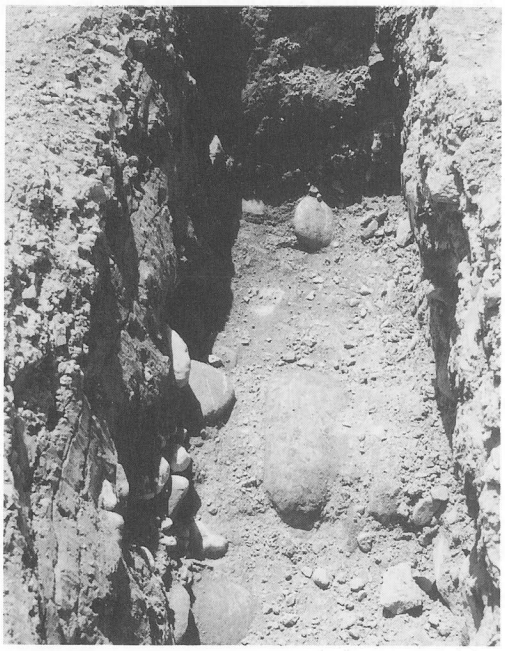
Ｂ－３区の配石遺構、Ｂ－４区～Ｂ－５区にまたがる配石遺構測図完了。当日、文化庁主任調査官岡村道雄先生、高知県埋蔵文化財センター班長川添健市、同センター森田尚宏、高知県文化財保護室松田友彦諸氏の来観。

7月31日（晴）

配石遺構と全体写真撮影。岡村道雄先生現場視察を行う。

8月１日（晴）

調査区前面の段差個所に、最下部確認のためのトレンチ入れ重機で掘削。同個所の地層断面図作成。写真撮影を行い全調査終了す（第32図）。



第32図　遺跡前面段差確認のトレンチ状況

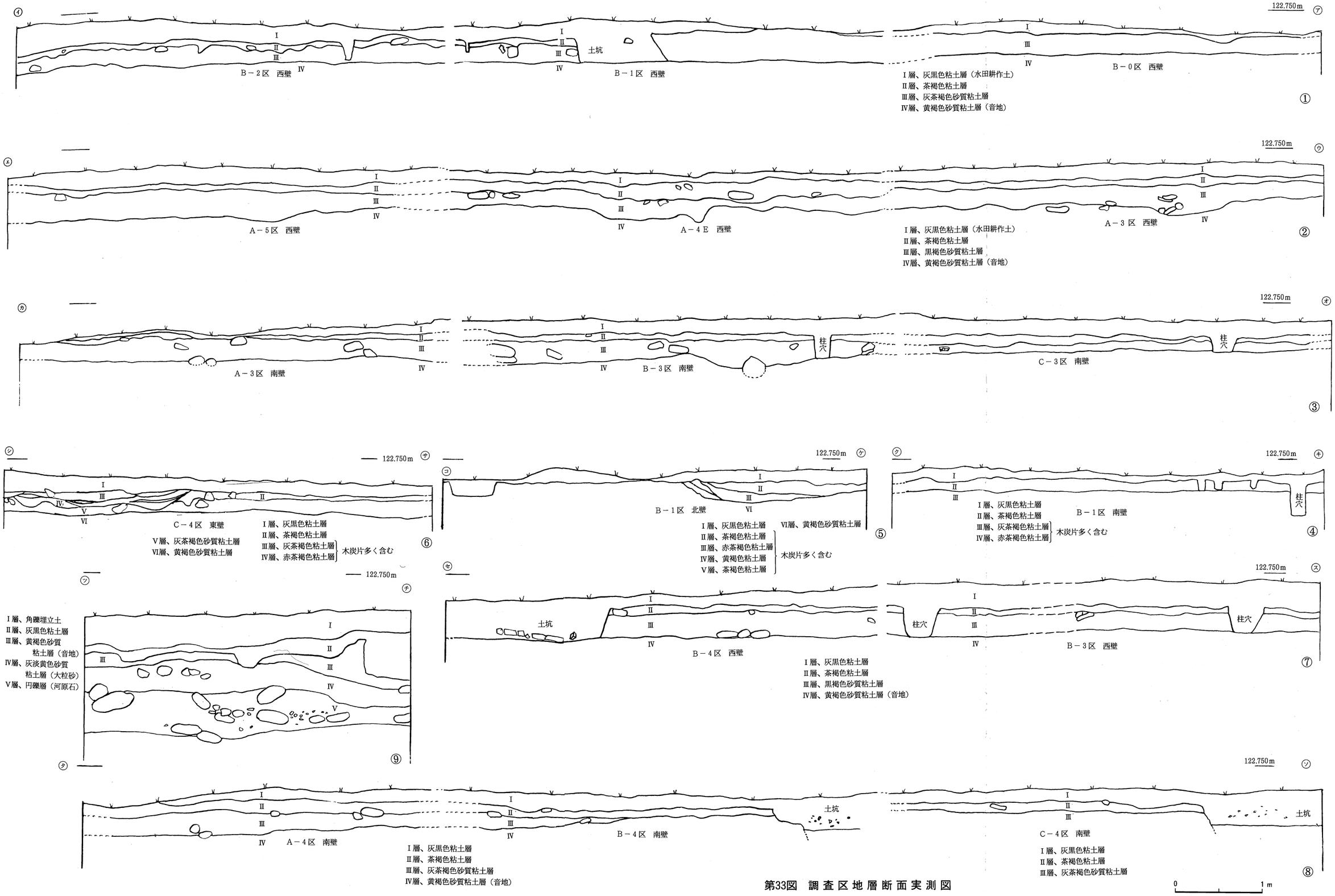
第4章　層　　序

本遺跡（調査地点）は既述のとおりほ場整備中に発見されたこともあって、一部、配石遺構が地表面にむき出しとなった部分や、表土（水田耕作土）は深く削除されていて、部分的にわずか残すのみという状態であった。

層序は第1層灰黒色粘土層（水田耕作土）約20㎝、第2層茶褐色砂質粘土層（鉄分の沈澱によって赤茶褐色に変色し、部分的に板状を呈し硬くしまった個所をみる）約10㎝～20㎝、第3層黒褐色ないしは灰暗茶褐色砂質粘土層約20㎝～30㎝がみられ、第4層黄褐色ないしは橙褐色をなす音地層（鬼界カルデラ噴出のアカホヤ火山灰）約50㎝が堆積し、その下部に灰淡黄色砂質粘土層約40㎝（大粒砂含む）と続き、以下、礫層（砂利に拳大・人頭大円礫が混じる）となっている。

第1層に中・近世の遺物を出土するが、若干、第2層に混入しているものも認められた。第2層から第3層が縄文時代後期の遺物包含層で、配石遺構は第4層を基盤とし第3層下部に検出されている。なお、第4層の上部に羽島下層式土器片1点の出土が確認されていることから、本層は縄文前期の遺物包含層となり、これ以下の層は今回、配石遺構の保存ということもあって、その検証はできてなく不明である。（第33図）は調査区で良好な堆積状態を示す個所の地層断面図である。まず調査区中央を南北方向に断ち切った①B－0区～B－2区、⑦B－3区～B－4区西壁にかけては第2層が極めて薄く、北側では層厚を薄めて切れている。B－1区とB－4区には第1層から掘られた土坑状遺構の掘り込みが認められる。また、B－3区には第1層から掘られた柱穴が2個所にみられる。B－4区の土坑状遺構の床面に角礫10個余りをみた。②A－3区～A－5区西壁にみる層序は比較的安定している。調査区を東西方向に断ち切った③A－3区～C－3区南壁は、第1・2層共にA－3区の東側で層厚を薄め、端部で切れている。ただし、第3層はA－3区、B－3区共に安定するが、西側のC－3区では約10㎝と薄くなっている。B－3区、C－3区には第1層から第2・3層へと掘り込まれた柱穴跡が認められる。

調査区南側を東西方向に断ち切った⑧A－4区～B－4区～C－4区の南壁は、第2層が安定しているものの第3層はA－4区で層厚を保ちつつもB－4区では薄くなり切れている。ただし、本区の第3層は黒褐色を呈している。B－4区とC－4区に第1層から掘り込まれた土坑状遺構をみるが、前者はB－4区西壁に確認された土坑と接続するものである。後者の土坑埋土には木炭細片を多く含む。④B－1区南壁は、第3層が無く、第2層直下に第Ⅳ層へと移行している。同区北壁⑤には第1層から皿状を呈する凹みに火で焼け焦げた跡が確認されている。これと同じ跡が⑥C－4区東壁にも認められる。A－3区の東側に地山確認のため最下部へと掘り下げを試みた。⑨約1.5m下げた位置で砂利と拳大礫、人頭大礫混じりの礫層に到達した。この礫層をさらに深さ1mまで掘り下げたが礫層は続き変化が見られなかったことから、この時点で地層確認についてを打ち切った。



第33図　調査区地層断面実測図

第5章　遺　構　と　遺　物

遺物は後期縄文土器を主体に石器（石棒、線刻礫含む）と中・近世陶磁器、銭貨、鉛玉などである。中・近世陶磁器は第1層下部、すなわち第2層直上に出土し、柱穴や集石、溝状遺構もそれに準じて検出された。特に中・近世遺物と遺構はB－0区～B－5区、C－0区～C－5区までの調査区の西側寄りに集中してみられた。

縄文期の遺物はC－0区、C－1区を除く調査区の全面に分布出土するが、中でもA－1区～A－5区、B－1区～B－5区に顕著で、特にB－3区はその密度が高い。遺構は配石のみで、住居址や土坑などは検出されなかった。配石は目黒川に平行しA－2区～A－4区に密集してみられ、B－2区～B－5区とC－2区にも確認されている。縄文土器は総て破片で完形復元できるものは皆無である。それらは縄文後期後葉を主体とし、配石遺構内に出土するもの、その上面を被う状態でみられるもの、遺構周辺に散在出土をみたものである。ただし、これら土器の大部分は層位的に先後関係を保つ状態での出土ではなく、第2層～第3層に混在した状態で出土したものである。本調査区内において早期、前期、中期土器片少量が表面採集されている。以下、中・近世と縄文時代に分け解説してみよう。

A　中世・近世の遺構と遺物

（I）遺　　構

遺構は掘立柱建物の柱穴群と集石、溝状遺構などで（第34図）は、その全体配置図である。

（a）柱穴群（第34図）

柱穴はB－1区とC－4区を中心とし、その周辺に検出され、総数68個を数える。それらは遺憾なことに、配列に規格性がなく掘立柱建物として復元することは困難である。柱穴の平面プランは楕円形または円形を呈し、掘り方は直径25㎝～30㎝前後、50㎝前後、60㎝前後のものに大別できるが、主体は25㎝～30㎝前後のものである。深さは20㎝前後～70㎝前後とまちまちであるが、最も多いのは40㎝前後である。これらの柱穴中には、つめ石・根石の残るものも少数みられた。埋土は総て暗茶褐色を呈し、中に木炭細片を混入するものも多く見られた。

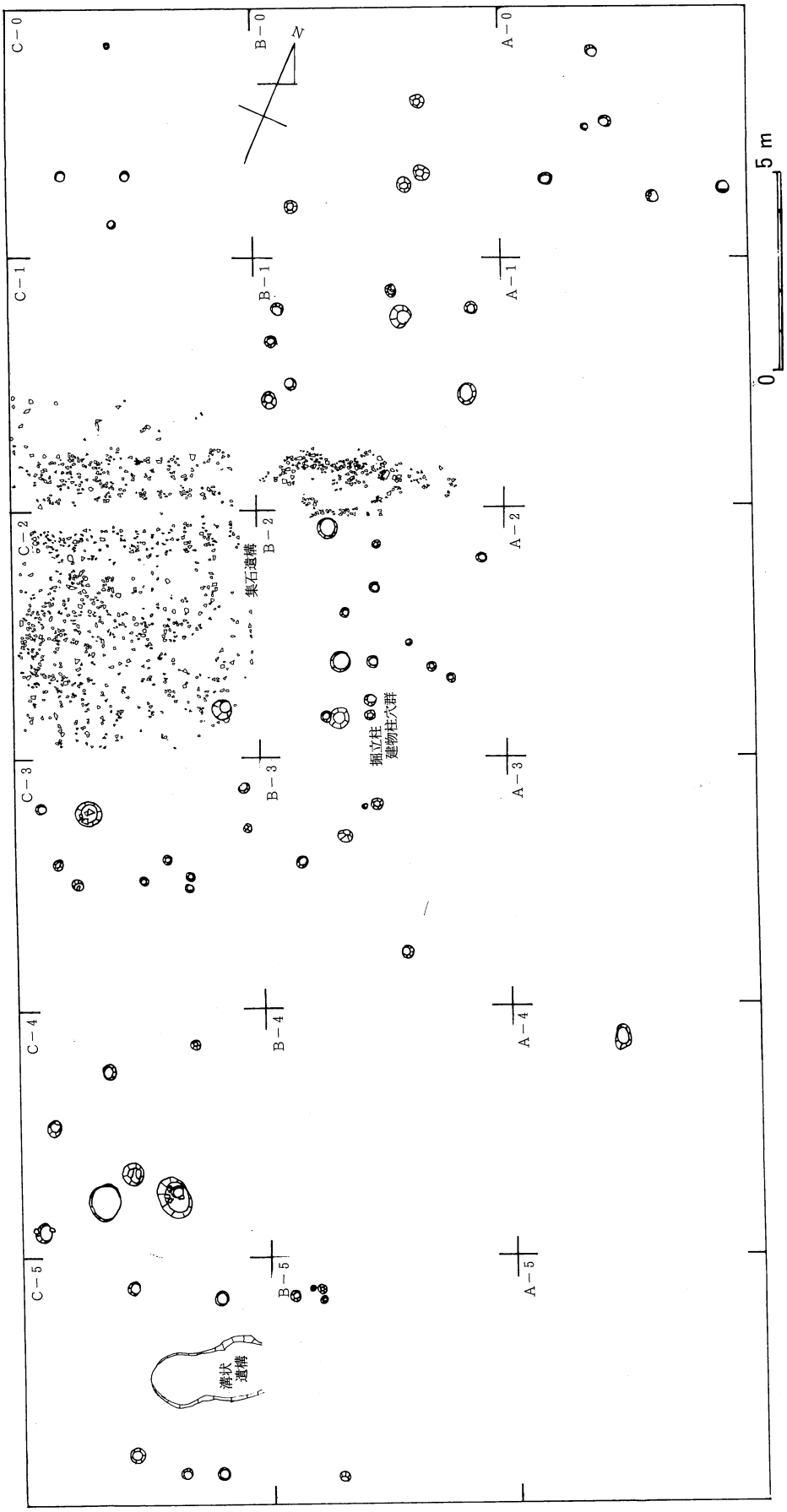
（b）集石遺構（第35図、第36図）

C－1区からC－2区（第35図）と、さらにB－1区（第36図）へとまたがり検出された。小礫は径5㎝前後の河原石から角石となったものを含む小礫を水平に敷き詰めた状態を呈する。小礫群に混ざり、近世陶磁器片の出土をみたが、特にC－2区からはその出土が多く、鉛玉の出土も確認された。

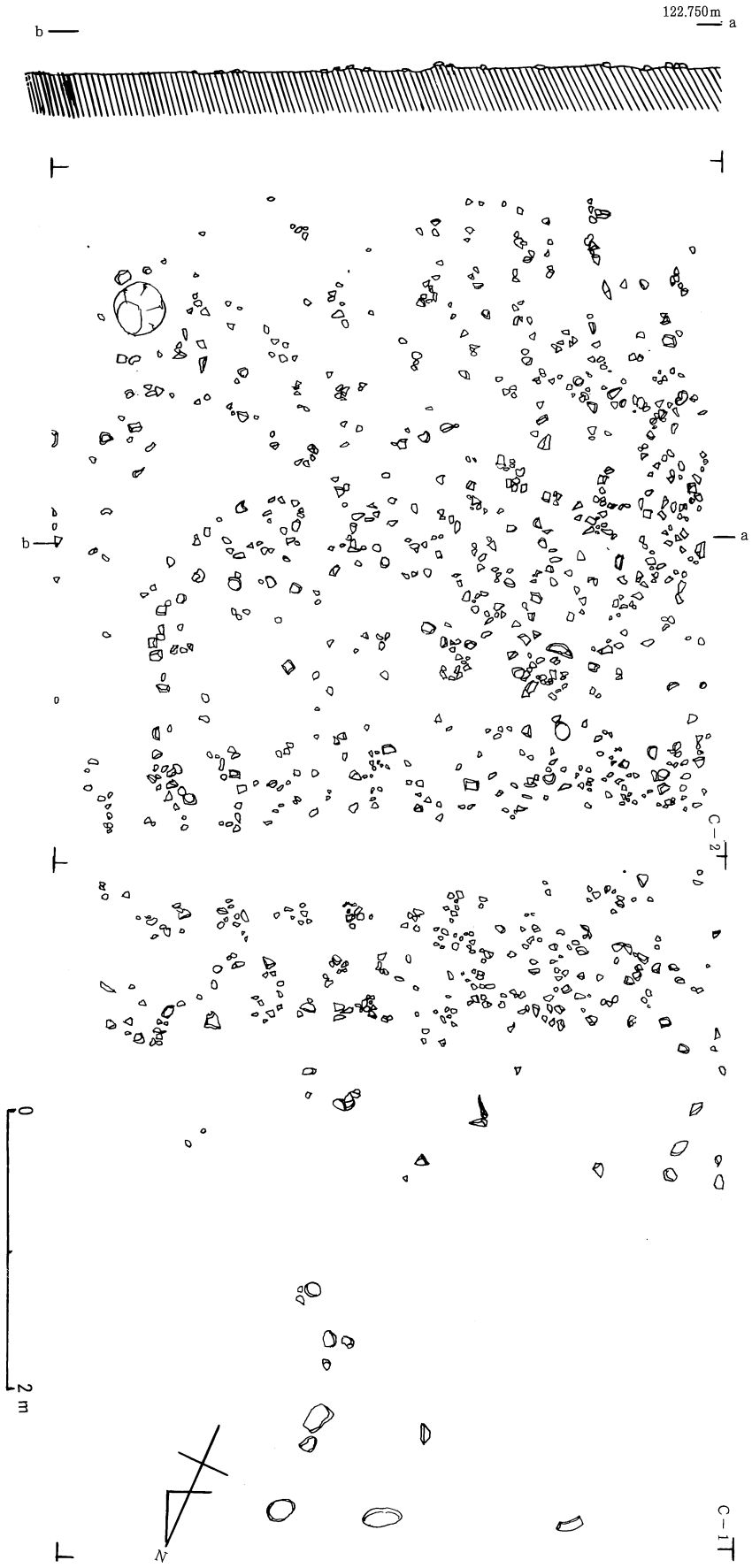
（c）溝状遺構（第37図）

C－5区で検出されたもので、本遺構は溝状となった遺構の一部にとどまる。平面形は長楕円形

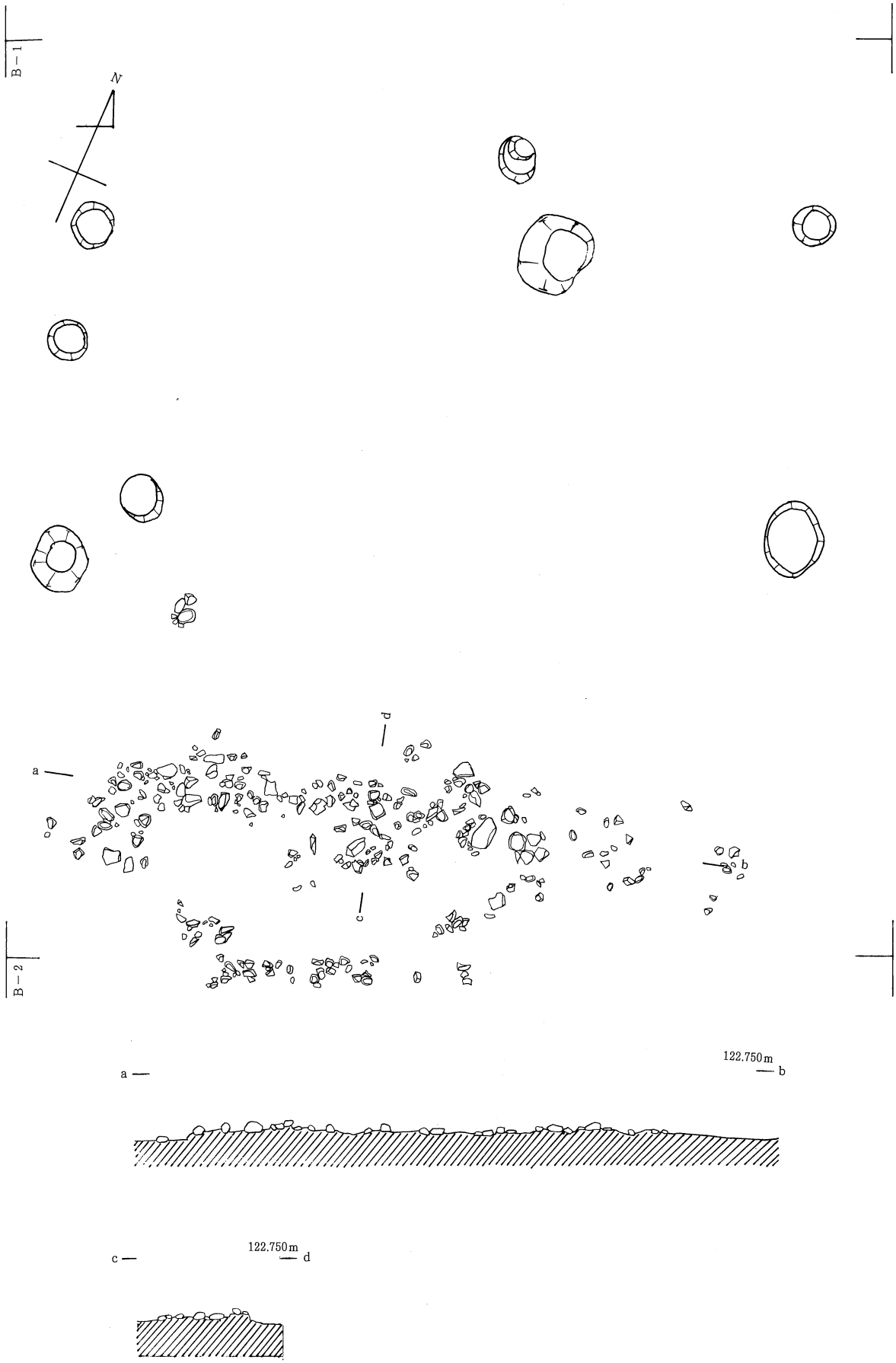
をなし、長軸2.3m、短軸1.3m。底幅は西側で約１m、東側約1.1m、深さは西端で20cmと浅く、東側に向うにしたがい徐々に深さを増し東端部で30cmを測る。床面はやや凹凸があるものの西から東方へと傾斜している。埋土は、第１層灰黄色粘質土、第２層黒褐色粘質土で、この層中には木炭細片を多く含む灰褐色粘質土や淡黄色粘質土がブロック状を呈しみられる。埋土中に青磁碗の口縁部片、赤絵碗の胴部細片が出土している。なお本遺構は、縄文時代の包含層を切って掘り込まれ、内部に少数ではあるが縄文後期後葉の片粕式や伊吹町式土器細片の出土が認められている。



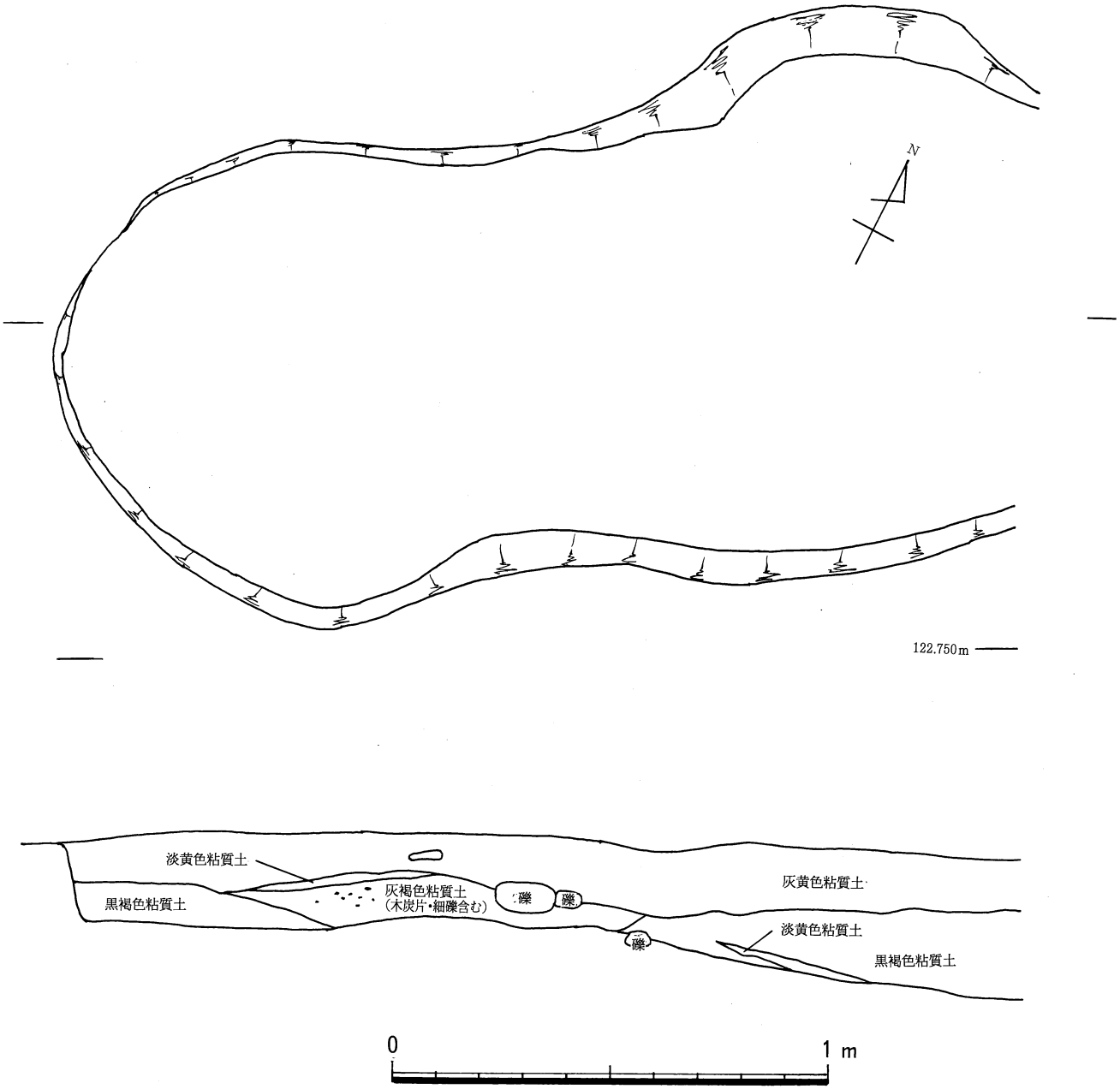
第34図　中・近世の各遺構検出配置実測図



第35図　C－1区～C－2区検出の集石遺構実測図



第36図　B－１区検出の集石遺構実測図



第37図　C－5区に検出の溝状遺構実測図

（Ⅱ）遺　　物

青磁、白磁、染付など輸入陶磁器と、備前焼、唐津系、瀬戸系、肥前系、伊万里系などの国産陶磁器、銭貨、鉛玉などである。

（a）青磁（第38図１～８）

１～４は龍泉窯系の碗で、（５～８）は稜花皿である。１はＣ－５区出土で端反りの口縁部片。（２）はＢ－４区、（３・４）はＣ－３区より出土し、共に内湾気みに立ち上がる口縁器形を呈する。これらの外面には（２）が形のくずれた波濤文、（３・４）は細蓮弁文が線描されるが、前者は蓮弁先端が丸く描かれ、後者の蓮弁先端は省略され、その上側に口縁に平行する１条の沈線と（２）同様の波濤文が描かれている。（５～７）は稜花皿の口縁部片、（８）はその底部片である。（６・７）は外反する口縁端部が丸みをなし、（５）は口縁波形を呈し端部はやや尖り気みとなり、これの内面には蓮弁が線描されている。

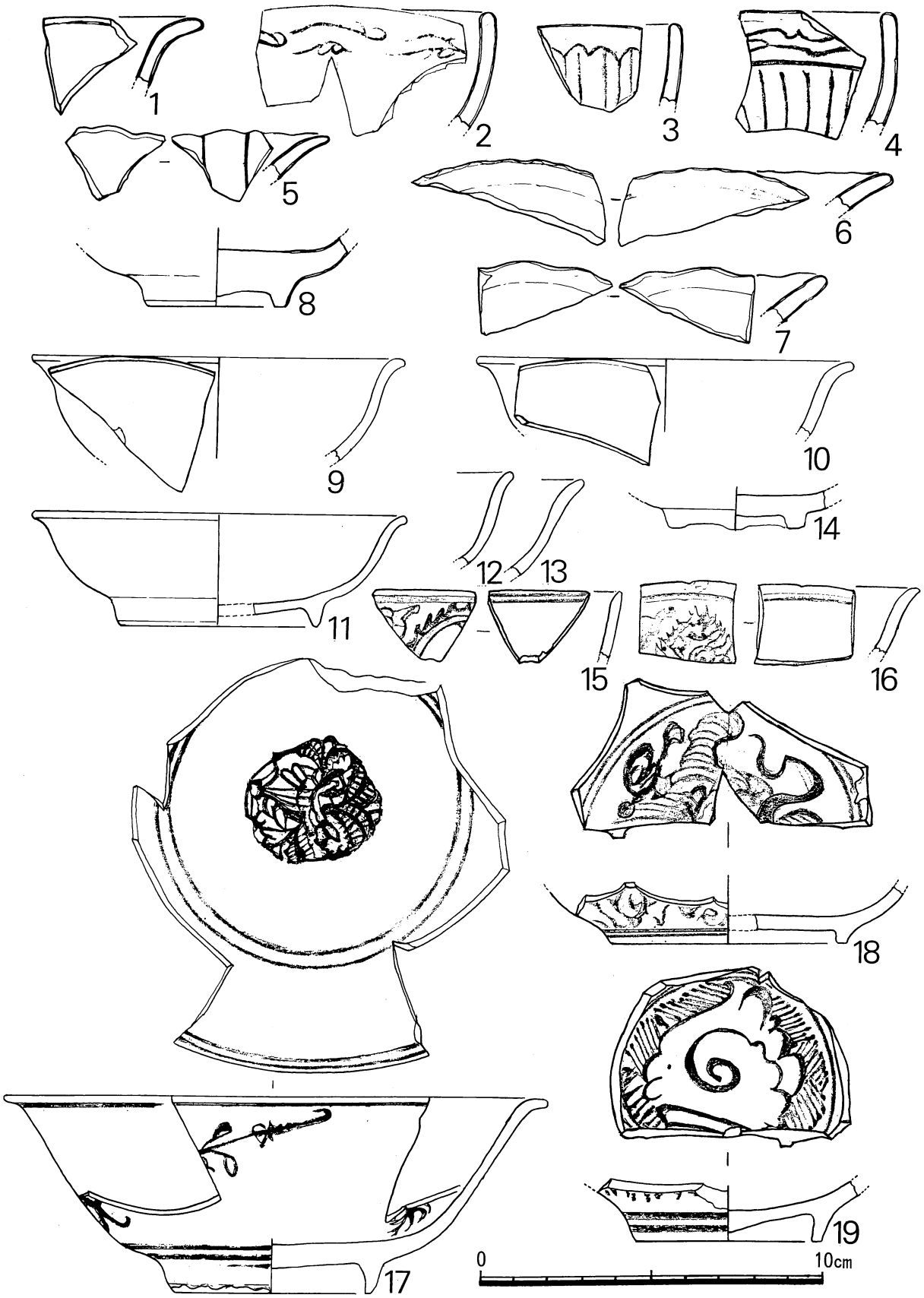
（b）白磁（第38図９～14）

６点の出土であるが、（９・11）はＣ－４区出土。(11）は底部まで復元可能な資料である。口径11㎝、器高2.8㎝、底径６㎝を測り、全面に乳白色釉が施される。これの口縁部は端反りの形態を呈し、高台は断面逆三角形を呈する。（９・10・12・13）はＣ－３区出土である。(13）は、内面に火を受けて灰白色を呈し、(14）は底部片で高台に特徴を有する。

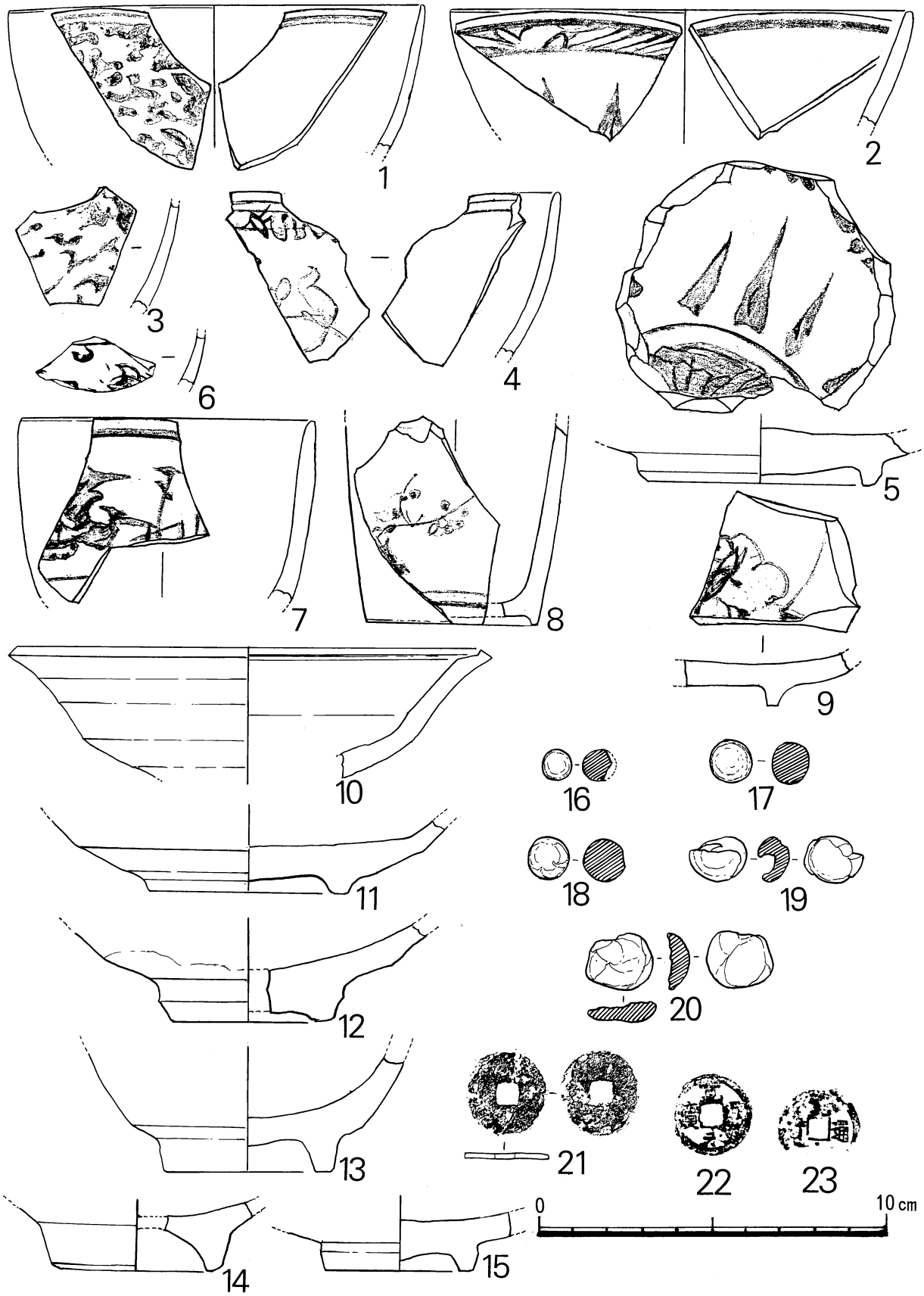
（c）染付（第38図15～19、第39図１～５）

皿と碗がある。碗は第38図（15・16・17・19)、第39図（１～５)、皿は第38図（18）である。碗の第38図（17）は全器形を知る資料で、Ｃ－４区の柱穴内に半分身を埋めた状態で出土したものである。口径16㎝、器高5.8㎝で高い貼り付け高台とよく張った胴をもち、口縁は「く」字状に外反し特徴とする。体部外面には草花文とみられる文様が描かれ、口縁内面見込みには２重の界線と中央に複雑入念に描かれた牡丹文を見る。なお、釉は高台途中までかぶる。第38図（15・16）はＣ－４区出土で共に口縁部片で、前者は外傾し内面に２重の界線、後者は１重の界線をもち端反り。両者の外面には牡丹唐草文を見る。同図（19）は碗の底部片で、内面見込みに２重の界線をもち、中央に丁寧に描かれた文様をもつ。第39図（１）はＢ－４区、（２）はＣ－３区、（４）はＢ－４区で、共に内湾気みに立ち上がる口縁器形をもつ口縁部片で、（１）の推定口径12㎝、内外面に２重の界線をもち外面体部には丸を三つ結合させたような文様を見る。同図（３）の胴部片も同一個体と思われる。（２）の推定口径13.5㎝で外面体部には蕉葉文が描かれ特徴的であるが、同図（５）の底部内面にも同様の文様がみられる。これの内面見込みに１重の界線が描かれ、中央にも文様が描かれる。（６）はＣ－５区溝状遺構内より出土した碗の体部片で、外面には赤絵のみられるものである。

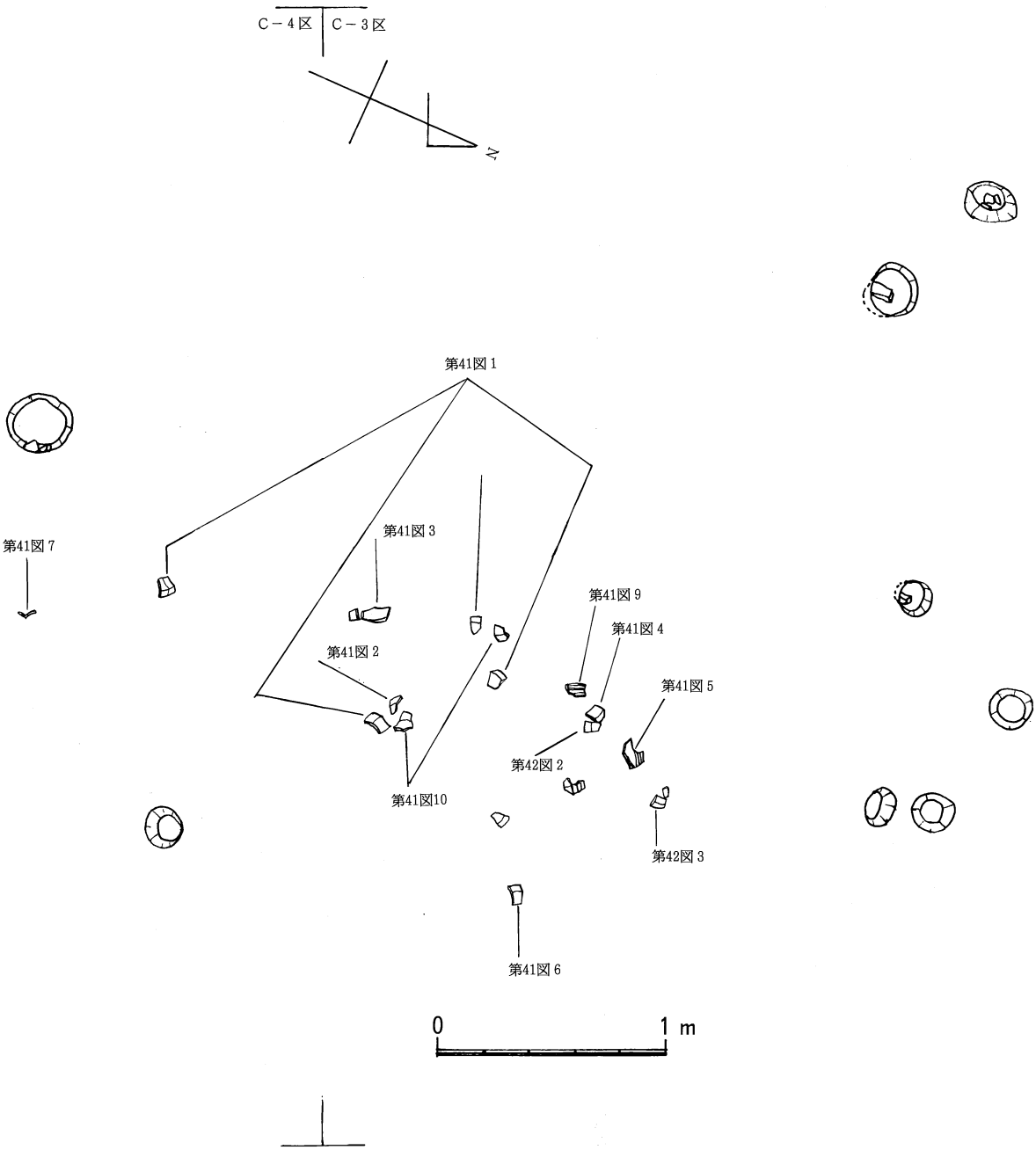
皿（第38図18）はＣ－５区出土で、１点の底部片である。底径７㎝で見込み部に２重の界線、その中に玉取獅子が描かれる。高台は箆削りで畳付外側を斜めに面取りする。わずかにとどめる体部外面には牡丹唐草文が残る。



第38図　中世の遺物実測図



第39図　中世・近世の遺物実測図

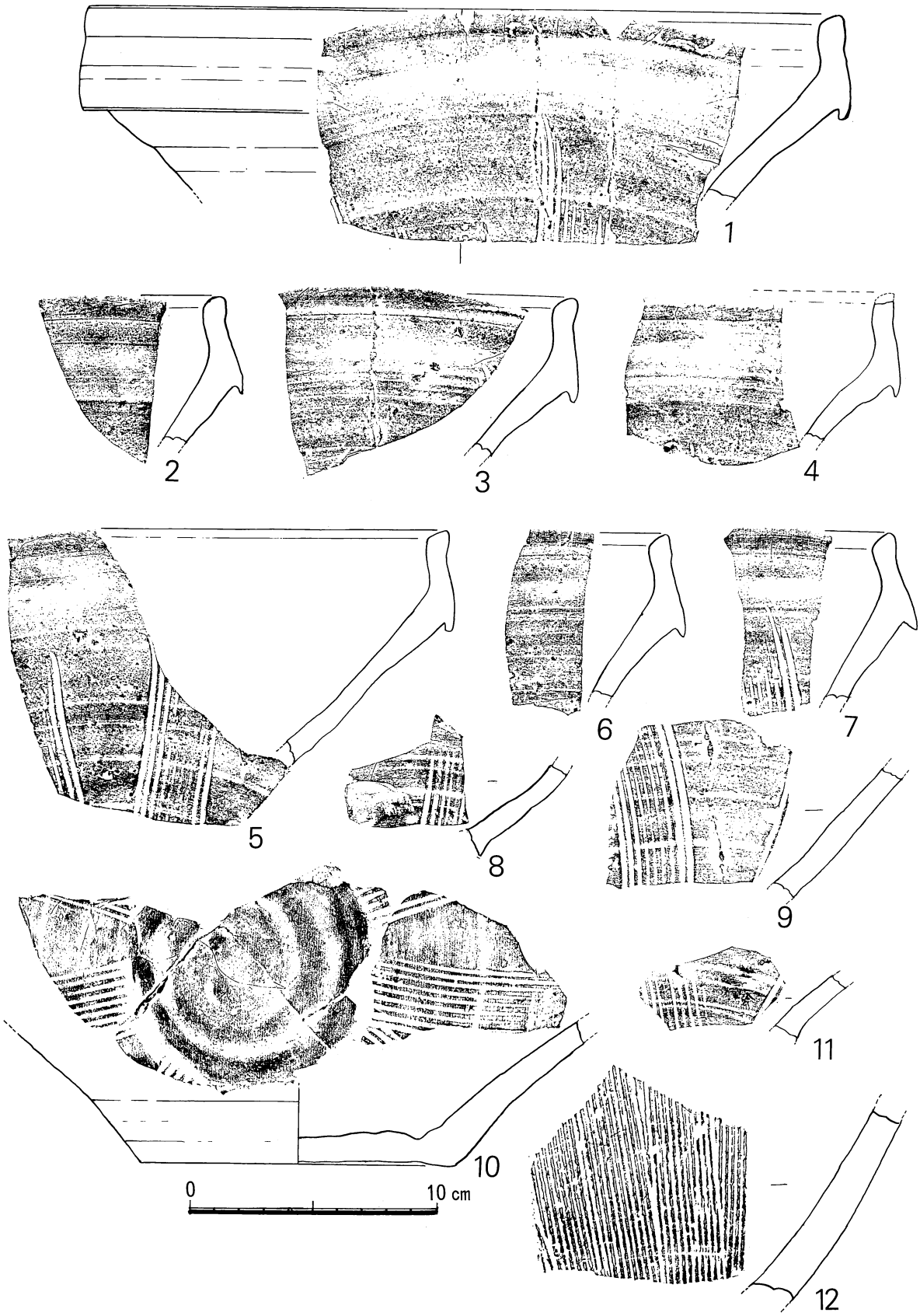


第40図　C－3区・C－4区備前焼擂鉢片出土分布図

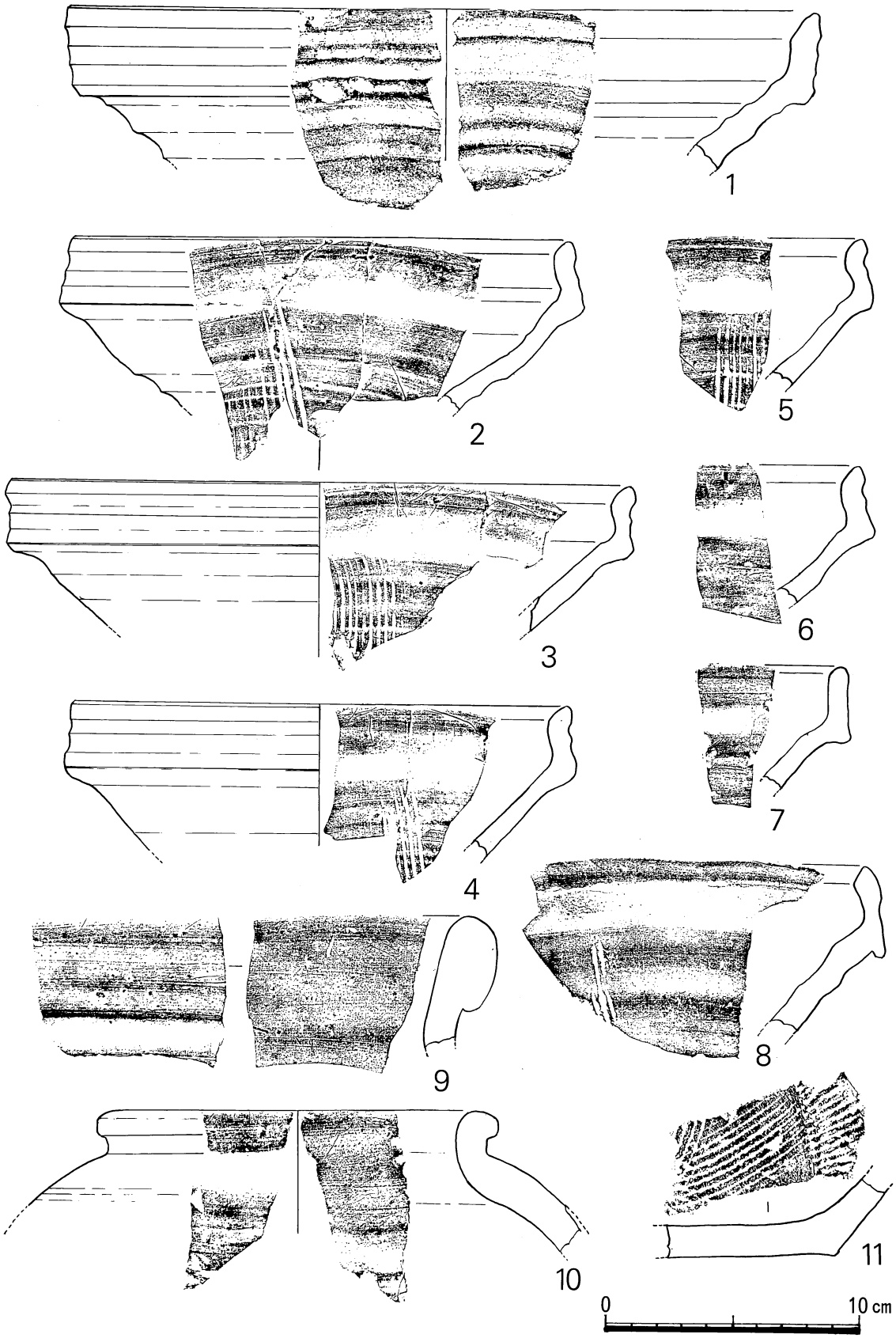
（d）備前焼（第41～42図）

遺物は多く、最も良好な資料に恵まれている。擂鉢を主体とし、若干の壺、甕がみられる。擂鉢の大部分はC－3区～C－4区出土で、総て破片であるが約2m四方に集中し出土したもので、第40図はその出土分布図である。

擂鉢（第41図1～12、第42図1～8・11）。第41図（1～7・9・10）は色調、器質、器形などの特徴から同一個体とみなされるもので、口径31cm、底径12cmを測る。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁は内傾気みに上下方向に大きく拡張され、端部は内傾する。内面の条線は9本を単



第41図　大宮・宮崎遺跡出土備前焼擂鉢



第42図　大宮・宮崎遺跡出土備前焼擂鉢・甕・壺

位とし、内面見込みは使用によって滑らかに磨耗している。第42図（１）は推定口径30㎝で、口縁は直線的に上方に立ち上がり端部は尖り気みに作られ、内外面には波状の段がつく。同図（２～６）の口縁は先のものと比べ上下の張り出しはみられず、立ち上がりも内傾しながらもやや短い。端部は内傾し、体部は緩やかに内湾して立ち上がり、内面の条線は判然としないが９本を前後すると思われる。第41図（８・11）は、これらに伴う体部片であろう。推定口径は（２）が20㎝、（３）は25㎝、（４）は20㎝である。（８）は口縁が上下方向に張り出すタイプで、端部は内傾し、体部は直線的に外上方に立ち上がる。なお、これの内面にスリ目の条線をみるものの一部をとどめるのみで、何条単位であったかは明らかでない。同図（７）は推定口径23㎝を測り、口縁は上下方向に拡張するが、直線的に立ち上がり、端部は丸みをなす。第41図（12）、第42図（11）は共に内面全面にスリ目を付すタイプで、前者はＣ－２区出土で体部片、後者は底部片で、これの見込みにはスリ目が付されている。

甕（第42図９）Ｃ－４区に出土した口縁部片で、推定口径40㎝、頸部は緩やかに外反して立ち上がり、端部は外側に折り反して玉縁となる。内外暗茶褐色をなす。

壺（第42図10）口縁から胴上半部にかけての破片で、推定口径16㎝を測り、玉縁状の口縁をもつ壺である。

（ｅ）伊万里系、肥前系、瀬戸系、唐津系（第39図７～15）

（７）は伊万里系碗、（８・９）は肥前系の前者が蕎麦猪口、後者は磁器皿の底部片、（14）の底部片も肥前系である。（13）は瀬戸系碗の底部片、（10～12）は総て唐津系で、（10・11）は皿で、前者はＡ－５区より出土の口縁部片、後者は底部片、（12）はＢ－３区出土の碗底部片である。

（ｆ）鉛玉（第39図16～20）

５点で総てＣ－２区に検出された集石遺構内より出土したものである。（16）は一部欠損するが、ほぼ完形に近く全体形の明らかなものである。長径0.9㎝、短径0.75㎝、重量3.0ｇである。（17）は完形で長径1.25㎝、短径1.20㎝、重量9.0ｇ。（18）は表面の一部がわずか剥落しているが長径1.25㎝、短径1.16㎝、重量7.5ｇ。（19・20）は原形を大きく変えたもので、前者は芯が抜けた表皮のみの残片で、形は歪み長径1.60㎝、短径1.25㎝、最大厚0.5㎝、重量5.5ｇ。後者は完全にひしゃげ扁平となっているもので長径1.9㎝、短径1.7㎝、最大厚0.55㎝、重量7.5ｇである。これらの表面は風化し、灰白色に変色している。

（ｇ）銭貨（第39図21～23）

Ｂ－４区出土で、（21）は全面風化が強く表面は潰れて文字は明らかでなく、銭種不明。（22・23）はＣ－４区出土で、共に国内銭の寛永通宝である。

B．縄文時代の遺構と遺物

遺構は先述したとおり配石のみで、第１号～第19号までの19基検出された（第43図）。遺物は土器、石器共に著しい出土で、土器は後期後半、石器は石材核を主体として調査区のＣ－０区、Ｃ－１区を除く総てのグリッド内に多数の出土が認められた（第44図）。以下、Ａ区からＣ区へと各グリッドごとに遺構と遺物について解説を加える。なお、土器については文様、器形、土器質などの特徴から次の第１類～第６類までに分類が可能である。したがって土器については本分類に基づき述べていきたい。

－縄文土器分類－

第　１　類（早期後半の城ノ台式）
第２Ａ類（前期初頭の羽島下層式土器）
第２Ｂ類（前期初頭の轟Ｂ式土器）
第　３　類（中期初頭の船元式土器）
第４Ａ類（後期中葉の平城Ｉ式土器）
第４Ｂ類（後期後葉の片粕式土器）
第４Ｃ類（後期後葉の広瀬上層式土器）
第４Ｄ類（後期後葉の伊吹町式土器）
第４Ｅ類（後期後葉、深鉢の口縁、胴上半部縄文施文土器）
第５Ａ類（後期後葉、深鉢、浅鉢口縁内面に沈線・凹線文施文土器）
第５Ｂ類（後期後葉、深鉢、浅鉢口縁・胴部外面に沈線・凹線文施文土器）
第５Ｃ類（後期後葉、完全無文の深鉢・浅鉢）
第６Ａ類（晩期中葉の中村Ｉ式土器）
第６Ｂ類（晩期後葉の中村Ⅱ式土器）

（１）Ａ－０区の出土遺物

本グリッドには配石の検出はない。ただ、散乱した状態で人頭大礫や拳大礫の出土は認められた。遺物は本グリッドの中央部に集中し出土をみた（第45図）。土器は第５Ａ・Ｂ・Ｃ類を主体としている。

土器（第46図・第47図）

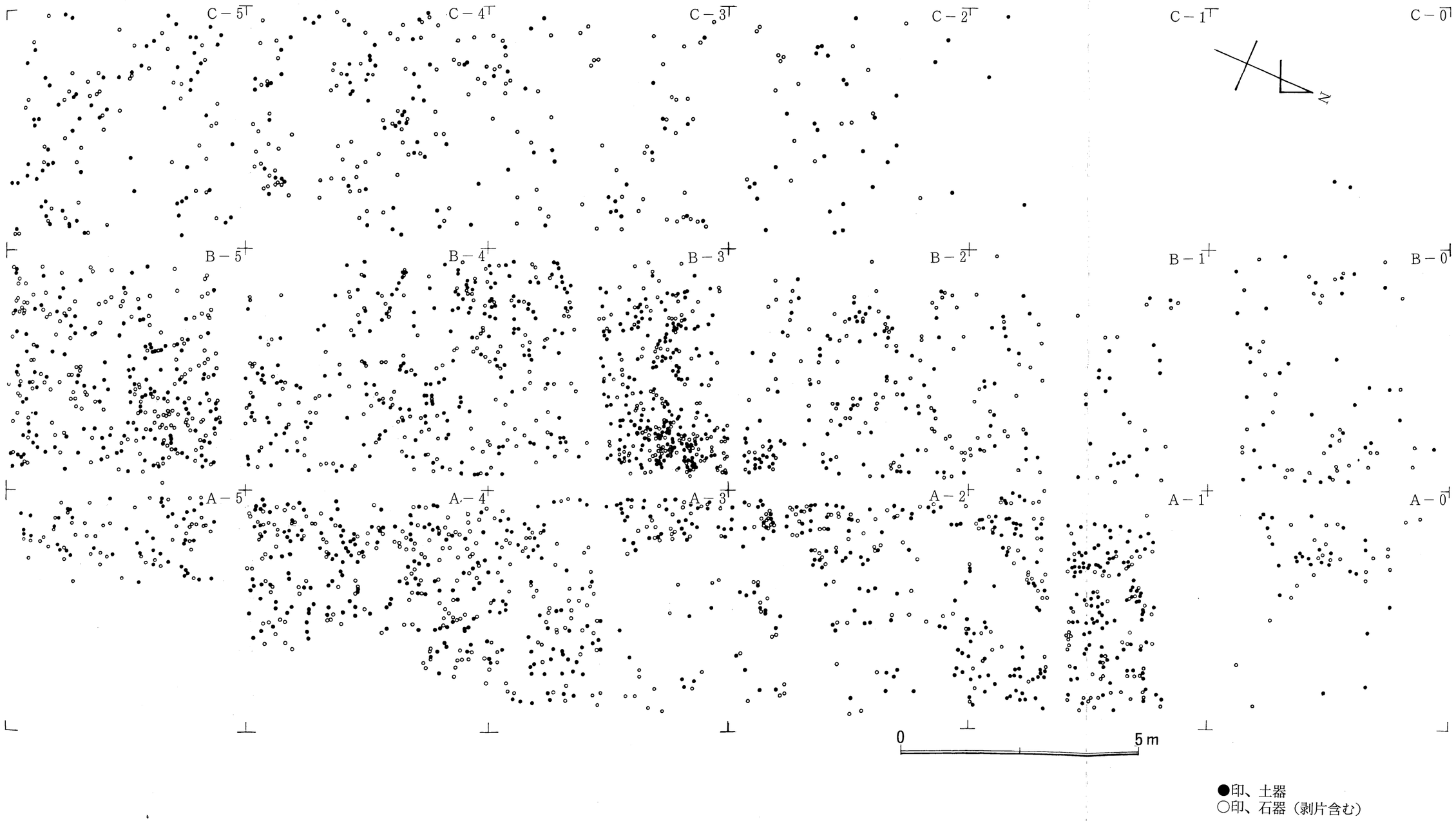
第４Ｂ類（第46図１）

１点の深鉢の胴上部片で、地文となる縄文はＬＲで、文様は縄文地に直接太い沈線で横位に１条描き、その沈線の末端は上向きに鉤状を呈し跳ね上がっている。本資料は、胴部文様帯の逆三角形文中央部に描かれた文様の一部である。

第４Ｅ類（第46図２・３）

深鉢の口縁部片で、器壁は薄く、直立気みに立ち上がる端部は丸みをなす。表面の縄文は共にＲＬである。

第43図　配石遺構検出全体配置実測図



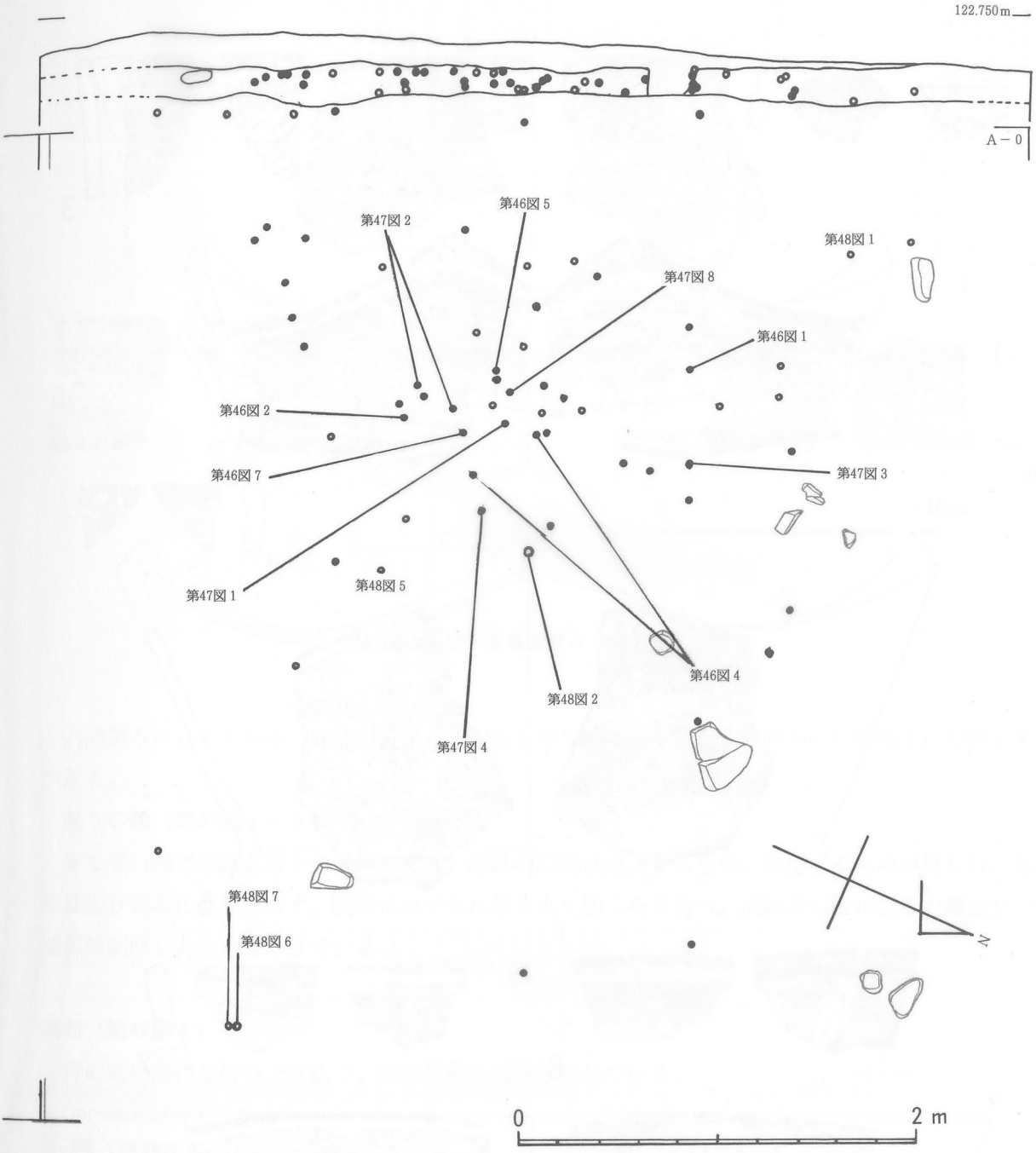
第44図　出土遺物平面全体分布実測図

第45図　Ａ－０区出土遺物平面、垂直分布実測図

第５Ａ類（第46図４～６・８）

深鉢と浅鉢がみられ、前者は波状口縁と平口縁がある。深鉢の波状口縁は傾斜がきつく、波頂部は尖り気みに山形状を呈する。器肉は薄く、直線的に立ち上がる頸部は外反し、口縁は「く」字状に内折させ、その端部は尖っている。これの胴部は張りをもたせ膨らんでいる。平口縁深鉢の器肉はやや厚く、頸部は外反させ、端部は肉薄く尖り気みとなる。胴部は上半部に最大径をもち張りはやや弱い。特徴となる沈線は口縁内面に描かれている。

第５Ｂ類（第46図７）

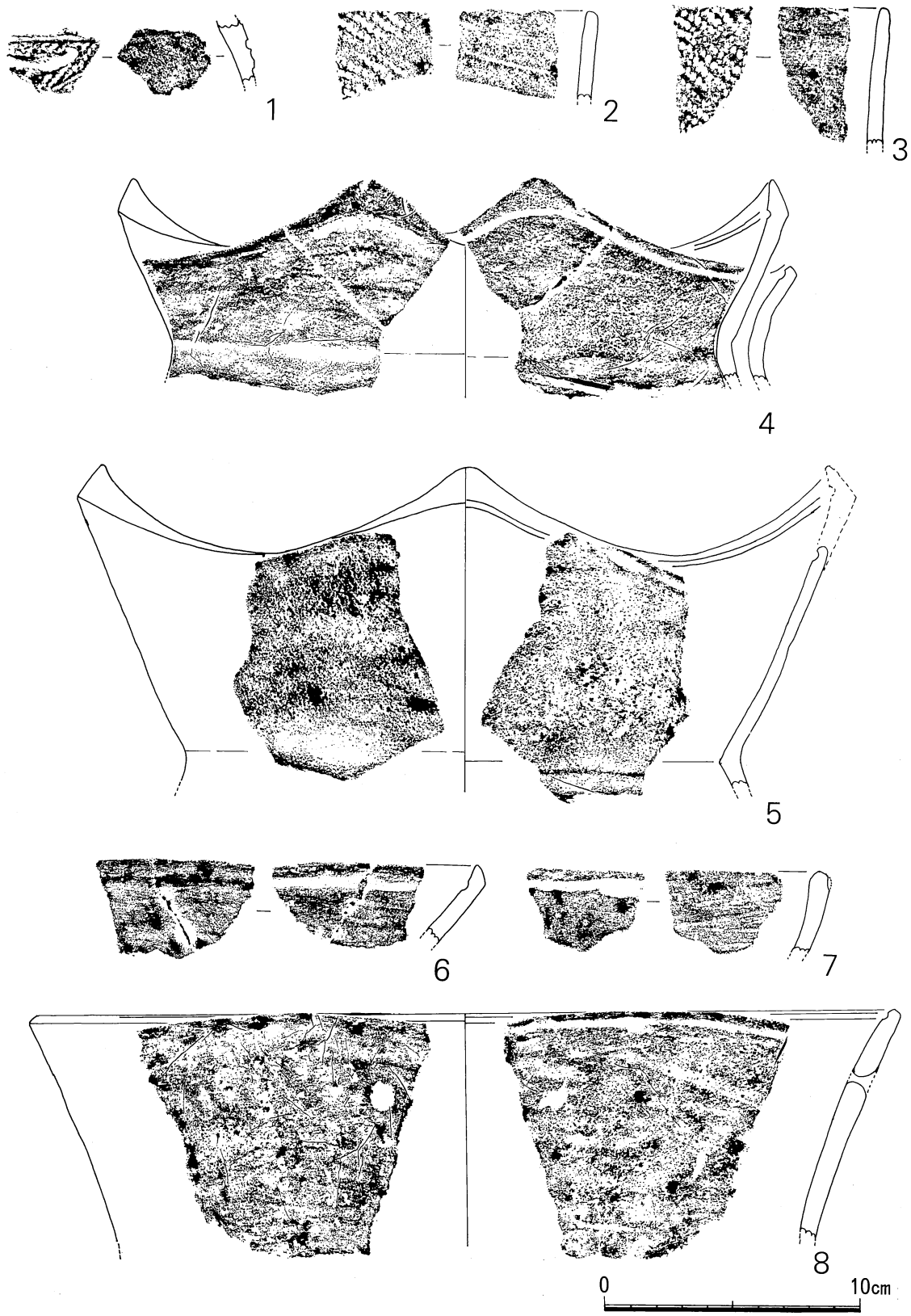


第45図　A－0区出土遺物平面、垂直分布実測図

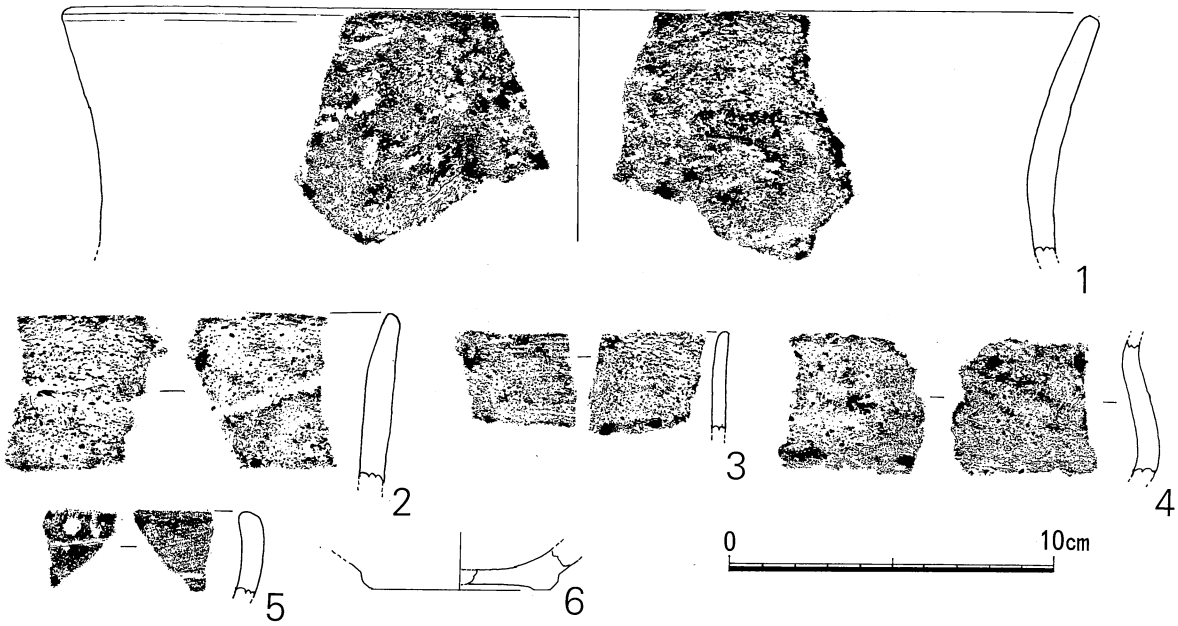
第５A類（第46図４～６・８）

深鉢と浅鉢がみられ、前者は波状口縁と平口縁がある。深鉢の波状口縁は傾斜がきつく、波頂部は尖り気みに山形状を呈する。器肉は薄く、直線的に立ち上がる頸部は外反し、口縁は「く」字状に内折させ、その端部は尖っている。これの胴部は張りをもたせ膨らんでいる。平口縁深鉢の器肉はやや厚く、頸部は外反させ、端部は肉薄く尖り気みとなる。胴部は上半部に最大径をもち張りはやや弱い。特徴となる沈線は口縁内面に描かれている。

第５B類（第46図７）



第46図　大宮・宮崎遺跡Ａ－０区出土土器



第47図　大宮・宮崎遺跡Ａ－０区出土土器

内湾気みに立ち上がる口縁器形を呈し、端部はやや厚く丸みをなす。外面の口唇直下に凹線１条が巡る。

第５Ｃ類（第47図１～５）

総て平口縁で深鉢と若干の浅鉢がある。深鉢の口縁は直立するもの、外反するものが見られ、端部は尖り気みに丸みをなす。胴部はわずかに張り丸く膨らみを持つ。浅鉢の口縁は緩く内湾させ、端部は肥厚し丸みをもたせている。

底部（第47図６）

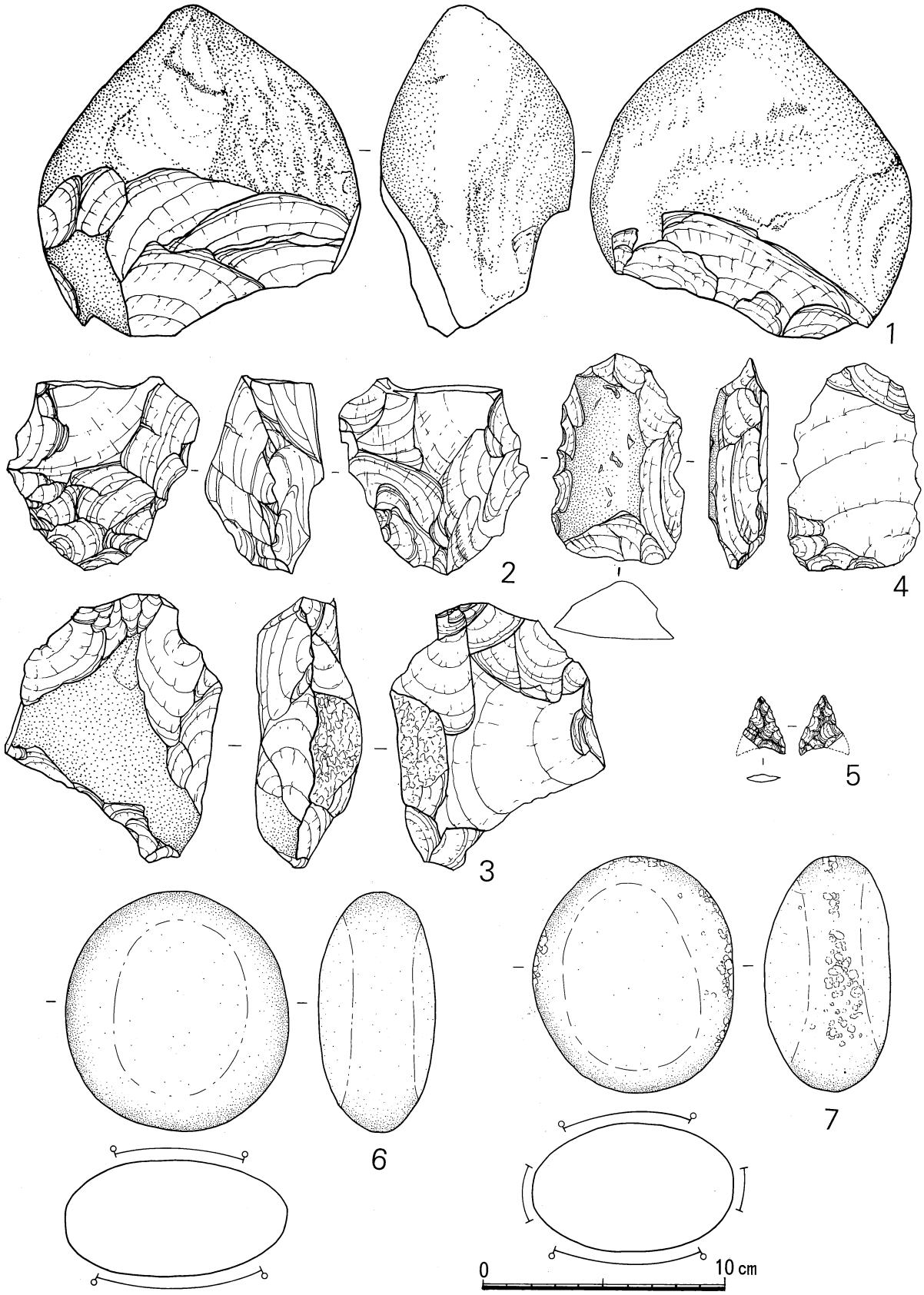
背の低い高台を持つ上げ底で、高台外側は面取りされている。

石器（第48図）

石材核を主体に磨石、叩石、石鏃などである。

石材核（第48図１～４）

（１）は大型の自然礫の一端に剥片剥離面をとどめている。剥片剥離は両面にみられ、大型の横長剥片剥取痕を残すが、剥片剥離作業のあまり進行していない資料。（２・３）は小型で、前者は周縁から施された剥片剥離痕を全面に残し、後者は自然礫を半裁し、その側縁より小型の剥片剥取が行われ、その剥離痕をとどめ、中央部片面には自然面を残す。（４）は中型で、これも周縁から粗く剥片剥離が施され、その剥離痕をほぼ全面にとどめるが、これの片面中央にも自然面を幅狭く残す。



第48図　大宮・宮崎遺跡Ａ－０区出土石器

大宮・宮崎遺跡Ａ－０区出土土器観察表（第２表）

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径（cm）	器面調整・色調 外面	器面調整・色調 内面	胎土	焼成
第46図１	62	深鉢胴部	24	黒褐色 横撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
2	19	深鉢口縁部	34	黄褐色 横撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
3	表採	深鉢口縁部	21	黄褐色 横撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
4	13 33	深鉢口縁部	26	灰茶色 横撫で滑らか	黄灰茶色 横撫で滑らか	長石粒・細砂粒・黒雲母粒	良好
5	54	深鉢口縁部	28.5	灰茶色 横撫で滑らか	黄灰茶色 横撫で滑らか	石英粒 細砂粒	良好
6	18	浅鉢口縁部	32	淡黄色 箆撫で滑らか	灰茶色 箆撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
7	34	浅鉢口縁部	16	淡黄色 撫で滑らか	淡黄色 撫で滑らか	細砂粒 黒雲母粒	良好
8	29	深鉢口縁部	34	赤褐色 横撫で滑らか	黄茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
第47図１	17	深鉢口縁部	32	暗茶褐色 撫で滑らか	暗茶褐色 撫で滑らか	細砂粒 長石粒・石英粒	良好
2	20 15	深鉢口縁部	30	茶褐色 撫で滑らか	茶褐色 撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
3	61	深鉢口縁部	22	黄褐色 横撫で滑らか	暗黄褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
4	18	深鉢胴部	20	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	大粒砂	良好
5	33	浅鉢口縁部	28	淡黄色 撫で滑らか	灰黒色 撫で滑らか	細砂粒	良好
6	50	底部	6	灰茶色 撫で滑らか	黄茶色 撫で滑らか	細砂粒 金雲母粒	良好

大宮・宮崎遺跡Ａ－０区出土石器観察表（第３表）

図番号	遺物記録No.	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石質	備考
第48図１	46	石材核	13.6	13.2	7.9	1,270	頁岩	両面に幅広く自然面残す
2	27	石材核	8.4	7.55	4.7	260	頁岩	小型、全面に剥離痕残す
3	表採	石材核	11	8.4	4.3	390	頁岩	片面に自然面残す
4	表採	石材核	8.5	5.3	2.4	130	頁岩	完形、片面に自然面残す
5	52	石鏃	2.6	1.8	0.3	0.8	頁岩	片脚欠損
6	39－1	磨石	9.8	9.1	4.7	606.17	砂岩	完形、両面中央に光沢あり
7	39－2	磨石	9.7	8.2	5.2	578.12	砂岩	両面中央研磨側面叩痕残す

石鏃（第48図５）

１点の出土で、二等辺三角形を呈し、押圧剥離による加工は大まかで粗く、基部の抉りは浅く弧状を呈している。

磨石・叩石（第48図６・７）

２点は共に接し、横並びした状態で出土したものである。自然円礫を素材としたもので、磨石（６）は中央両面共に摩滅し鈍い光沢を持つ。叩石（７）は、側面に使用によるアバタ痕をとどめ、中央両面はわずかに摩滅し、叩石と磨石の両用途を兼ね備えた資料。

（２）Ａ－１区の出土遺物

第４Ｂ類、第４Ｄ類土器を主体に、第５Ａ類土器と若干の第３類、第４Ａ類土器を出土している。石器には大型のサヌカイト製石材核がみられる。これらの遺物はグリッド中央部を東西方向に帯状に分布し、南側には扁平な人頭大礫、拳大礫が散在出土し、この礫群の中からも遺物は出土している。（第49図）。

土器（第50図～第53図）

第３類土器（第50図１）

深鉢口縁部片で、器壁は内傾し端部は肥厚させ平坦面を持つ。外面には背の低い突帯２条がみられ、その面に右に開口する「Ｃ」字状の連続刺突文が施され、突帯間には大粒の縄文ＲＬが施されている。

第４Ａ類（第50図２・３）

深鉢口縁部片で、（２）は立ち上がり気みに外反し、端部は丸く、わずかに肥厚さす外面には太い沈線１条が巡り、その沈線に接し下側に幅狭な縄文帯ＲＬをみる。（３）は直線的に延びる口縁は強く内傾し、口唇部は花野菜状に肥厚させ、その外面には口縁に平行する２条の沈線が描かれる。無文の短い頸部から球状に膨らむ胴上部へと移行するが、胴部との境目に１条の沈線が巡り、その下部に斜行する沈線５条が描かれている。この文様は、胴上部を逆三角形文を描き連続転回させ構成する。

第４Ｂ類（第50図４～12、第51図１・２）

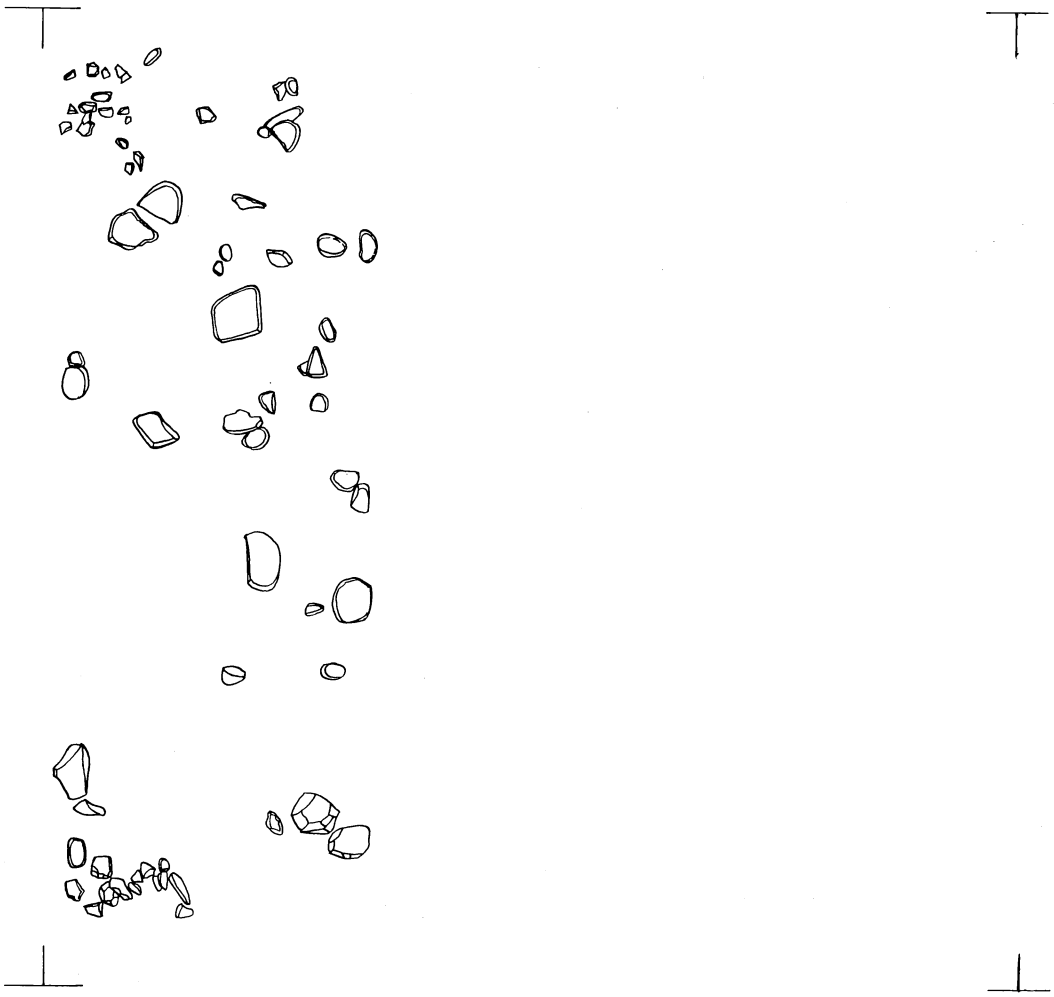
深鉢と浅鉢がみられ、深鉢には波状口縁と平口縁がある。波状口縁（４）は、傾斜が緩く波頂部に粘土紐貼付文をみるのを特徴とする。器壁は両者共に肉厚く、口縁は無文の外反する頸部を挟み「く」字状に内折させ、その端部はやや肥厚させ丸みをなす。文様帯は口縁、胴上部に持ち、縄文ＬＲを地文とする面に直接太い沈線で描かれる。口縁外面には２条の平行沈線と１条を波状に描き構成するもの（４～６・７）、２条沈線下部に押引き状の刺突文を連続施文さすもの（５）がみられ、内面にも同様の手法を見るものがある。胴部は４～５条単位の沈線で逆三角形文を連続転回させ、三角形文の中央に「Ｓ」字状文を描き文様構成する。（８～12）は、その文様の一部を外面にとどめる胴部片である。

浅鉢（第51図１・２）は平口縁をなし、器壁はやや肉厚く、口縁は内湾し、口縁から底部へとは

緩く内湾させている。口縁外面には比較的幅広い文様帯を持ち、精緻に描かれた文様と篦研磨された精製品を多くみる。（1）は精製品で、ＬＲとなる縄文地に３条単位の沈線を上下２段に描き、その間に蛇行文４条を垂下させ文様集約部を作り、３条単位の平行沈線の真ん中の沈線内に穀粒状の列点刺突文を密に施し飾っている。（2）は１条の沈線を上下２段描き、その沈線間に波状文を描き文様構成している。

第４Ｄ類（第51図３～13）

深鉢と浅鉢がある。前者は波状口縁と平口縁があり、共に無文の長く延びた頸部は外反し、口縁は小さく「く」字状に内折さす。波状口縁の傾斜はやや強く、これの波頂部には「U」字状の凹みを見る。（3）は波状口縁の深鉢であるが、口縁外面にはＬＲの縄文を持ち、その縄文地に２条単位の沈線を口縁に沿って描き、末端を弧状短沈線でつなぎ、左右から上がってきた２条沈線の末端はわずかな間隔を開けて対向させている。口縁、頸部との境目にも１条の沈線が巡り、本沈線と２条単位の沈線内を穀粒状刺突例点文で飾っている。平口縁（４・５）も前者同様、口縁外面と胴上半部に幅狭な文様帯を持つ。これの口縁外面には２～３条単位の平行横直線が描かれ、その沈線間

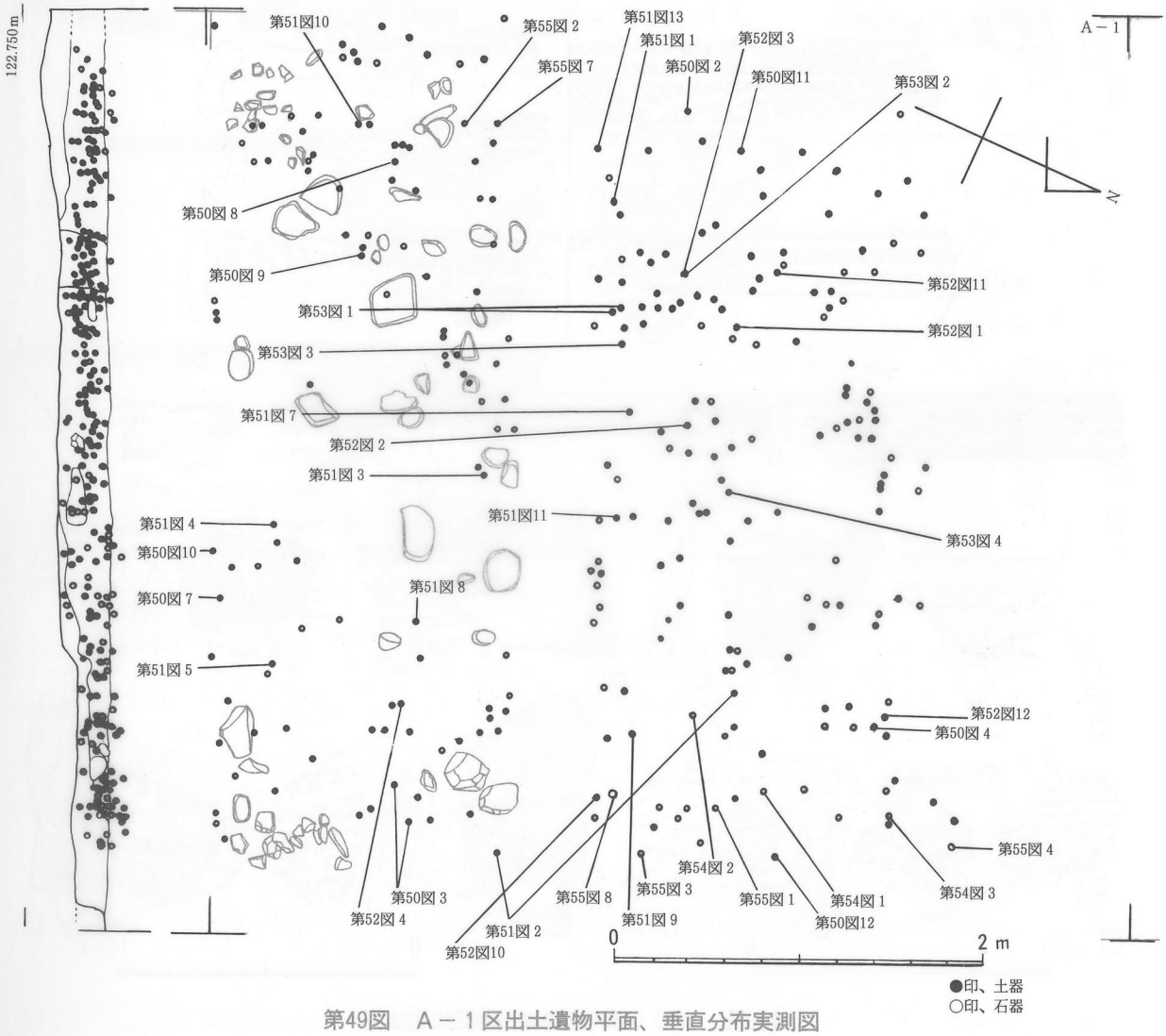


第49図　Ａ－１区出土遺物平面、垂直分布実測図

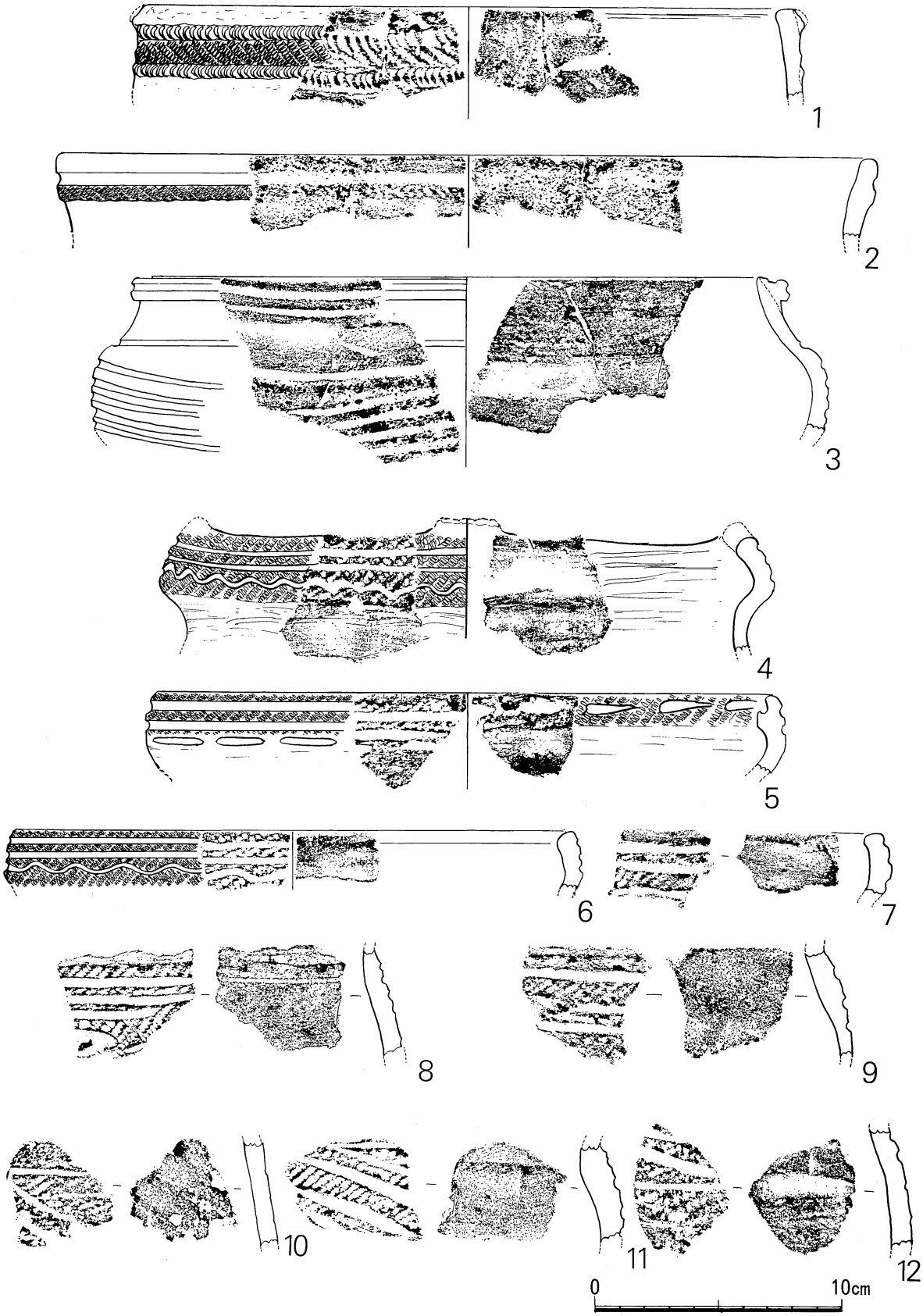
緩く内湾させている。口縁外面には比較的幅広い文様帯を持ち、精緻に描かれた文様と箆研磨された精製品を多くみる。（1）は精製品で、ＬＲとなる縄文地に３条単位の沈線を上下２段に描き、その間に蛇行文４条を垂下させ文様集約部を作り、３条単位の平行沈線の真ん中の沈線内に穀粒状の列点刺突文を密に施し飾っている。（2）は１条の沈線を上下２段描き、その沈線間に波状文を描き文様構成している。

第４Ｄ類（第51図３～13）

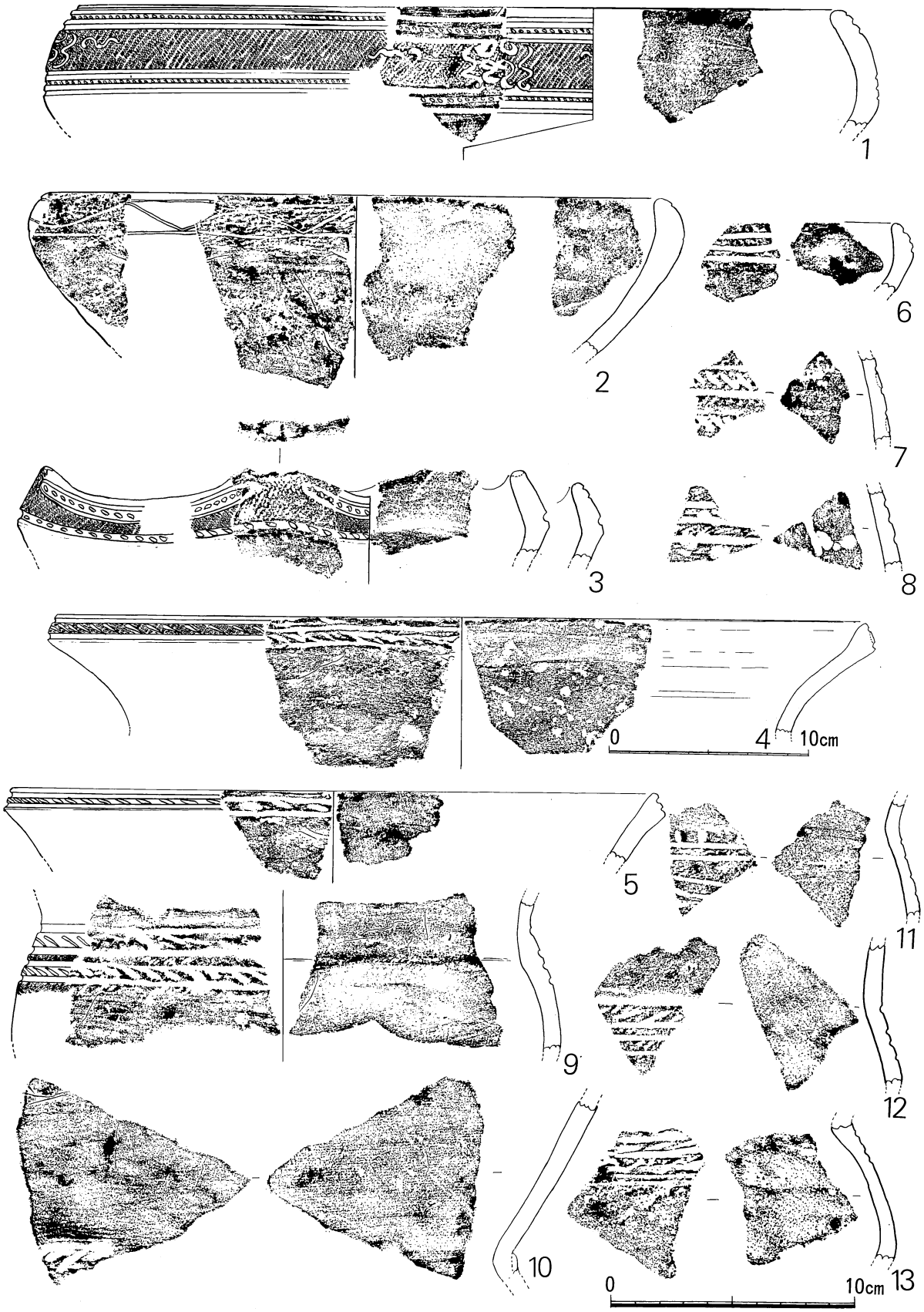
深鉢と浅鉢がある。前者は波状口縁と平口縁があり、共に無文の長く延びた頸部は外反し、口縁は小さく「く」字状に内折さす。波状口縁の傾斜はやや強く、これの波頂部には「U」字状の凹みを見る。（3）は波状口縁の深鉢であるが、口縁外面にはＬＲの縄文を持ち、その縄文地に２条単位の沈線を口縁に沿って描き、末端を弧状短沈線でつなぎ、左右から上がってきた２条沈線の末端はわずかな間隔を開けて対向させている。口縁、頸部との境目にも１条の沈線が巡り、本沈線と２条単位の沈線内を穀粒状刺突例点文で飾っている。平口縁（４・５）も前者同様、口縁外面と胴上半部に幅狭な文様帯を持つ。これの口縁外面には２～３条単位の平行横直線が描かれ、その沈線間



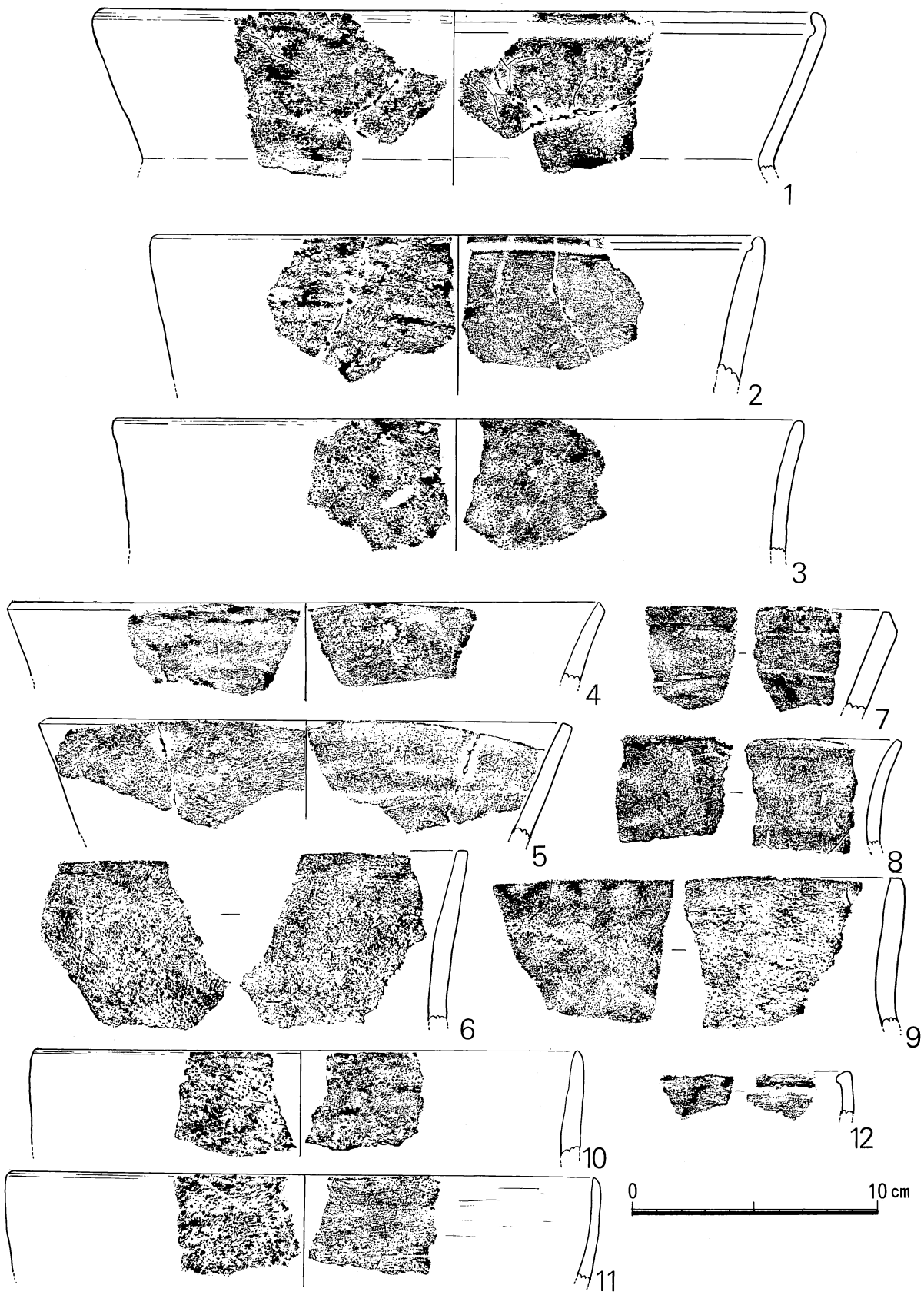
第49図　Ａ－１区出土遺物平面、垂直分布実測図



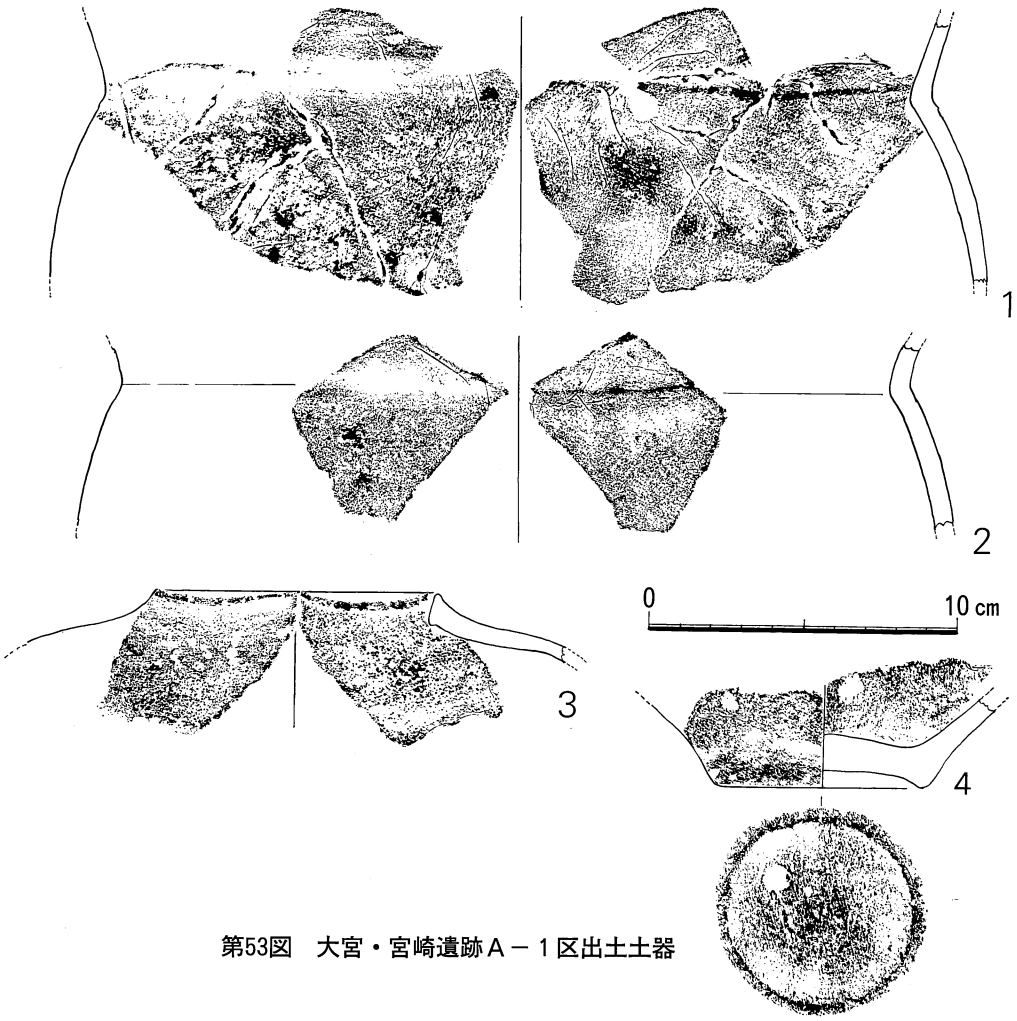
第50図　大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土土器



第51図　大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土土器



第52図　大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土土器



第53図　大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土土器

に右から左に斜く斜行刻目文が連続施文される。胴部（７～13）は、球状に膨らみ、胴上半部にみられる文様帯は、口縁同様、平行横直線を４条描き、その沈線間に口縁にみられた刻目と同様のタッチで連続施文される。稀には刻目が左から右に傾斜する刻目（12・13）や、縦位に刻む（11）などをみる。また刻目は、胴部を１段ないしは２段にわたって描かれる。この斜行刻目は、本類土器の最も特徴とする手法であるが、縄文が小粒となり、その撚り方向がＬＲを主体とするもののＲＬが含まれ、沈線が細くなるなども特徴である。

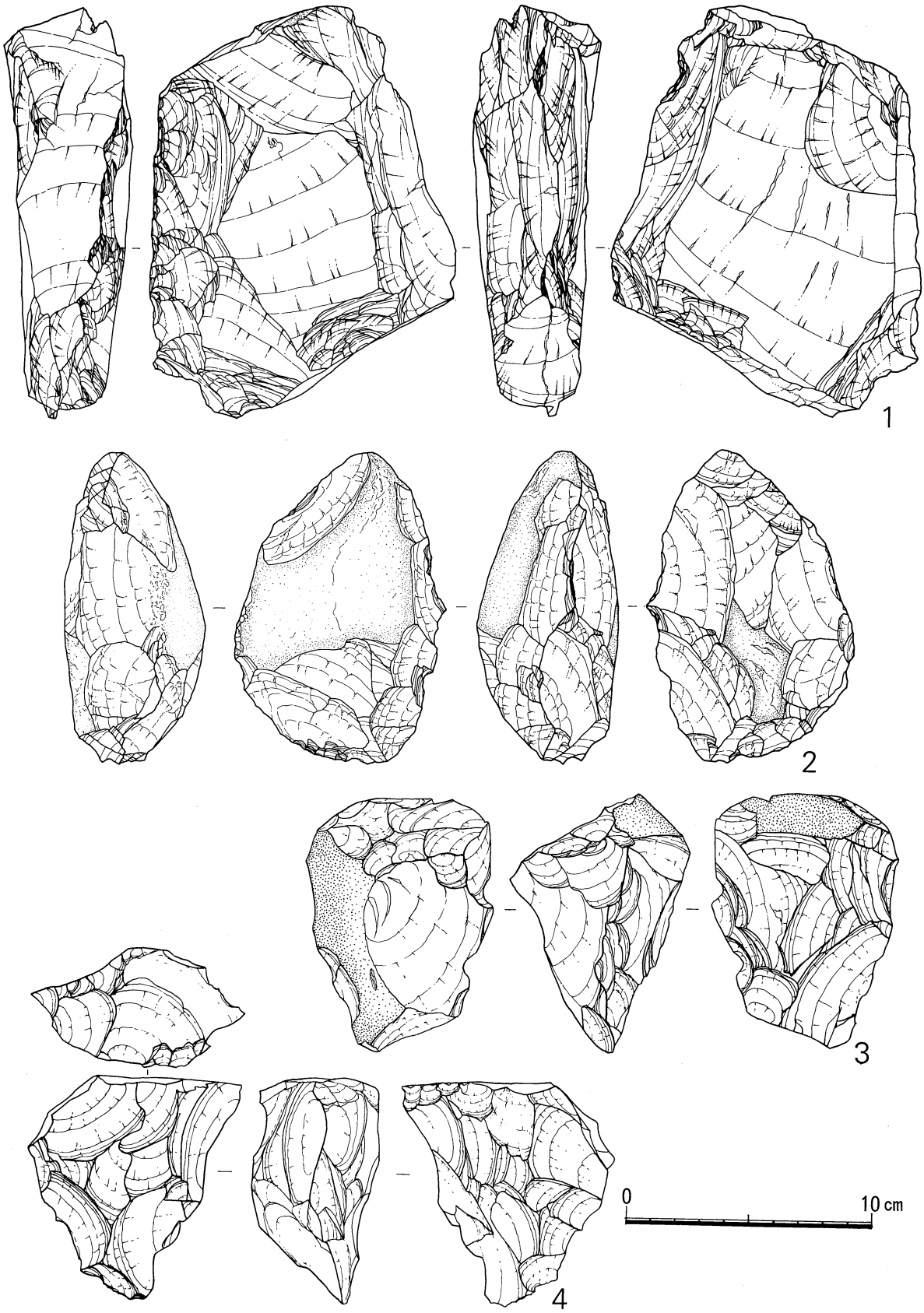
浅鉢（第51図６）器壁は肉薄く、口縁は緩く「く」字状に内湾するが、立ち上がる口縁は短かく、端部は尖り気みとなる。外面には幅狭な文様帯を持ち、縄文ＬＲとなる面に直接文様が描かれている。３条単位となる沈線が口縁を巡るが、その内の真ん中の１条が弧状に描かれている。

第５Ａ類（第52図１・２、第53図１・２）

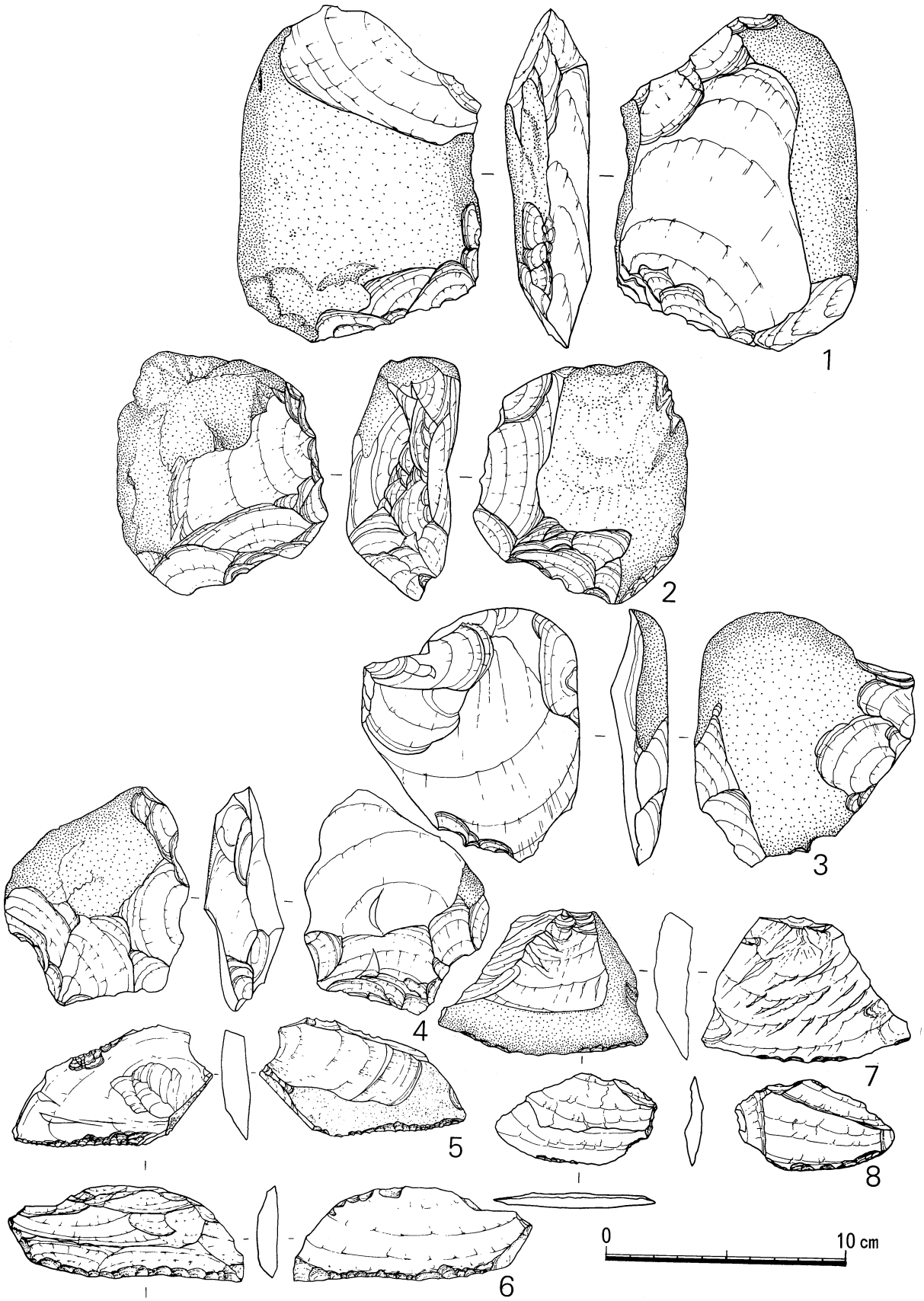
深鉢で直線的に立ち上がる長い頸部はやや外傾し、端部は尖り気みに丸みをなす。内面の口唇直下には特徴となる１条の太い沈線が口縁に平行し巡る第52図（１・２）。胴部の境目はくびれ、内面に稜を作出する第53図（１・２）、胴部は張り球状をなす。

第５Ｃ類（第52図３～12、第53図３）

深鉢、浅鉢と注口土器がみられる。深鉢の口縁は器壁が直線的に延びるもの（９）、外傾（４～７）、外反（８）するものなどがみられ、その端部は肉薄くなり水平にカットされ平端面を作る。浅鉢は、深鉢に比べ器肉は薄い。口縁は直立するもの、緩く内湾さすものなどで、端部は尖るもの



第54図　大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土石器



第55図　大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土石器

大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土土器観察表（第４表）

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径（cm）	器面調整・色調 外面	器面調整・色調 内面	胎土	焼成
第50図１	表採	深鉢口縁部	26	黄赤褐色、縄文RL、横撫で滑らか	黄赤褐色 横撫で滑らか	石英粒 大粒砂	良好
2	264	深鉢口縁部	33	黄茶褐色、縄文RL、横撫で滑らか	黄茶褐色 横撫で滑らか	長石粒 大粒砂	不良
3	104 105	深鉢口縁部 胴部	26 29.5	黄灰茶色 横撫で滑らか	黄灰茶色 横撫で滑らか	石英粒 大粒砂	不良
4	表採	深鉢口縁部	25	黒褐色、縄文LR、横条痕撫で消し	黒褐色 横条痕撫で消し	大粒砂	良好
5	表採	深鉢口縁部	25	黄茶褐色、縄文LR、横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
6	表採	深鉢口縁部	23	黒褐色、縄文LR、横撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
7	219	深鉢口縁部	33	黄茶色、縄文LR、撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
8	151	深鉢胴部	33	赤褐色 縄文ＬＲ	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒 金雲母粒	良好
9	140	深鉢胴部	28	暗茶褐色 縄文ＬＲ	赤茶褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
10	217	深鉢胴部	30	赤褐色 縄文ＬＲ	赤褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
11	63	深鉢胴部	29	黒褐色 縄文ＬＲ	暗茶褐色 横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
12	24	深鉢胴部	23	赤褐色 縄文ＬＲ	暗茶褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
第51図１	263	浅鉢口縁部	34	黒褐色 縄文ＬＲ	黒褐色 篦研磨	細砂粒	良好
2	16 102	浅鉢口縁部	25	暗茶褐色 縄文ＬＲ	赤黄褐色 横撫で滑らか	細砂粒 黒雲母粒	良好
3	132	深鉢口縁部	22	黒褐色 縄文ＬＲ	茶褐色 横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
4	131	深鉢口縁部	48	黄茶褐色 縄文ＬＲ	赤褐色 篦撫で滑らか	長石粒 石英粒	良好
5	128	深鉢口縁部	25	暗茶褐色 縄文ＲＬ	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
6	表採	浅鉢口縁部	27	黄茶褐色 縄文ＲＬ	黄茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
7	35	深鉢胴部	26	赤褐色 縄文ＲＬ	赤褐色 横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
8	130	深鉢胴部	21	赤褐色 縄文ＲＬ	赤褐色 篦撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土土器観察表（第５表）

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径（cm）	器面調整・色調 外面	器面調整・色調 内面	胎土	焼成
第51図９	12	深鉢胴部	22	暗茶褐色 縄文ＲＬ	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
10	154	深鉢頸部	48	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒 黒雲母粒	良好
11	33	深鉢胴部	22	茶褐色 縄文ＲＬ	茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
12	表採	深鉢胴部	32	暗茶褐色 縄文ＲＬ	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
13	6	深鉢胴部	32	赤褐色 縄文ＲＬ	黄褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
第52図１	56	深鉢口縁部	30	灰茶褐色 横撫で滑らか	灰茶褐色 横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
2	42	深鉢口縁部	25	黒褐色 横撫で滑らか	茶褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
3	53	深鉢口縁部	28	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
4	116	深鉢口縁部	24	黒褐色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
5	ベルト内	深鉢口縁部	21	黄褐色 横撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
6	ベルト内	深鉢口縁部	32	茶褐色 横撫で滑らか	茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
7	表採	深鉢口縁部	27	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒 金雲母粒	良好
8	ベルト内	深鉢口縁部	29	灰茶褐色 撫で滑らか	灰茶褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
9	ベルト内	深鉢口縁部	33	茶褐色 横撫で滑らか	茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
10	11	浅鉢口縁部	22	淡灰色 撫で滑らか	白黄色 撫で滑らか	大粒砂	良好
11	92	浅鉢口縁部	24	淡黄色 撫で滑らか	黒灰色 撫で滑らか	細砂粒	不良
12	27	浅鉢口縁部	19	黒褐色 横撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
第53図１	60 45	深鉢胴部	30	黒褐色 横撫で滑らか	灰白色 横撫で滑らか	細砂粒 黒雲母粒	良好
2	53	深鉢胴部	28	暗赤褐色 横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
3	44	注口土器 口縁部	9	黄褐色 撫で滑らか	黄褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
4	269	底部	7	赤褐色 撫で滑らか	灰黄褐色 撫で滑らか	細砂粒 黒雲母粒	良好

大宮・宮崎遺跡Ａ－１区出土石器観察表（第６表）

図番号	遺物記録No.	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石質	備考
第54図１	145	石材核	16.5	12.4	5.3	1251.14	サヌカイト	風化少なく、石材核の原形をとどめる
2	287	石材核	12.6	8.6	5.7	564.28	頁岩	剥離面鋭利
3	278	石材核	10.2	7.6	6.8	460	頁岩	一部に自然面残す、青黒色、剥離面鋭利
4	279	石材核	9.0	7.2	5.0	190	頁岩	灰青黒色
第55図１	196	石材核	33.8	9.9	3.35	580	頁岩	自然面幅広く残す、青黒色、剥離面鋭利
2	255	石材核	10	8.6	4.1	460	頁岩	黄茶風化、自然面を両面に残し全体的に摩滅
3	201	石材核	10.5	9.2	2.2	240	頁岩	灰黒色、片面に幅広く自然面残す
4	277	石材核	9.7	7.8	3.0	190	頁岩	青黒色、扁平、剥離面鋭利
5	表採	スクレイパー	8.5	4.5	1.15	40	頁岩	片面に自然面残す
6	ベルト内	スクレイパー	9.8	3.9	0.8	35	頁岩	灰白色風化、全体的に摩滅、刃部両面加工
7	249	スクレイパー	8.8	6.0	1.4	80	頁岩	横長剥片素材、片面に自然面残す
8	200	スクレイパー	6.7	3.8	0.7	14.04	頁岩	完形、横長剥片素材

（10・11）、内側に折り反して肥厚する口唇を作出するもの[12]などである。

注口土器・底部（第53図３・４）、（３）は口縁部片で、その口唇部は肉薄く作られ、胴部へと向って肉薄く強く張り出している。たぶん球状に膨らむ胴部を形成すると思われる。これの器面は撫でによって調整され、滑らかな肌を呈する。（４）は底部で、外底を弧状に緩く上げた上げ底である。

石器（第54図・第55図）

石材核を主体に若干のスクレイパーがある。

石材核（第54図１～４、第55図１～４）８点の石材核は７点までが頁岩で、サヌカイト製も１点含まれている。第54図（１）がサヌカイト製で、灰黒色を呈し、断面には幾層にも重なる縞模様をみる。全体形は不整長方形をなし、厚さ5.0cm前後で均一な厚みを持つ板状石材核である。片面には大まかな剥片剥離痕を残すが、肉薄く剥離され、一方の面には第一次剥離面を幅広くとどめている。全体的には剥片剥離作業は進行してなく、石材核当初の原形をあまり変えていない。（２）は楕円形礫の長軸一端に剥片剥離が集中し、両面に横長剥片を剥取した剥離痕をとどめている。（３・

4）は、やや不定形で、側面観は逆三角形状を呈する。剥片剥離は主に側面からなされており、横長剥片剥離痕を鮮明にとどめる。第55図（1・2）は、不整長方形をなし、剥片剥離はあまり進行してなく、原礫面を両面に幅広く残している。（3）は自然礫を半裁した大型剥片素材で、側面より剥離された剥片剥離痕を一部にとどめている。（4）は剥片剥離作業の進行した資料で、全体的に身は痩せ細り小型化している。周縁から剥離された剥片剥離痕を両面にとどめている。

スクレイパー（第55図5～8）

4点のスクレイパーは総て頁岩製で、横長剥片を素材とする。（5・7）は共に身の片面に自然面を残している。（5・6）は共に長軸の一辺に両面より入念に押圧剥離を加え直線的で鋭利な刃部を形成する。（7・8）も長軸の一辺に刃部を形成するが、その加工は粗く粗製で、刃部は外湾する。

（3）A－2区の遺構と出土遺物

A－2区はA－3区と共に、本遺跡発見の端緒となった個所で、調査に着手した当初は既に配石の大部分は地表面に露出した状態を呈していた所である。配石は大小合わせ4基検出されているが、遺構内からの遺物は極めて少ない（第56図）。これは発見当初、遺物のほとんどが発見者によって拾い上げられていたことに起因する。それらの遺物については出土個所が明確なことからA－3区の後に紹介する。以下、4基の配石遺構を第1号から順次解説してみよう。

第1号配石（第57図）

やや不整形ではあるが、直径約1mに配置したものである。河原石は円形、楕円形をなし、どれも扁平礫で、大きさは25cm～30cm前後のもの約20個を用い、環状に並べられた中央の位置にも扁平礫が置かれ、配石の中に石材核1点も組み込まれている。内部より第4D類浅鉢口縁部片の出土をみる。

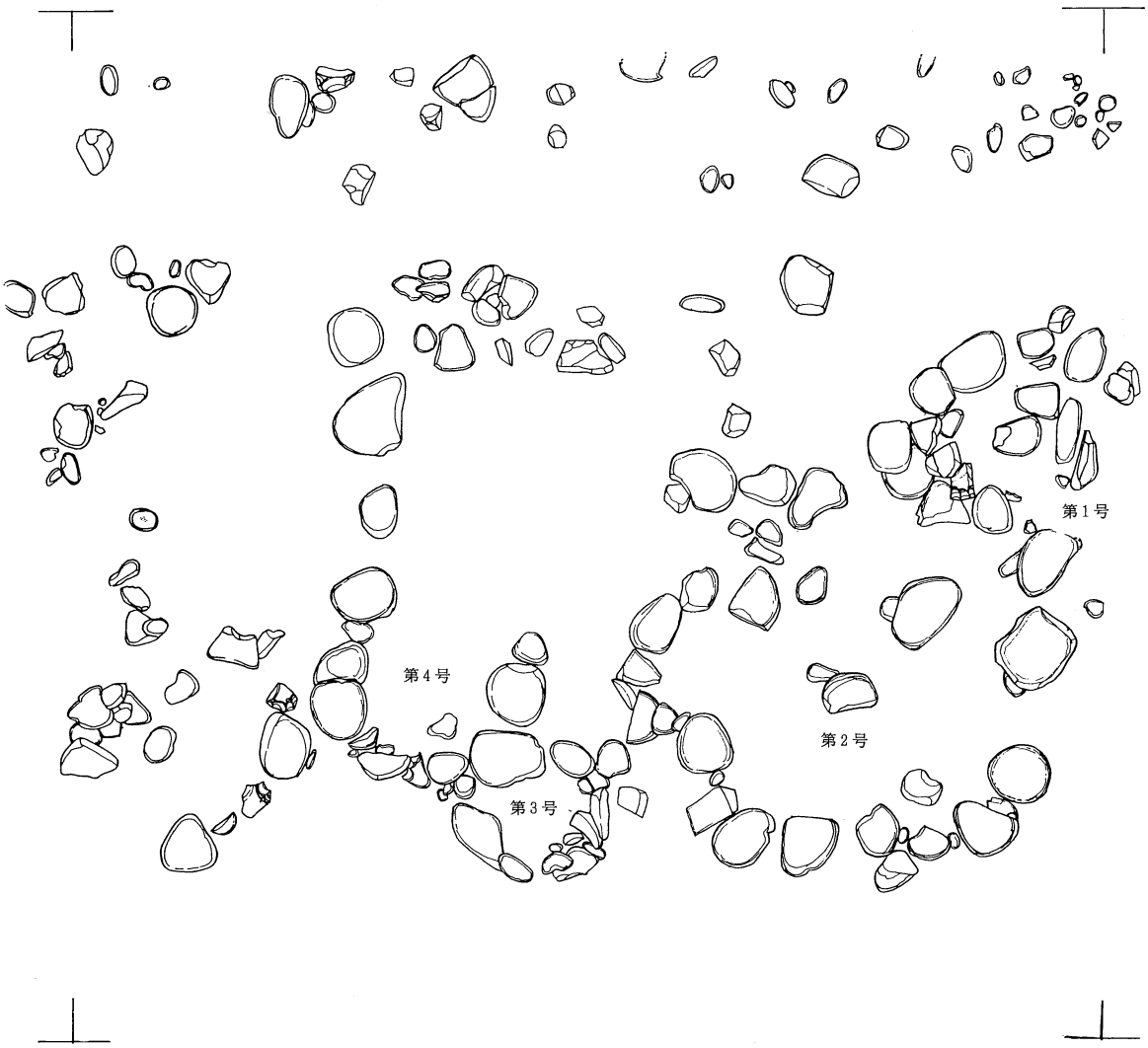
第2号配石（第57図）

先の第1号配石に接して形成された配石で、直径約2mを測り、約30個の河原石で囲んでいる。河原石は第1号に比べやや大き目の直径40cmの石が主体をなし、中には円形をなすもの、それに近い形状のものなどが目立つ。本配石にも中央に石が置かれている。用いられている河原石はどれも扁平で、座りのよい石が意識的に選ばれているかのようである。内部からは第4D類深鉢口縁部片や胴部片、第4B類深鉢胴部片などが出土している。

第3号・第4号配石（58図）

第3号配石

直径約80cmの小規模な配石で、河原石15個を用い環状に配置している。石は大小のばらつきが見

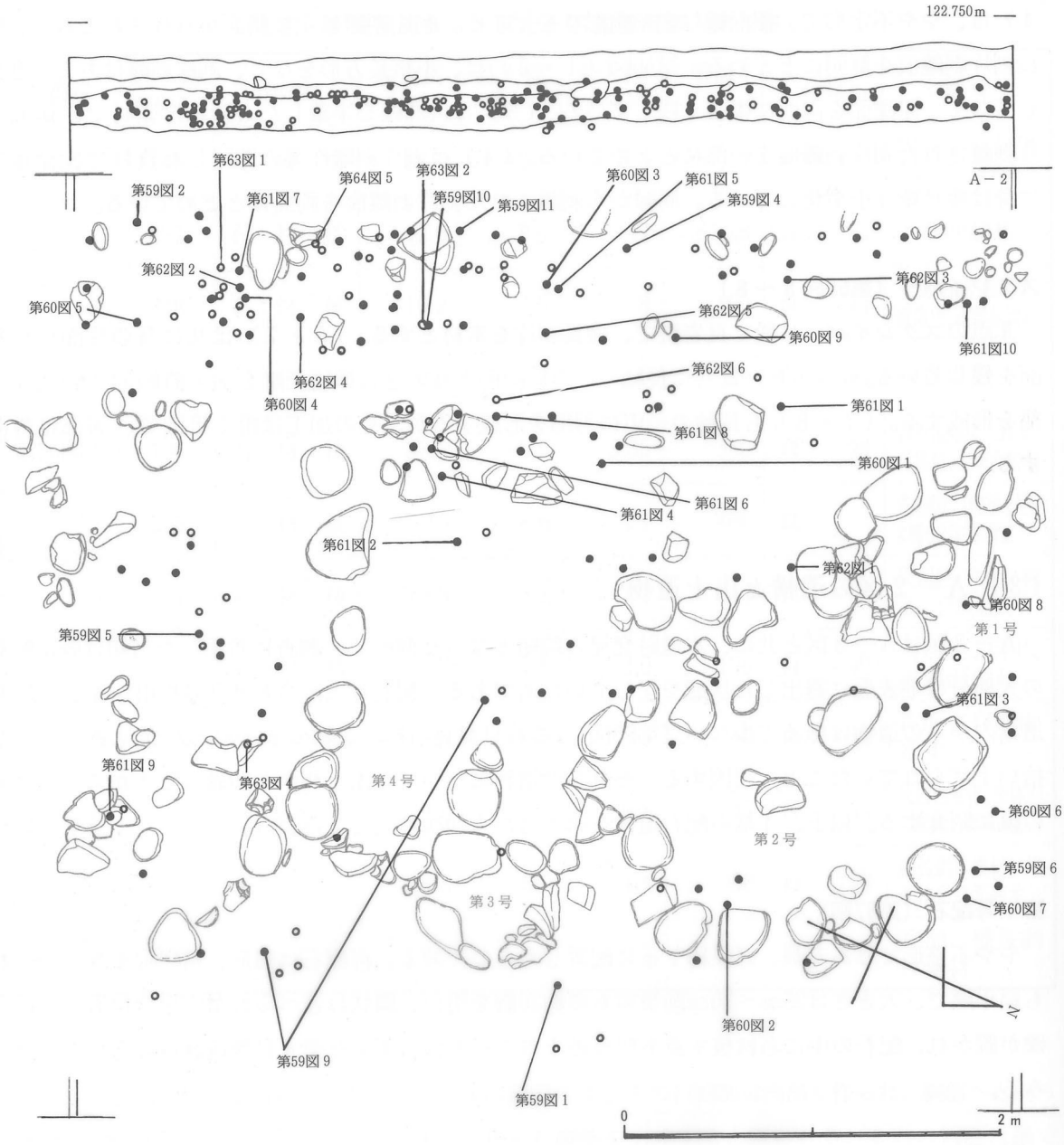


第56図　A－2区出土遺物平面、垂直分布実測図

られ、中央部には石は置かれてなく空間を設けている。内部からの出土遺物はない。

第4号配石

「U」字状に河原石を配置したタイプで、12個の石を用いている。河原石は直径約30㎝の大きさのものを主体とするが、途中を拳大礫でつなぎ「U」字形としている。内部からの遺物は確認されなかった。

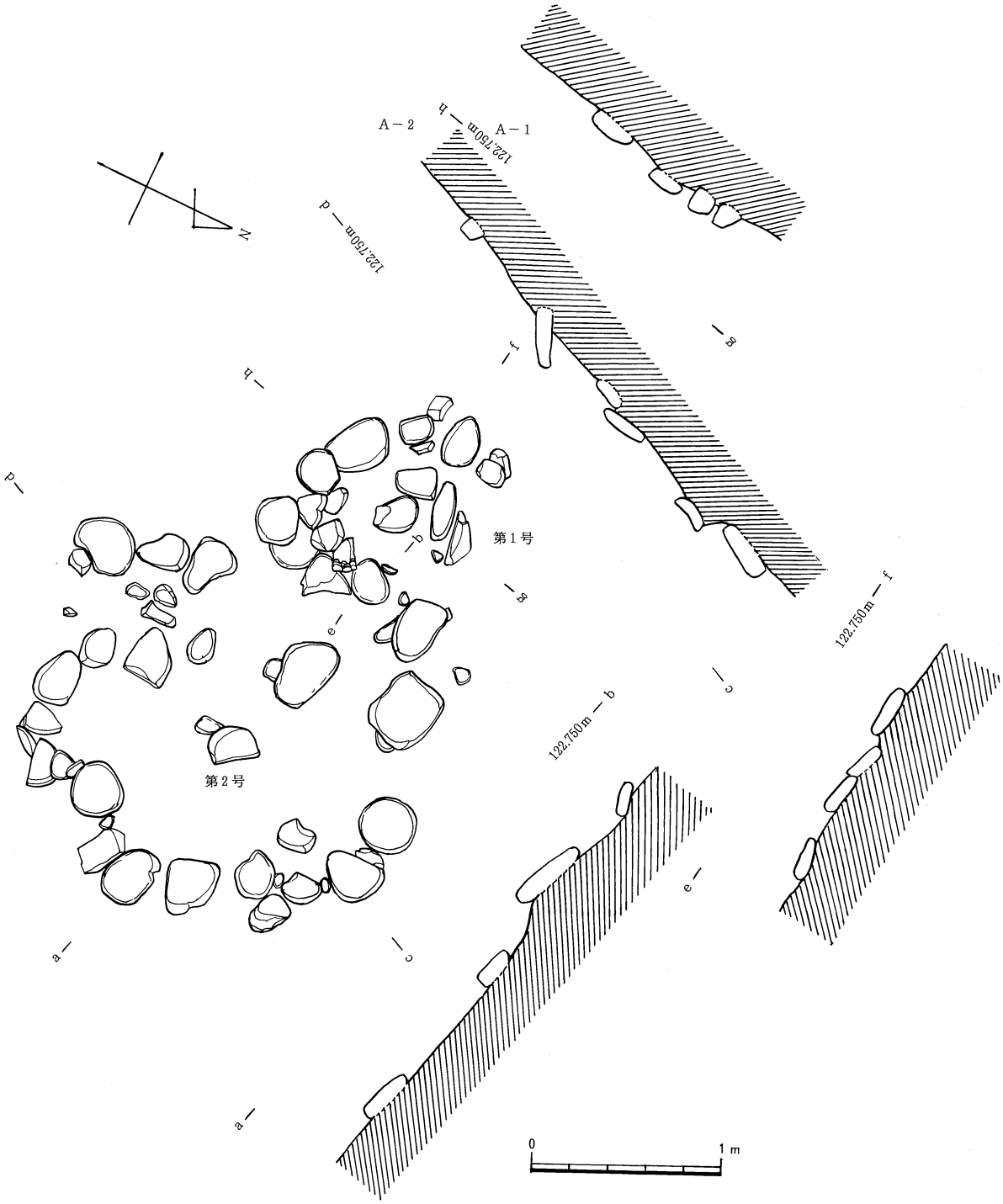


第56図　A－2区出土遺物平面、垂直分布実測図

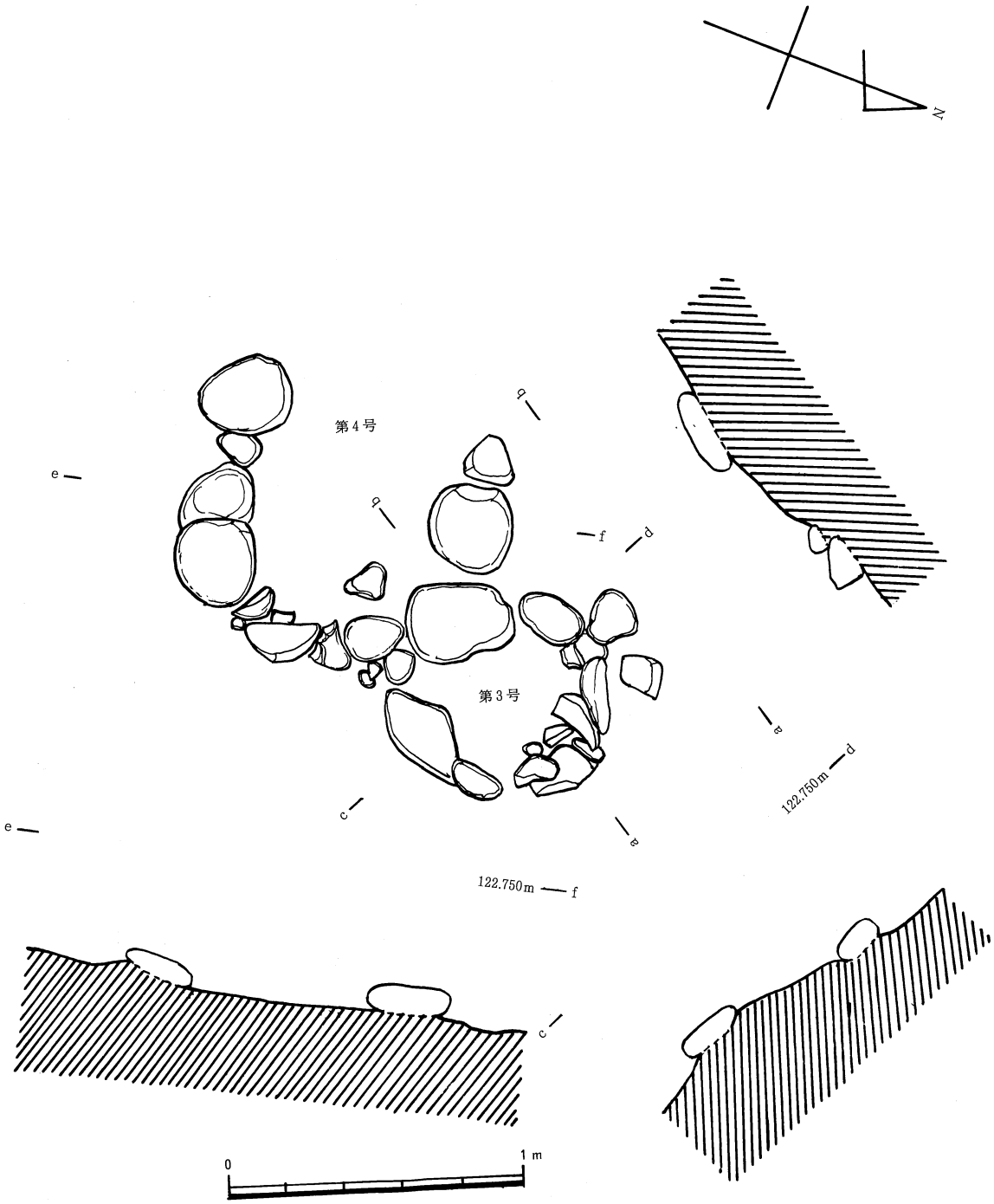
られ、中央部には石は置かれてなく空間を設けている。内部からの出土遺物はない。

第4号配石

「U」字状に河原石を配置したタイプで、12個の石を用いている。河原石は直径約30cmの大きさのものを主体とするが、途中を拳大礫でつなぎ「U」字形としている。内部からの遺物は確認されなかった。



第57図　第１号、第２号配石遺構実測図



第58図　第３号、第４号配石遺構実測図

土器（第59図～第62図）

土器は第４Ｄ類を主体に、若干の第４Ｂ類、第４Ｃ類などがある。

第４Ａ類（第59図１）

深鉢口縁部片で、器壁は強く外反し、端部はわずかに肥厚させ丸くおさまる。外面には太い沈線１条が口縁に平行して巡り、沈線末端はとぎれて左右対向させている。沈線の下側には縄文ＲＬとなる帯縄文が施され、頸部は箆研磨され無文となる。

第４Ｂ類（第59図２～６）

深鉢口縁部片（２・３）は、緩い波状口縁を呈し、波頂部には蛇行する紐状隆起文が貼付され、外面にはＬＲとなる縄文地に２条の平行沈線と１条を波状文とする文様が直接描かれている。（４）も波状口縁を呈し、太い沈線が口縁に平行し１条巡り、この沈線は途中、小さく入組文を形成する。この沈線の下側に２条の平行沈線が描かれている。（５）は器壁が薄く、直立している。縄文ＬＲとなる外面には平行沈線１条とその下側に２条巡らし、上段の沈線に接し小さく円文を置き、円文を中心とし２条の平行斜線文を描き構成させている。（６）は胴上部片で、１条の太い沈線で横位に１条描き、それに接して斜行沈線をみる。

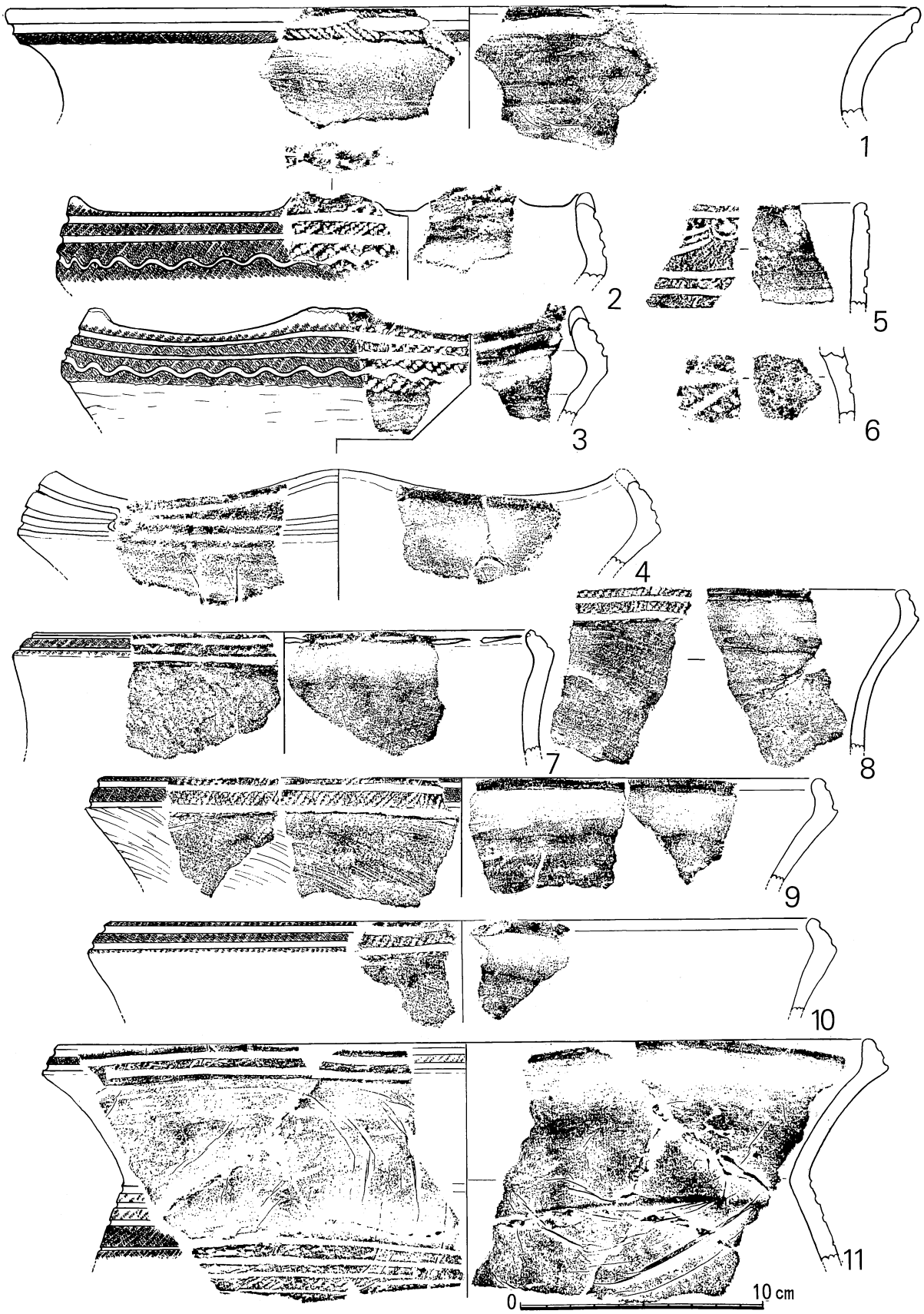
第４Ｃ類（第59図７～11）

深鉢の口縁部片で、(11) は胴上半部をとどめている。無文となる頸部は弓状に長く外反させ、口縁部は第４Ｂ類に比べやや萎縮するが、端部は膨らみ丸みをなす。文様帯は口縁と胴上半部に持ち、口縁では太い沈線２条を平行させ、口縁内面は無文となるものと、中に押し引き状刺突文を連続施文するものをみる。(11) は胴上部文様をとどめるものであるが、４条の平行横直線文を描き、その下側に緩やかに斜行する沈線が逆三角形文を描いている。これらの文様はＬＲとなる縄文を地文とし、その面に直接描くのを特徴とし、第４Ｄ類に顕著な斜行刻目文を全く見ない。

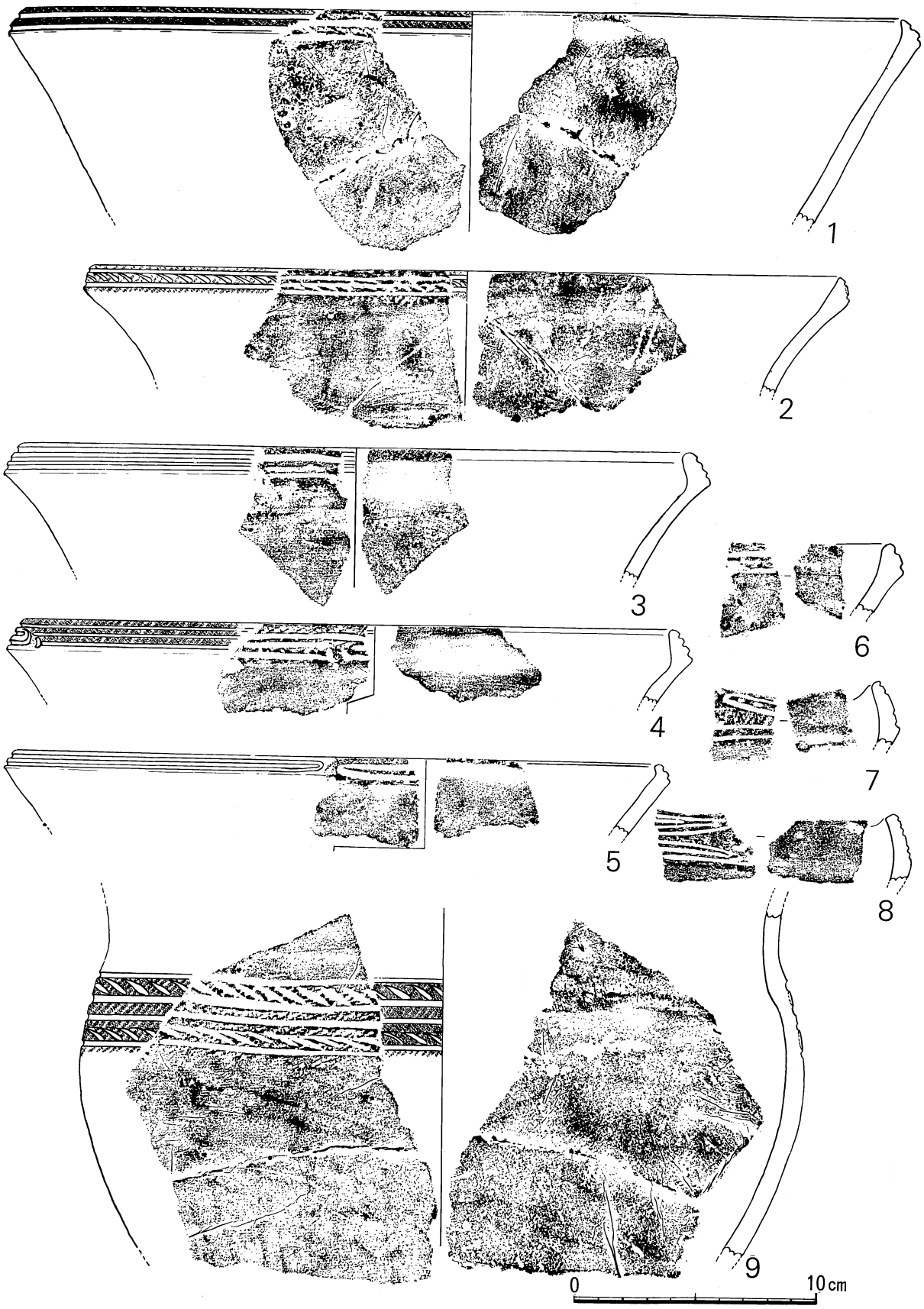
第４Ｄ類（第60図１～９、第61図１～５）

（１～６）は深鉢の平縁となる口縁部片で、緩やかに外反する無文の長い頸部を持ち、口縁部は「く」字状に内折させ、その端部は尖り気みとなる。口縁の立ち上がりは第４Ｂ類に比べ、より短かく萎縮退化する。口縁外面には２～３条までの平行横直線を描き、沈線間に斜行刻目を連続施文するもの、列点状の短沈線を対向さすもの、「⊃⊂」文となるものをみる。（７・８）は波状口縁を呈する口縁部片で、（７）は口縁に平行する２条沈線の中に殻粒状の列点刺突文で飾り、その下位に２条の平行沈線を描く。（８）は４条単位の沈線を波状口縁に平行させ、その下位に３条単位の沈線を平行させて文様構成させている。

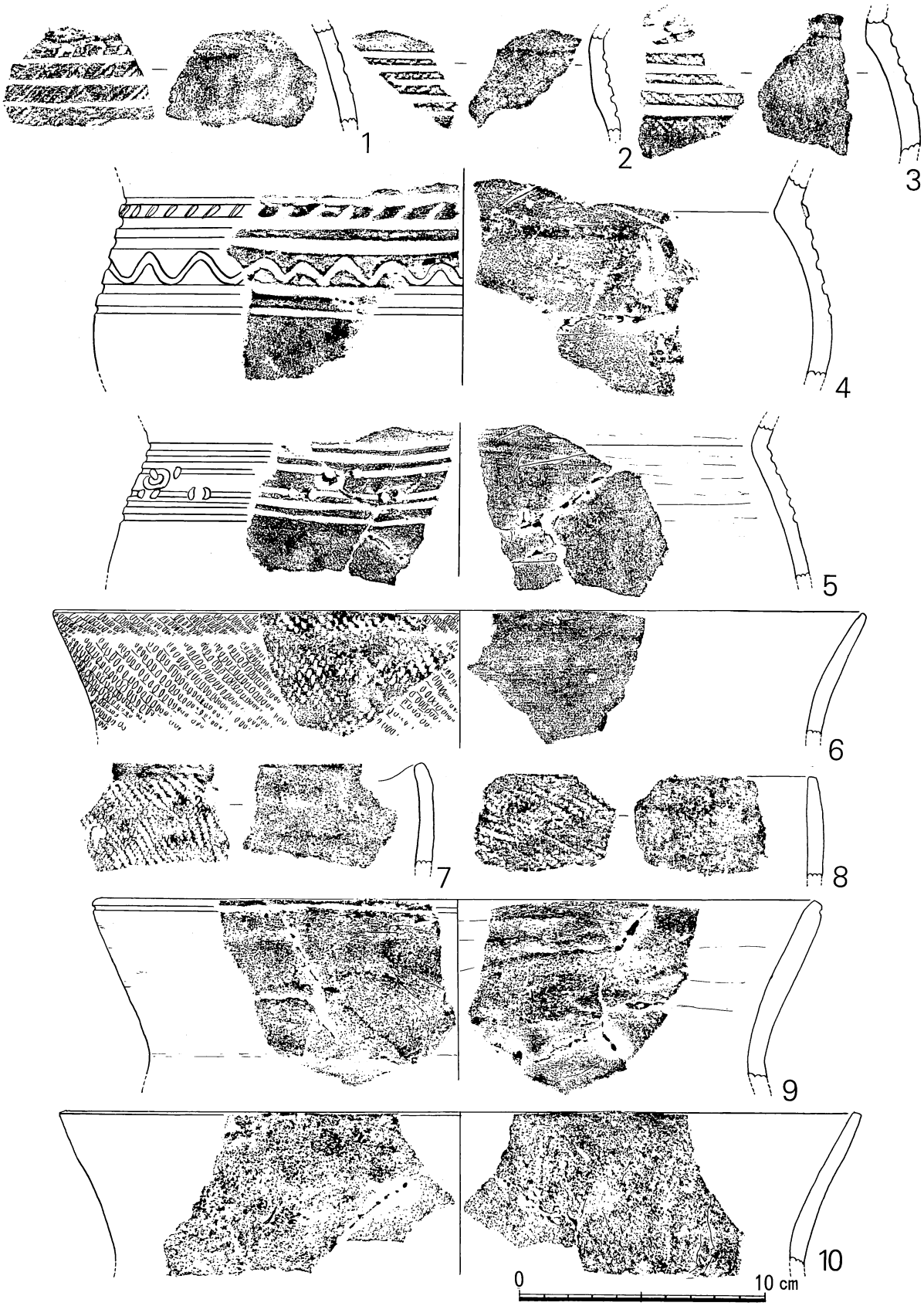
第60図（９）、第61図（１～５）は深鉢の胴部片である。第60図（９）は本類土器深鉢胴部の典型的なもので、胴上部に４条の平行横直線を描き、沈線間に斜行刻目を上下２段に飾り文様構成する。第61図（１～３）は、胴上部に４条～５条の平行横直線を描き、（１・３）は胴、頸部の境目に列点文を連続施文する。同図（４）は比較的太い沈線が胴部を５条横走させ、その沈線間に斜行刻目と波状文を描き文様構成させている。同図（５）も胴部に５条の横走する平行沈線を描き、沈線の末端に列点文を対向させたり、対向文の下に「Ｃ」字状文を上向きに描くなどして文様構成させている。以上の本類土器は縄文を地文とする面に直接文様を描くものと、無文地に文様を描く２



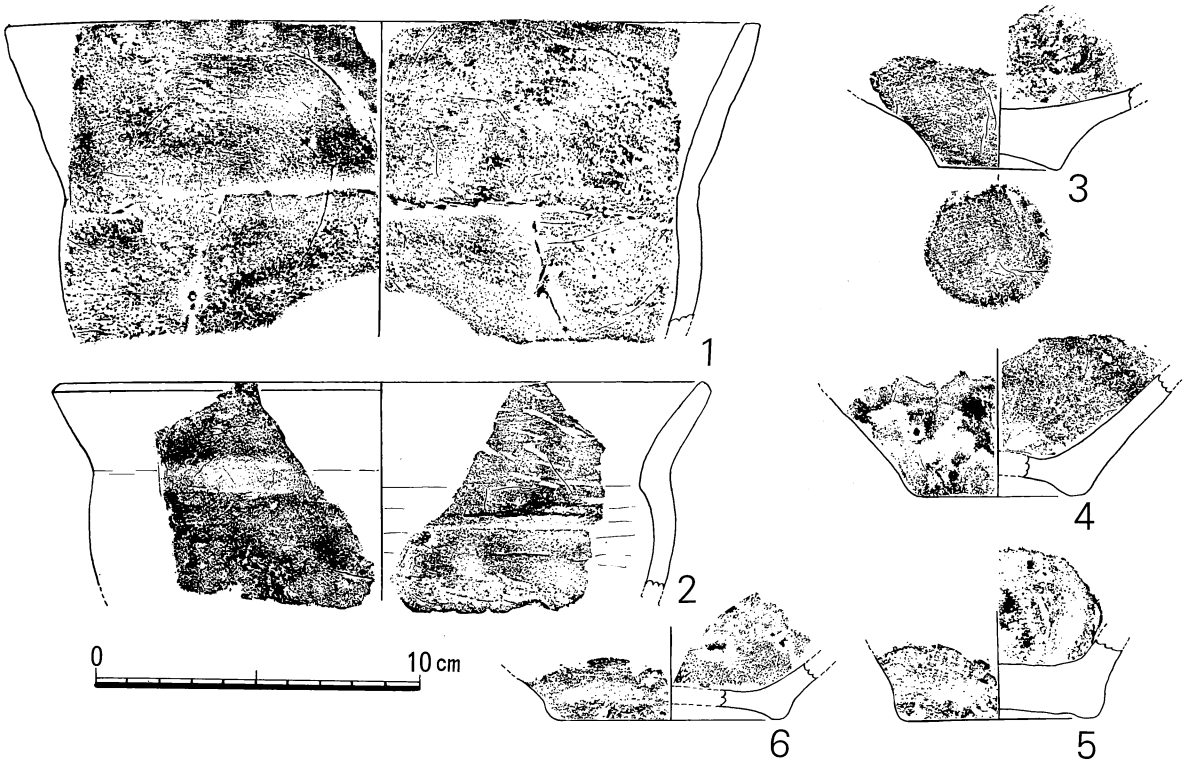
第59図　大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土土器



第60図　大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土土器



第61図　大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土土器



第62図　大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土土器

タイプがみられ、前者の縄文はＬＲを主体とし、若干ＲＬとなるものをみる。

第４Ｅ類（第61図６～８）

資料は少ない。深鉢と浅鉢があり、総て口縁部片である。（６）は深鉢で器壁は緩く外反し、端部は尖り気みとなる。外面には縄文ＲＬが施文されている。（７・８）は浅鉢で、口縁は緩く内湾し端部は（７）が丸みをなし、（８）は尖り気みとなる。外面の縄文は両者共ＲＬである。

第５Ｂ類（第61図９）

直線的に延びる頸部は長く、口縁端部は丸みをなし、口唇直下の外面に細い沈線１条が巡る。

第５Ｃ類（第61図10、第62図１・２）

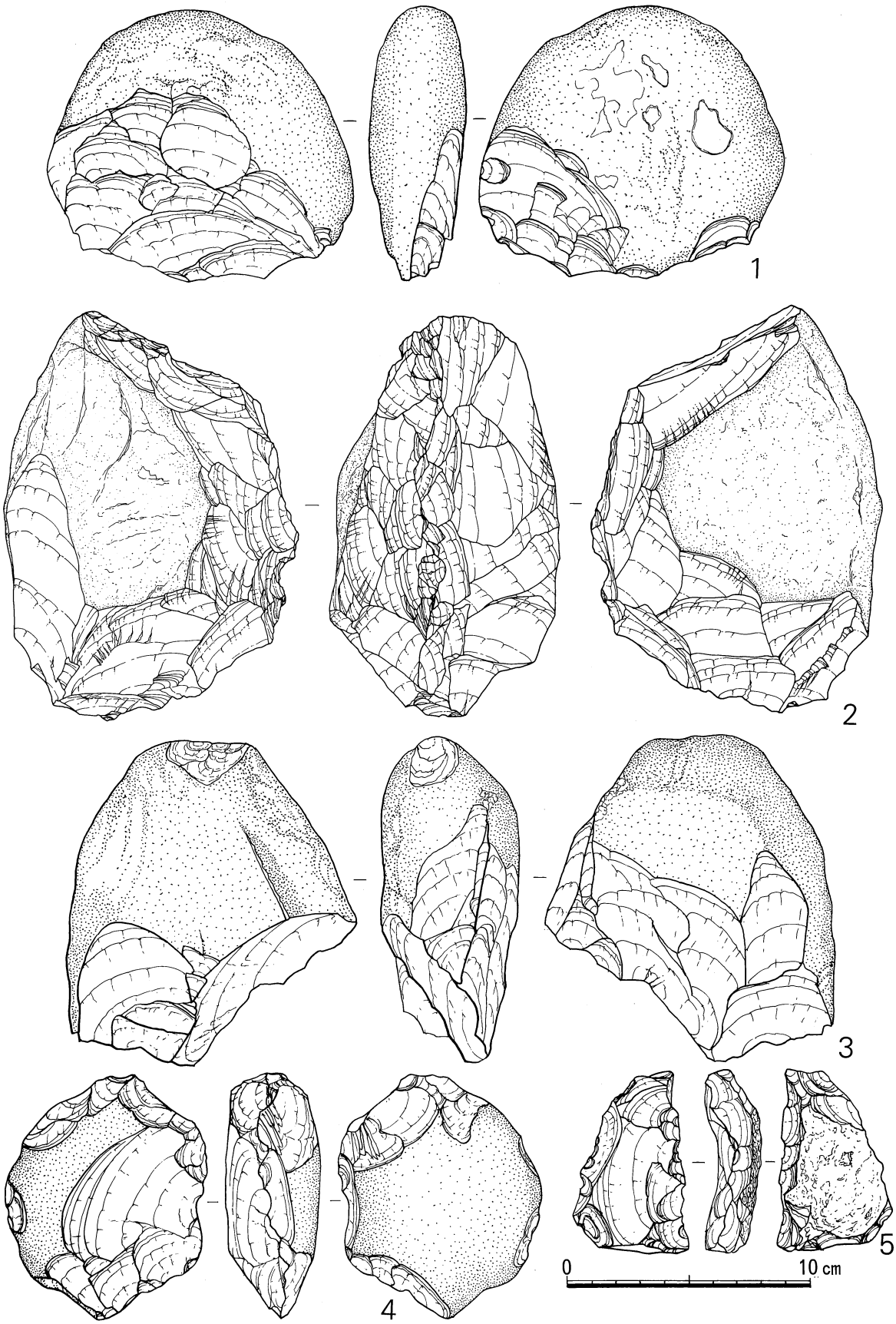
深鉢のみで、第61図（10）の口縁は緩く外傾し、端部は水平にカットされ平坦面を持つ。第62図（１・２）はやや小型で、最大径を口縁に持ち、胴部はあまり膨張させていない。共に頸部は直線的に延び、外傾させ、口縁端部は平坦に調整されている。

底部（第62図３～６）

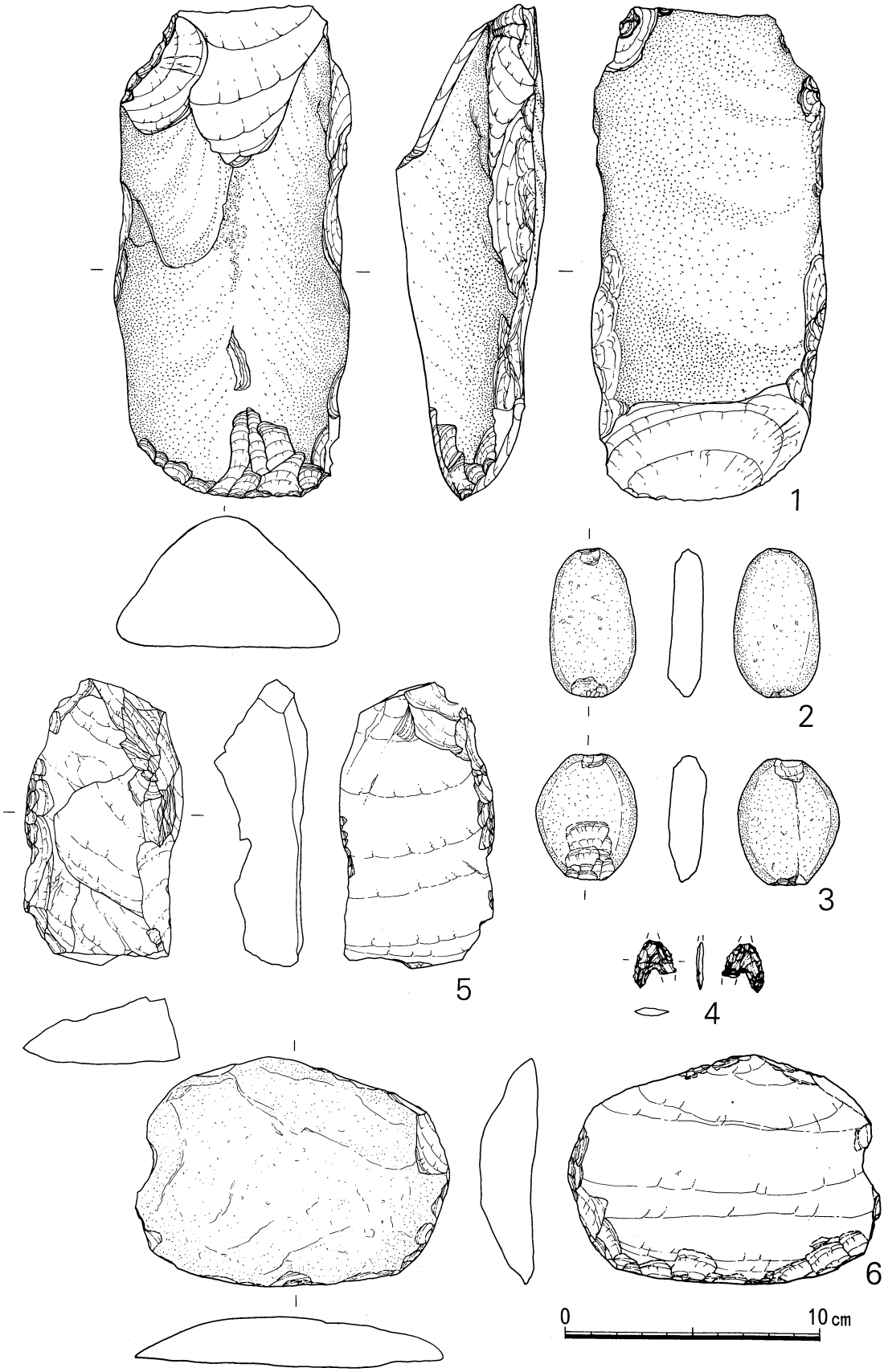
底径3.5㎝の小さいものから、7.5㎝までのものを含む。これらは総て底部外縁からそのまま上がる上げ底を呈し、（３・５）は肉厚く、（４・６）は薄手である。

石器（第63図・第64図）

石材核を主体に若干の石錘、石鏃、スクレイパーなどである。



第63図　大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土石器



第64図　大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土石器

大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土土器観察表（第７表）

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径（cm）	器面調整・色調 外面	器面調整・色調 内面	胎土	焼成
第59図１	52	深鉢口縁部	37	暗茶褐色 縄文ＲＬ	暗茶褐色 箆撫で滑らか	細砂粒	良好
2	166	深鉢口縁部	21	黒褐色 縄文ＲＬ	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
3	ベルト内	深鉢口縁部	21	赤褐色 縄文ＬＲ	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒 金雲母粒	良好
4	38	深鉢口縁部	25	暗赤褐色 横撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	不良
5	94	浅鉢口縁部	40	黄灰色 縄文ＬＲ	淡黄色 箆横撫で滑らか	石英粒 大粒砂	良好
6	2	深鉢胴部	31	茶褐色 縄文ＬＲ	茶褐色 撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
7	表採	深鉢口縁部	22	茶褐色 縄文ＬＲ	茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
8	ベルト内	深鉢口縁部	25	暗茶褐色 縄文ＬＲ	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
9	53 71	深鉢口縁部	30	暗茶褐色斜行条痕、縄文ＬＲ	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
10	141	深鉢口縁部	29	暗茶褐色斜行条痕、縄文ＬＲ	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
11	35	深鉢口縁部 胴部	33.5 31	暗茶褐色、ススぶ付着、横撫で滑らか、縄文ＬＲ	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
第60図１	50	深鉢口縁部	37.5	暗茶褐色、縄文ＲＬ、撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
2	15	深鉢口縁部	31	黄褐色、縄文ＲＬ、撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	長石粒 大粒砂	良好
3	23	深鉢口縁部	28	暗茶褐色 横撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
4	63	深鉢口縁部	27	赤褐色、縄文ＬＲ、撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
5	90	深鉢口縁部	27	淡黄褐色 横撫で滑らか	淡灰黄色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
6	5	深鉢口縁部	29	暗茶褐色 横撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
7	3	深鉢口縁部	22	黄赤褐色 縄文ＬＲ	黄赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
8	7	浅鉢口縁部	23	暗茶褐色、朱色残存、箆撫で	赤褐色 横位箆撫で	細砂粒	良好
9	39	深鉢胴部	30	暗茶褐色、縄文ＬＲ、撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好

大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土土器観察表（第８表）

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径（cm）	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第61図１	49	深鉢胴部	21	黒褐色、スス付着、縄文ＬＲ	赤褐色横撫で滑らか	細砂粒	良好
2	65	深鉢胴部	21	黒褐色縄文ＬＲ	黄茶褐色横撫で滑らか	細砂粒	良好
3	8	深鉢胴部	26	黒褐色、スス付着、縄文ＲＬ	赤褐色横撫で滑らか	細砂粒	良好
4	79	深鉢胴部	30	黄赤褐色横撫で赤褐色	横赤褐色横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
5	37	深鉢胴部	28.5	赤褐色箆撫で滑らか	暗赤褐色箆撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
6	66	深鉢口縁部	33	灰黄色縄文ＲＬ	灰黄色横撫で滑らか	細砂粒 金雲母粒	良好
7	170	浅鉢口縁部	32	灰茶色縄文ＲＬ	灰茶色横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
8	69	浅鉢口縁部	34	灰茶色縄文ＲＬ	灰茶色横撫で滑らか	細砂粒	良好
9	84	深鉢口縁部	30	黒褐色、スス付着、撫で滑らか	茶褐色横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
10	12	深鉢口縁部	33	灰茶黒色横撫で滑らか	黄茶褐色横撫で滑らか	細砂粒	良好
第62図１	143	深鉢口縁部 胴部	23.5	淡灰黄色、スス付着、撫で滑らか	淡灰黄色横撫で滑らか	細砂粒	良好
2	155	深鉢口縁部 胴部	21	暗茶褐色箆撫で滑らか	暗茶褐色箆撫で滑らか	細砂粒	良好
3	18	底部	4	淡黄色撫で滑らか	灰黒色撫で滑らか	細砂粒	良好
4	163	底部	6	灰赤褐色撫で滑らか	灰赤褐色撫で滑らか	細砂粒	良好
5	36	底部	6	赤褐色撫で滑らか	灰黒色撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
6	36	底部	7	灰茶色撫で滑らか	黒褐色撫で滑らか	細砂粒	良好

石材核（第63図１～５、第64図１）

（第63図１・３）は長軸の一辺に両面にわたり大きく剥片剥離痕をとどめ、他の部分は原礫面をそのまま残す。（２）は原礫の３面に剥片剥離がおよび、他の１面のみに自然面を両面にそのままとどめる。これの剥片剥離は激しく行われ、無数に残る剥離痕を３面の両面にみるが、本石材核は分厚く、石材核として余裕を十分に残す資料。（４・５）はやや小型で、前者は側面より剥離された剥片剥離痕をわずかに残す。後者はやや厚手の剥片素材で、縁辺より小型剥片を剥取した剥離痕

大宮・宮崎遺跡Ａ－２区出土石器観察表（第９表）

図番号	遺物記録No.	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石質	備考
第63図１	171	石材核	11.0	12.4	3.8	630	頁岩	青灰色、自然面広く残す
2	141	石材核	16.4	12.1	9.4	2124.84	頁岩	青黒色、両面に自然面残す
3	表採	石材核	13.4	12	5.6	990	頁岩	青黒色、頭部両面に自然面残す
4	110	石材核	9.9	8.4	4.0	340	頁岩	灰黒色、自然面両面に残す
5	表採	石材核	7.45	4.55	2.0	80	頁岩	黄灰色、片面に自然面残す
第64図１	表採	石斧未製品	19.2	9.2	5.9	1190	頁岩	灰茶色に風化変色
2	表採	石錘	5.8	3.3	1.4	37.61	砂岩	完形礫石錘
3	表採	石錘	4.9	4.0	1.5	38.44	砂岩	完形礫石錘
4	表採	石鏃	1.9	1.7	0.3	0.59	サヌカイト	片脚、先端部欠損
5	147	スクレイパー	11.2	6.2	3.5	252.57	頁岩	縦長剥片素材
6	139	スクレイパー	12.3	8.9	2.3	328.09	頁岩	横長剥片素材、片面加工

をとどめている。第64図（１）は大型で長方形をなし、片面中央には丸みをなす棟を作り、断面三角形を呈する。剥片剥離は長軸の両端部にみられ、中央両面には幅広く自然面をそのまま残す。本資料は、石斧の未製品の可能性もある。

石錘（第64図２・３）

砂岩の長楕円形をなす扁平礫の長軸両端に打ち欠きを加え石錘としたものである。

石鏃（第64図４）

二等辺三角形をなすサヌカイト製で、先端と片脚端を欠損するが、基部抉入は比較的深い。脚端は尖り鋭く、両側縁は緩く外湾している。

スクレイパー（第64図５・６）

（５）は分厚な縦長剥片素材で、片面には粗く二次加工による剥離痕がみられ、一方の面には第一次剥離面をそのまま残す。刃部は片側面に作出され、押圧剥離による加工は粗く全体的に粗製である。（６）は大型で横長、幅広剥片を素材とし、片側全面に自然面を残し、長軸一辺に緩く外湾する刃部を片面調整によって作出されている。

（4） A－3区の遺構と出土遺物

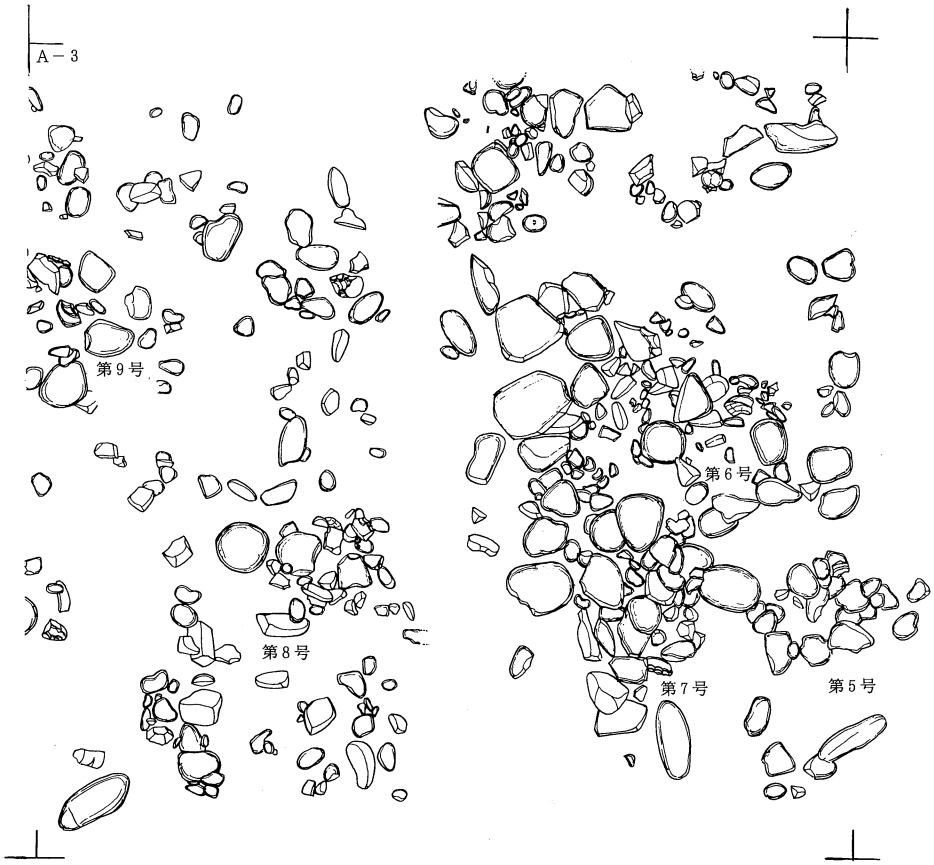
配石遺構の最も多く検出されたのが本区で、第5号～第9号までの5基が明らかである。グリッドの北側に3基、南側で2基が見つかっている。また、本区西側隅にて線刻礫1点が表採された。土器、石器などの遺物は第5号～第7号配石にほとんどみられないが、これは発見時に拾い上げられたがためで、本来は多数の遺物でおおわれていたものとみてよい。調査で確認された遺物はグリッド内全面にほぼ満遍なく出土分布し、その残存率は比較的良好である（第65図）。

第5号配石（第66図）

長径1.2m、短径60cmの不整楕円形を呈する小規模なタイプである。河原石は直径20cm前後の扁平礫を約21個用い形整し、河原石は楕円形を呈する形の整ったものを見るものの大部分は不定形な形状のもので占められている。なお、これの中央空間は狭く、また東側に約40cm離れて長さ約45cm、最大幅約13cmの棒状礫が1個横倒れの状態で出土している。本配石内部からは遺物の出土はない。ただ近くから第4D類深鉢胴部片1点の出土がある。

第6号配石（第66図）

本配石は規模の大きい第7号配石に接してみられるもので、直径30cmから20cm前後の扁平河原石約24個を用い、石に大小のばらつきはあるものの環状に比較的形よく形整されている。中央に1個



第65図　A－3区出土遺物平面、垂直分布実測図

（4）Ａ－３区の遺構と出土遺物

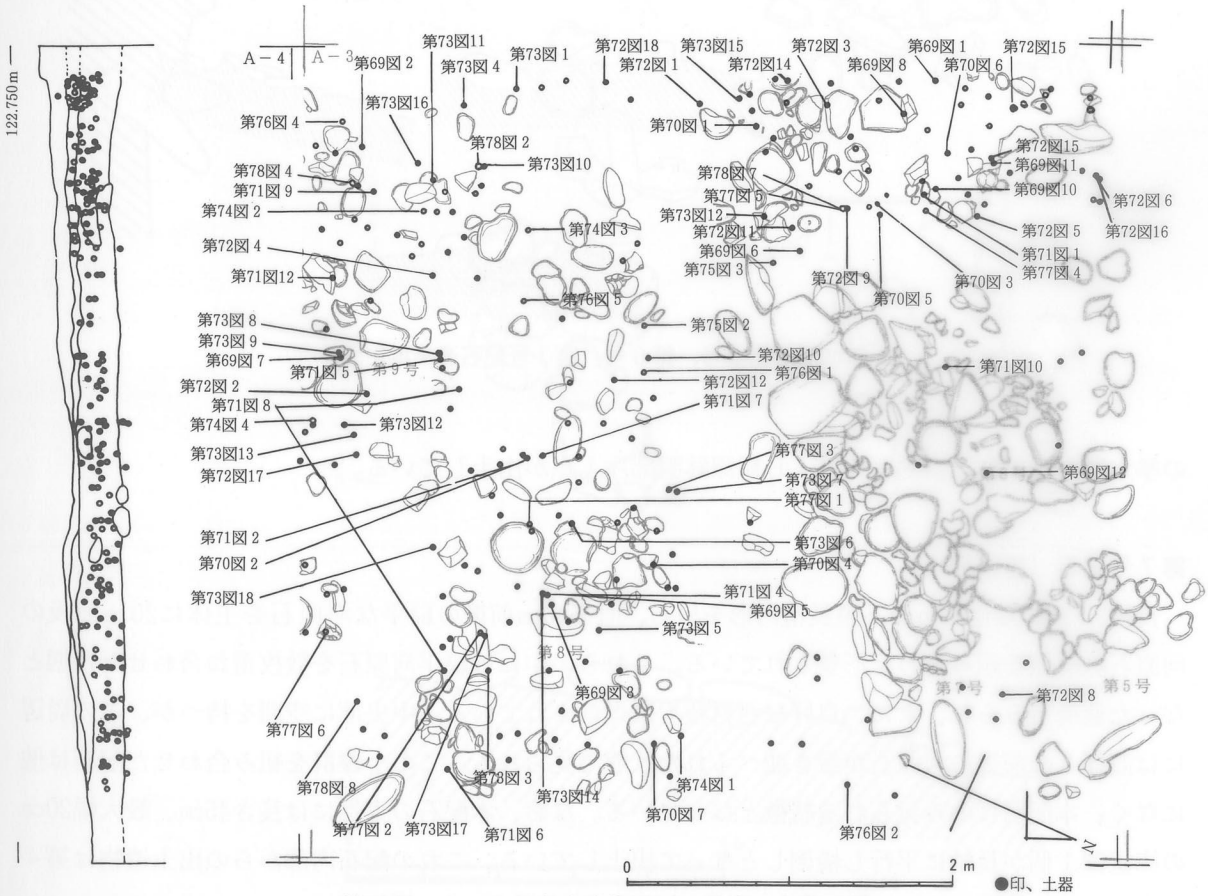
配石遺構の最も多く検出されたのが本区で、第５号～第９号までの５基が明らかである。グリッドの北側に３基、南側で２基が見つかっている。また、本区西側隅にて線刻礫１点が表採された。土器、石器などの遺物は第５号～第７号配石にほとんどみられないが、これは発見時に拾い上げられたがためで、本来は多数の遺物でおおわれていたものとみてよい。調査で確認された遺物はグリッド内全面にほぼ満遍なく出土分布し、その残存率は比較的良好である（第65図）。

第５号配石（第66図）

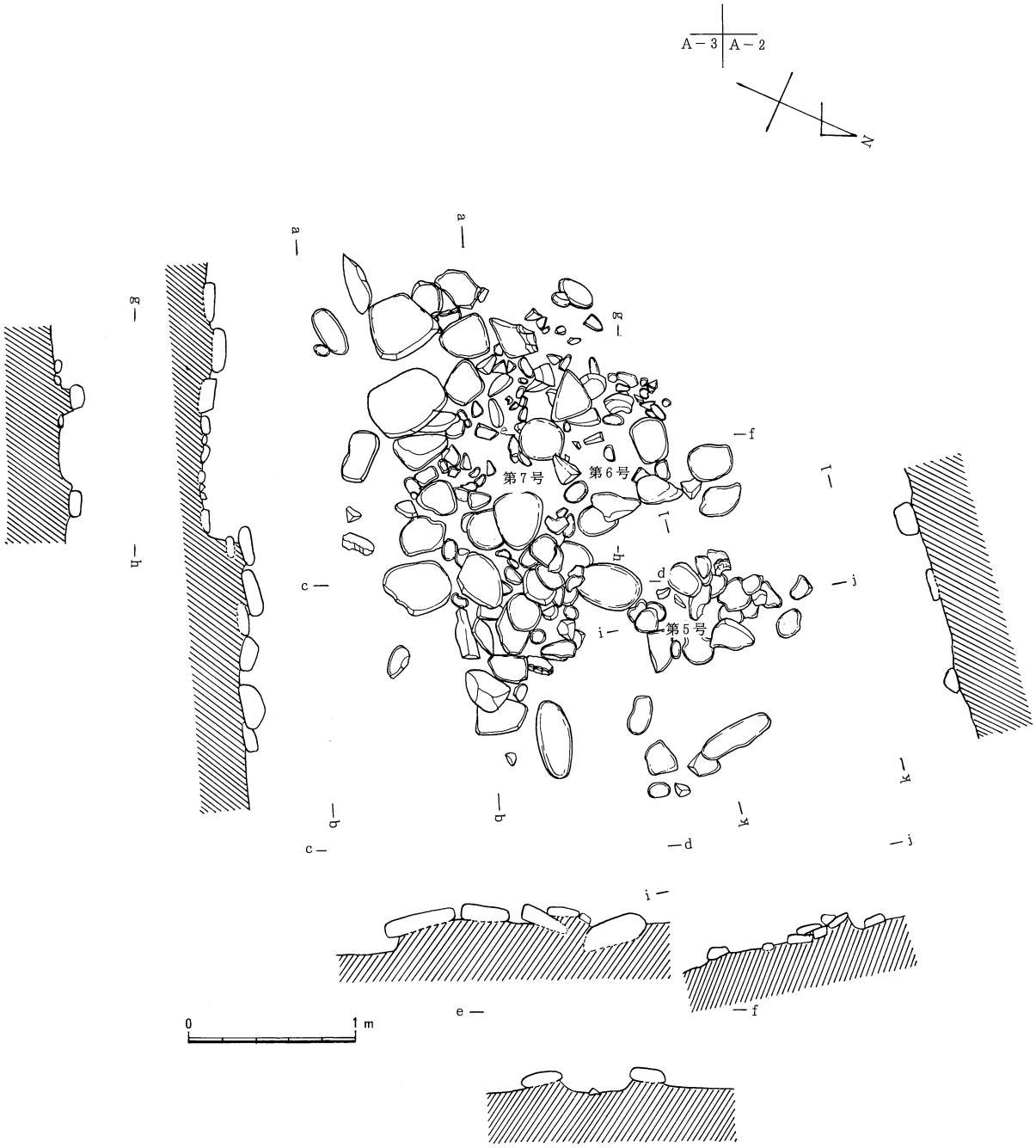
長径1.2ｍ、短径60㎝の不整楕円形を呈する小規模なタイプである。河原石は直径20㎝前後の扁平礫を約21個用い形整し、河原石は楕円形を呈する形の整ったものを見るものの大部分は不定形な形状のもので占められている。なお、これの中央空間は狭く、また東側に約40㎝離れて長さ約45㎝、最大幅約13㎝の棒状礫が１個横倒れの状態で出土している。本配石内部からは遺物の出土はない。ただ近くから第４Ｄ類深鉢胴部片１点の出土がある。

第６号配石（第66図）

本配石は規模の大きい第７号配石に接してみられるもので、直径30㎝から20㎝前後の扁平河原石約24個を用い、石に大小のばらつきはあるものの環状に比較的形よく形整されている。中央に１個



第65図　Ａ－３区出土遺物平面、垂直分布実測図



第66図　第５号、第６号、第７号配石遺構実測図

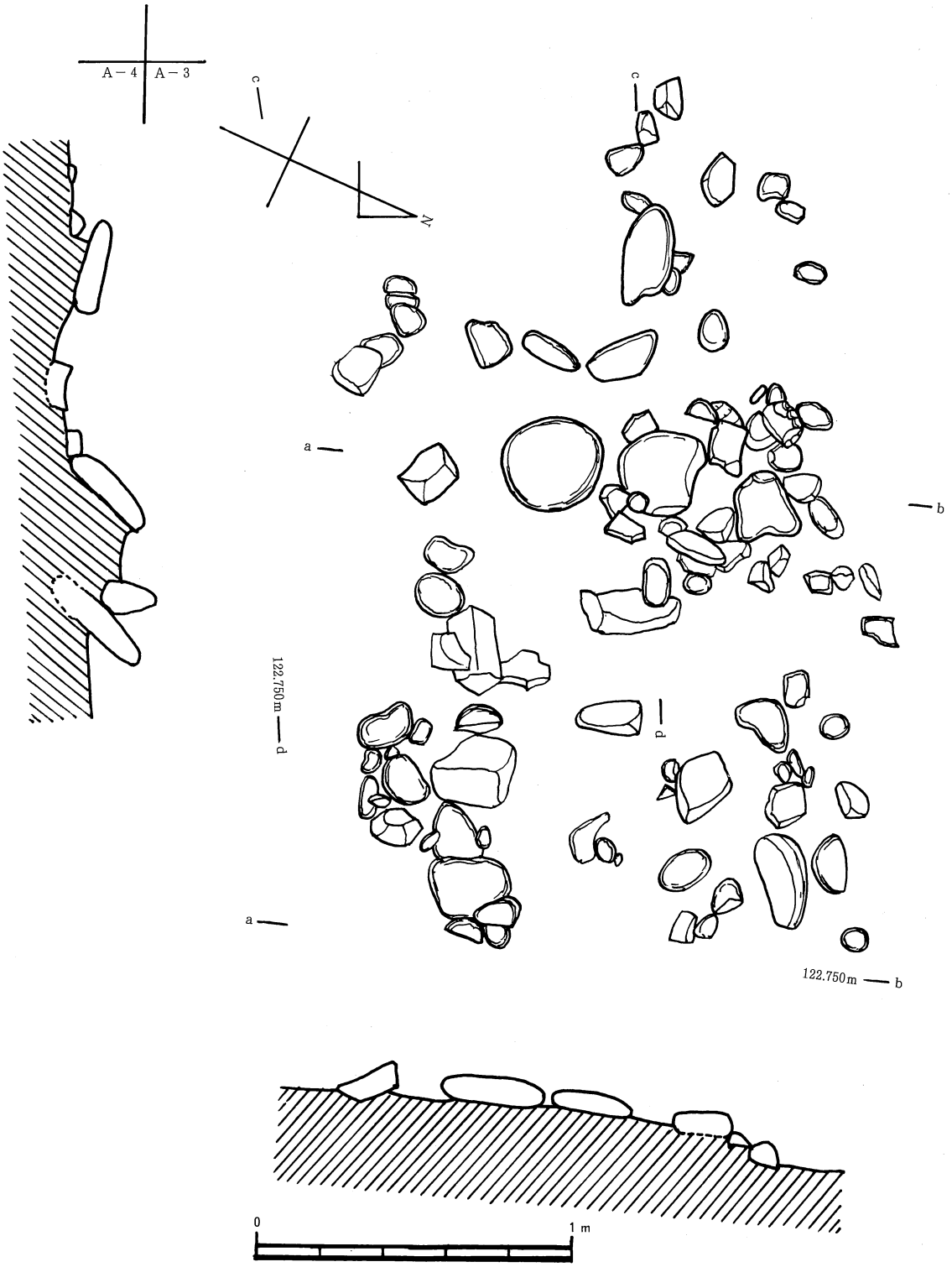
の拳大礫が置かれ、内部から第４Ｂ類深鉢胴部片１点が出土している。

第７号配石（第66図）

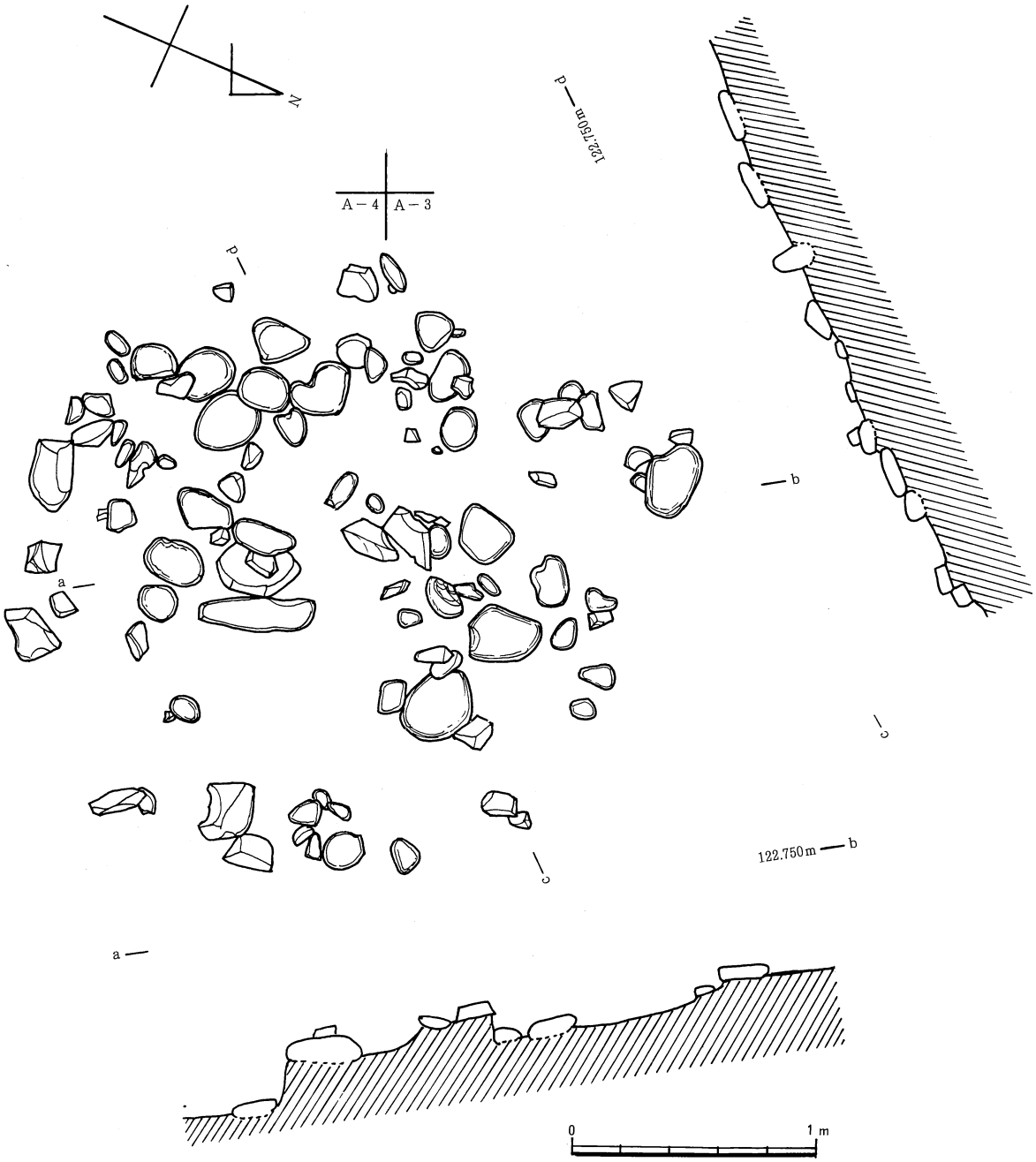
長径2.7ｍ、短径１ｍの不整長楕円形を呈し、直径40㎝前後の扁平な河原石を主体に20㎝前後の河原石約65個を組み合わせ形整されている。これらの中には扁平河原石を数枚重ね合わせた状態となった個所もみられ、また、良好な石材核も数点含まれている。中央部に空間を持つが、この周辺には直径５㎝前後の河原石が敷き並べられた状態で見られる。この小礫群を組み合わせた配石は他になく、本配石にのみ見られる特徴となっている。なお、本配石の東端には長さ45㎝、最大幅20㎝の棒状礫１個が長軸に平行し横倒しとなって出土している。これの配石内部からの出土遺物は第４Ｄ類深鉢口縁部片１点と石器剥片１点のみである。

第８号配石（第67図）

本配石は、本来環状を呈していたものであろう、その形状が崩れたものとみられるもので、河原石を長径1.4m前後の範囲に雑然と配置されたものである。用いられた河原石は約50個を数え、大きい河原石は直径30cm前後、小さなものは拳大のものまでと大小にばらつきが看取される。中央の



第67図　第８号配石遺構実測図



第68図　第９号配石遺構実測図

空間部に本配石で最も大きな直径約30cmを測る円形に近い扁平河原石が置かれている。本配石内には良好な遺物が比較的多く、第４Ｂ類深鉢口縁部片、浅鉢口縁部片、第４Ｄ類深鉢口縁部片、第５Ｂ類浅鉢口縁部片などと、磨石が出土している。

第９号配石（第68図）

本配石はＡ－４区に約２分１部分が入り込んでいるものであるが、ここではＡ－３区の中で解説

することとした。直径約2.2mにやや不整形ではあるが環状に河原石を配置するもので、河原石は中央空間にまで崩れ移動した状態を呈する。河原石は、どれも扁平で、その大きさは直径30cm前後のものから拳大礫まで大小にばらつきがみられる。中央近くに長さ約50cm、幅約17cmの棒状となる河原石が横倒れの状態で出土し、石材核なども組み込まれている。内部からの遺物は比較的多く、しかもその出土はA－3区側に集中してみられ扁向している。それらの遺物で最も多いのは第4D類土器で、次いで第4B類土器、第5A・B・C類土器などと、第6A類、第6B類深鉢口縁部片と胴部片が1点ずつ出土している。また第4E類深鉢胴部片1点もみられるが、これは外面に朱色を鮮明に残す資料。石器では良好な石材核3点とスクレイパー2点が出土している。

土器（第69図～第73図）

第4B類（第69図1～14、第70図2）

深鉢を主体とし浅鉢がある。器形は、無文となる長い頸部が弓状に外反し、口縁部は「く」字状に内折させ端部は丸く肥厚さす。深鉢は波状口縁と平口縁となるものがみられ、波状口縁（1・2・4）は波頂部に粘土紐貼付文を持ち、中には「∞」字状文を描くもの（4）もみる。口縁外面にみる文様帯は比較的幅広く、縄文を地文とする面に3条単位の沈線を描き、内1条を波状に描き構成する。（4）は2条単位の平行沈線を巡らし、その沈線間に縦位の短直線3条を描き主文様を形成する。深鉢胴部は最大径を上半部に持ち、その外面に横帯状に文様帯を持つ。文様は口縁同様、縄文地に直接太い沈線で逆三角形文を連続転回さすのを特徴とする。（6・7・9・14）は、その文様の一部をとどめるもので（12）は胴部に小さく描かれた入組文をみる。中には（10）にみられるような4条単位の平行横直線を巡らし、その途中を縦位の短直線2条を描き文様構成するものもみる。また稀には精製研磨された器面に、縦位に2条単位の沈線を描き、その沈線間に縄文を充填させ、さらに沈線中に小さな列点文を密に連続施文させ飾るものもみる（11）。

浅鉢形土器（第69図5・8、第70図2）口縁が緩く内湾気みに立ち上がるもの、「く」字状に緩く内折さすものがみられ、その端部は丸くおさまる。文様帯を口縁外面に持ち、縄文を地文とする面に直接描かれる。（5）は口縁に平行する2条沈線と、その末端に縦位の短直線が描かれ、（8）は太い3条単位の沈線が口縁に平行し巡らされている。第70図（2）は波状口縁を呈し、口縁外面には逆三角形文を横位に連続転回させて文様構成している。以上、第4B類土器にみる縄文の撚りは原則としてLRを主体とするものの、本資料中にはRLが半数近く看取される。

第4C類（第70図3～7、第71図2）

総て深鉢で、平口縁を呈する。無文となる長い頸部は弓状に外反し、口縁は「く」字状に内折させ端部は第4B類を踏襲し丸みをなす。文様帯は口縁と胴上半部に持ち、口縁部は2条の平行横直線を巡らし、沈線末端に列点状の短直線を左右対向させて主文様を形成する。口縁内面に押し引き状の刺突文を持つものを多く見るが、本資料にはそれをみない。胴部は、上下2段に間隔をあけて平行横直線を描き、その沈線間を1～2条単位の沈線で傾斜の緩い逆三角形文を横位に連続転回させ文様構成する。第70図（5～7）は、その胴部文様の一部をとどめている。なお、本類土器の文様は、先の第4B類同様、縄文地に直接描かれ、縄文LRで占められている。また、本類は頸部と